



来
未 夢 創
遊

ふぞろいのみらい塾3期生・・・・・・・・

3つの林檎

誕生！27人の地域プロデューサー

笑顔
夢と
元気



H15. 3. 8

まえがき

淡海に、
年齢も職業も住所も趣味も、やりたいことも、
てんでばらばらの27人がいました。

2年前、
その27人は、それぞれの理由でおうみ未来塾に入塾し、
開講式の会場に集まりました。

そして、
2年の月日が過ぎました。
年齢も職業も住所も趣味も、やりたいことも、
てんでばらばらのままでした。

でも、この2年間で、27人全員が一緒にもったものが二つだけあります。

ひとつは、「夢をかたちにすること」への強い意志。
もうひとつは、同じ、「夢をかたちにすること」への強い意志を持った、
自分以外の26人の仲間たち。

それぞれの地域へかえって、27人が夢をかたちにしたとき。
ともに喜んでくれる仲間がいること。それは、どれだけ大きな宝でしょうか。

「夢をかたちにすること」への意志と、仲間たちという、
大きな宝を得た私たちは、この淡海で、
これからそれぞれ27の新しい物語を紡いでいきます。
その物語が、淡海をより豊かに、美しく、
楽しいものにするに成功したとき、はじめて私たちは、
未来塾に恩返しができることでしょう。

その日まで、倦まず、たゆまず、目を開きながら夢を見続けましょう。
そして、また、淡海で、再会を願いながら。

かたみにおもうちよろずのころのはしをひとことに
さきくとばかりうたうなり

目次

◇ 卒塾写真	
◇ まえがき	
◇ 目次	
◇ 私達がプロデュースした講義	1
◇ お泊まり研修（コミュニケーション編）	
県内研修	5
滋賀県マキノ町～高島町	
県外研修	6
福井県今立町～大野市	
◇ 楽しかったね！塾生の活動訪問	
こんぜ桃源郷（里山保全）	7
カヌー体験講座とマキノ	8
西の村コンサート	9
ままやで日高先生を囲む会	10
◇ 「グループ分け」から「グループ研究合宿」まで	11
◇ 卒塾式	13
◇ グループ研究報告書	
駄菓子探偵団	14
ハートアンドハート	52
グリーンツーリズム	80
てんしょく	108
◇ ひとり一人の想い	138
◇ 先生ありがとう！お世話になりました。	
日高敏隆先生へのインタビュー	191
北村裕明先生へのインタビュー	192
運営委員の先生へのインタビュー	194
織田直文先生・藤井絢子先生・岸田眞代先生・辻川作男先生	
◇ 事務局から一言	197
◇ 編集後記	198
添付資料	

私たちがプロデュースした講義

入塾からサブ講義まで

①入塾式

2001年 6月9日

入塾式と塾長講演

講師／ 日高 敏隆 (総合地球環境学研究所)

講演名／ 「持続可能性と未来可能性」



入学式っぽい緊張感とどんなことに出会えるだろうというわくわく感が漂う中、先輩方、先生方に見守られながらの入塾式。大人になっても、うれし恥ずかし一年生という気分。式のあと、日高塾長の講演。「持続可能性と未来可能性」持続可能性ではなくて、未来可能性というのが適切とか。また Think-globally・Act-locally というが、ローカルに考え、ローカルに行動する事が、グローバルにつながるというお話をされ、今後、地域でがんばりたいという私達の励みになりました。



②講義

2001年 7月14日 10:00~17:00

講義名／ 「コミュニケーション」

講師／ 岸田 眞代

(おうみ未来塾運営委員・NPOパートナーシップ・サポートセンター 常務理事&事務局長)

<ジョハリの窓><理解促進問題><コミュニケーションゲーム><積極的傾聴>などについて学びました。中でも<コミュニケーションゲーム>は、ある絵を見てそれを言葉で伝えていくというものでしたが、なんと伝わらないものか、ということを実感しました。

知っているはずの自分なのに…。まずは自分を知る、仲間を知ることから。コミュニケーションゲームを通じて、頭ではわかっている、なかなかできない上手なコミュニケーションを体感。「きくばり」コミュニケーション、積極的傾聴から、上手な人間関係づくりのためのコミュニケーションを学びました。

③サブ講義

2001年 7月24日 19:00~

講義名／ 「人間関係が楽しくなる方法」

講師／ 金沢 恵美 (おうみ未来塾1期生)



「自分の性格を知ること、人との付き合いがうまく

なる」動物占いの原点・・・個性心理学を6年やっていてプロフェッサーになった金沢講師。誕生日から地球、月、太陽に3分類。マスコット(動物)に12分類。自分の本質や、周りの人とのコミュニケーションに役立たせることができたのではないかと思います。



④講義

2001年8月11日 13:30～

講義名/「パートナーシップ型地域運営のすすめ」

講師/ 北村 裕明

(おうみ未来塾運営委員長・滋賀大学経済学部長)

市民の自発性と主体性による地域のニーズや資源を発見し、それを事業化するにあたって行政の支援は何が求められるか、国内・海外の先行事例を分析し、キャッチアップ型からフロントランナー型への日本社会の変換が21世紀地域運営だということを学びました。

⑤サブ講義

2001年 8月28日 19:00～

講義名/「環境を切り口とした地域づくりと人との出会い」

講師/澤 孝彦・遠藤恵子(おうみ未来塾1期生)

先輩からグループ活動の進め方を学ぶ

1期生の中でも顕著な活動成果を挙げられているセブンドロップス。グループの成立～展開について直接お話を伺いました。どのように同期からグループが生まれたか/メンバー個々の思いからグループのミッションへの形成/チームワークのための全員参加原則やリーダーシップのあり方/外部ネットワークの重要性/リラックスし、楽しむ姿勢の重要性など、得るものが多くありました。

⑥講義

2001年9月8日 13:30～

講義名/「NPOに求められる政策形成力」

講師/ 木原 勝彬

(おうみ未来塾運営委員・NPO政策研究所理事長)



サステイナブル・コミュニティ(持続可能な地域づくり)をめざし、生活者及びコミュニティ再生の現場からのボトムアップ型政策形成シンクタンクについて学び、NPOに求められる政策形成力は何かについて学びました。

⑦サブ講義

2001年9月25日 18:30～

講義名／「市民によるNPO支援について」

講師／ 辻川 作雄

(おうみ未来塾運営委員・おうみ未来塾1期生)



持続可能なまちづくりにおいて、支援センターの重要性を学びました。ひとまかせではなく、自らが動いて汗を流さないと、成功は得られないと痛感しました。

まちづくりをおこなう大前提として、わがまちに対するほこりをもつことがあると気づいた。そのような自分を犠牲にしてまでやれるかどうか、そのようなバイタリティーがあつてこそ、黒壁のようなものができるようになりました。

⑧講義

2001年10月6日 13:00～17:00

講義名／「まちづくりと担い手」

講師／ 岡崎 昌之

(おうみ未来塾運営委員・法政大学現代福祉学部教授)



地域社会を取り巻く状況や地域再生にむけた視点について、熊本県小国町や愛媛県内子町など先進地の事例などを通してイメージが広がりました。まちづくりの担い手（地域プロデューサー）として必要な視点を学ぶことができました。

⑨講義

2002年12月16日 13:30～

講義名／「NPOで五方よし」

講師／ 藤井 絢子（滋賀県環境生活協同組合理事長）

海東英和（新旭町長）



～足もとから固めた地域づくり～

環境問題など様々な課題に対しての市民活動は、身近なところから徐々に国レベルまで広域に広げていくという視野が必要であるが、今回の藤井・海東両氏のお話から、「地域適正レベル」という視点を頂きました。つまり、地産地消の仕組みづくりなど、足元を見直し、足元の活動から固めていくことが大切ということです。

また、はじめから壮大なビジョンを思い描いてしまいがちだが、いい活動に発展しているものを振り返ってみると、必ず「スモール・スタート」ということを重視していることがわかる。一步一步ということだ。それにしても両氏のエネルギーはすごい！見習いたい！



⑩講義

2002年 5月19日10:00～

講義名/課題解決手法

講師/ 岸田眞代

(NPOパートナーシップ・サポートセンター 常務理事&事務局長)

4つのグループに分かれ問題の洗い出しを行う。問題を設定し課題が明らかになったら問題を分析。課題の重要度・優先度(目標)を設定し、解決のためにアイデアを創出。次に手順を決め総合評価を行うという手法を学んだ。グループが出来たばかりで、今後の方向性を決めるのに大変役立ちました。

⑪講義

2002年 7月13日

講義名/葦(ヨシ)との共生

講師/ 西川嘉弘(ヨシ博物館館長)ほか
水辺保全の熱き思いを学ぶ



葦を通じて、西川さんたちの西の湖から琵琶湖そして世界の湖沼へと広がる水辺環境の保全への熱き思いと実践活動の一端を学びました。そして、午後の優雅な西の湖遊覧と船上でのすき焼きパーティーでは、豊かな琵琶湖の原風景に触れることができ、自然環境について“人間は考える葦である。そして、行動する葦でありたい”との思いを強くしました。



⑫講義

2003年1月25日 10:00～17:00

講義名/ 未来組織を担う「リーダーシップ」研修

講師/ 岸田 眞代

(NPOパートナーシップ・サポートセンター
常務理事&事務局長)

リーダーに求められている要件・能力、組織における役割などリーダーシップのあり方について、グループワークを取り入れながら学びました。強固なピラミッド型の組織やNPOなどフラットな関係の組織など社会組織のあり方に変化が生じているが、どんな組織においても通用するこれからのリーダー像をとらえることができたと思います。

県内研修

滋賀県マキノ町 ～ 高島町

日 時：2001年11月18日（日）朝～13：00頃まで

参加者：浅居、川尻、糸、澤、菅、山口、田淵、名田、西村、久泉、藤井、藤田、
前川、松石、松田直子、吉見、天川（計16名）

日 程

- 7：00～ 朝食
- 8：00～ マキノ発
- 9：00～ 朽木村日曜朝市見学
- 9：30～ 朽木村発
- 10：00～ 高島町着、
ビレッジ今西さんの説明
（ビレッジ1号館）
1～4号館見学、
全体ディスカッション
（ビレッジ1号館）
- 12：30～ 昼食（ビレッジ2号館「あぶみ」）
現地解散



県内研修はマキノの内田さん塾生訪問と温泉宿泊に引き続いて、近江高島町びれっじ訪問でした。前夜の楽しい興奮さめやらぬまま朝御飯を頂き、そのまま朽木村の朝市へ。新鮮な野菜や名産の鯖ずしを買ったり、暖かいおみそ汁に舌鼓をうったりして朽木の朝を満喫したのち、一路近江高島町へ。ビレッジの今西さんにお話を伺いました。

まちづくりにはひとかたならぬ努力と根気、そして継続していくビジョンと根気が必要。そんなことを再確認させていただいた。

貴重なお話を伺うことが出来ました。アイルランドとの交流という、特に国際色とまちづくりをとりいれた試みや、観光スポットとしてまちづくりに貢献しようとする強い意欲が伺え、今後自分たちがどのようにまちづくりや地域支援事業に取り組んでいけばいいかについての参考になったと思います。

なによりも、近江高島町のしっとりした町並み、美しい琵琶湖の風景のなかに、人々の何十年にもわたる努力を改めて感じさせられた、貴重な研修となりました。

県外研修

福井県今立町 ～ 大野市

日時：2002年8月17日（土）13：00～18日（日）13：00

参加者：岡崎先生、内田、衆、澤、山口、前川、松田元、松田直子、吉見、川尻、天川
(計11名)

日程：

8月17日（土）

12：00～ 今立町パピルス館

12：15～ おそば屋さん

13：00～ パピルス館、卯立の館

14：00～ 勤労青少年ホームにて

谷端淳一郎さん「そばにかけた人生」

15：00～ 佐々木哲夫さん「今立町のまちづくり」

16：00～ 市民共同発電所を見学

17：00～ 大野市へ

19：00～ 扇屋宿泊・大野市の方々と懇親会



8月18日（日）

8：30 平成大野屋→七間朝市→ギャラリーくのり→もっこの会

→南部酒造（お酒の学校）→末吉町庵→ひだまりの家

12：00 NPO「田んぼの学校」にて昼食・説明

13：00 帰郷



8月、真夏の猛暑の中、福井県今立町と大野市へと県外研修に出かけました。テーマは、まちづくり。和紙で有名な今立町・パピルス館で和紙の奥深さに触れたあと、勤労青少年ホームにて、そば輸入会社を立ち上げられた元今立町職員の谷端さんに興味深いお話を伺い、続いて佐々木さんに今立町の文化重視のまちづくりについてお話を伺いました。その後も大野市のみなさんに暖かく迎えていただき、懇親

会で楽しいひとときを過ごさせていただきました。

大野の朝は早く始まりました。大野市のみなさまの熱意のもと、いくつものNPOを視察させていただき、大野のまちづくりについて学ばせていただきました。感性はがき展、もっこの会の方々の作品、南部酒造のご主人の取り組み、田んぼの学校での昼食とお話、全てとても良い勉強になりました。ありがとうございました。

こんぜ桃源郷（里山保全）



日時／2001年10月13日(土)

会場／栗東市

10:00～ 現地集合

バーベキュー・すき焼き会
場・準備

11:30～ 昼食

懇親会及び情報交換

13:00～ 澤氏 南京玉すだれ披露
活動エリア紹介

塾生感想より

● 熊…?いやいや「九麻ちゃん」の桃源郷

澤 九麻男さんの里山にお邪魔して、腹いっぱい「松茸」を頂きました。…とこんな調子で、感想を終われませんが参加して本当に良かったと思います。

この里山には、「ほのぼのとした時間（トキ）」が流れているようで、大人にとっても子供にとっても良い時を過ごせる様な気がしました。例えば、自分の体験から子供の頃、近くの空き地に近所から拾ってきた廃材を利用してバラックを組み立て、幾人かの悪ガキが集まって夢を語ったものでした。そんな「秘密の基地」のようなものを思い出されて、何かほのぼのと心地よいものを感じたのです。

今日、「癒し」がブームのように、にわかに注目を浴びていますが、この里山には、ずっと昔から大勢の人々がそれぞれの感覚で自分を癒すことの出来る場所だったのかもしれないですね。そういう意味で、私は子供の頃のことを思い出し、「ほのぼのとしたような、切ないような感じ」を与えられ、何時の間にか溜まっていた「ストレス」が大いに「癒された」様な気がしました。

最後に、こんな素晴らしい「里山の空間」をこのままにしないでそれぞれの思いを持った「秘密の基地」となる拠点が出来たら良いのにとと思います。(浅居)

●澤さんの桃源郷は、さすが金勝の山の中。何も無いのが魅力。澤さんの言葉から夢が一杯感じられます。皆で食べたマツタケやシイタケのすき焼きやバーベキュー。竹で炊いた御飯。まさに滋賀県は広い。湖があれば山もある。車でちょっと走るだけで自然にどっぷりとつかることができました。澤さんの10年後、どんな活動をしているのか、どんな桃源郷ができているのか楽しみ。(菅)

カヌー体験講座とマキノ



日時／2001年11月17日(土)

会場／マキノ町

14:10～ マキノ東小学校前

(カヌー体験講座)

準備→説明→準備体操

体験→カヌー返却→後片付け

(二重の虹が出ました！)

すごくきれいで感動しました)

塾生感想より

●県内研修、虹のカヌー、内田さんところ

これが3期の動きにドライブをかけた、最大の行事だったと思います。

タイミングとして絶妙でした。みんながある程度なじんできた時期に、泊りがけでゆっくりと話し合う、遊ぶ。そこには、内田さんのお人柄と活動のありかたを生で拝見できたこと、さらに、水上からの2重の虹という大幸運。伝説に残りそうな吉兆でしたよね。

翌朝の「おもしろいことになりそうでんなー。」という内田さんのエエ声が、今でも耳に残っています。(名田)

●琵琶湖をはさんで彦根と反対側に来たのが初めてでそれだけでワクワクしていました。多くの人の協力のおかげで楽しい思い出ができました。勉強しに行ったはずなのに、今思うとポカーンと口を開けていただけだったと思います。カヌーには初めて乗ってはしゃいでいましたがすでにここから？マークの登場でした。内田さんのおかげということはわかってはいるけど何で僕らは小学校のカヌーで遊ばしてもらえてるんだろー？と。しかも、小学校の先生までも応援に駆けつけてくれて、いったい内田さんとは何者や？と。学校の職員ではないけれど、地域作りという形で学校と付き合いしていく。地域との関わり方としてそんなあり方があることを実感できました。次の日行った高島町の古い空き家を利用した商売は多分僕らのグループのやりたいことをイメージすることに結局つながった。しかし、家賃が税金分だけというところまで持っていたのには驚きました。そんな物件はある、しかしそれは全部すさまじい根気の上に成り立ってる。そして、思いは実現する。そんな勇氣までもらいました。(藤田)

楽しかったね!

塾生の活動訪問 西村 ますみ

西の村コンサート

普通の民家でもコンサートができる!

「西の村」とは、将来・音楽や絵画などの趣味やレストラン、農業などをやってみたい方々に利用していただくスペースにしたいと考えております。玄関を改築したところ思いがけず音が響くようになったのをきっかけにコンサートを開くようになりました。



フルート：水野ゆりか

(京都教育大学音楽科卒・NPO 法人音楽療法の)

ピアノ：八木美砂子

(大阪音楽大学音楽部ピアノ科卒・音楽療法家)

日時／2002年1月12日(土)

会場／守山市播磨田町970

第1部

16:30～ フルートコンサート

第2部

17:30～ おでんパーティー

ひたすら……食べる。飲む。喋る。
語る。交流する。夢を描くなどなど

塾生感想より

●素晴らしい音色を聞き、心がリフレッシュしました。聞くだけではなく、一緒に楽器を持っての参加型コンサートで、「場」が一体化して、とても楽しい時間を過ごせました。大きなお鍋で食べるおでんも美味しかったです。準備して頂いた皆様に感謝の気持ちで一杯です。(松田直子)

●おでんパーティー、西村さんそこ

「西の村」という魅力的なスペースで繰り広げられたフルートの演奏会。西の村の主催者、麗しの西村さんがご尽力されたからこそ実現した催しです。私個人にとっては、ブレイクする(日本語訳：壊れる)きっかけとなった企画でした。ありがとうございますというべきか、いつもいつもご迷惑おかけしてますというべきか……。 (山口)



ままやで日高先生を囲む会



「ままや」に来ていただいてありがとうございました。
いました。

お手伝いしていただいた方々ありがとうございました。くまちゃん、お肉、しいたけ
おいしかったー。そんなに、恐ろしげに寒くもなく、本当にほっとしました。「ままや」は
人が来て下ってこそこの「ままや」ですので、また、みんなで集まりませうね。夏ならお泊
りも大丈夫です。いつでも、おくどさんでご飯炊きますよー。では、またいつか...

日時／ 2003年2月9日(日)

会場／ 甲賀町 こさじままや

14:00～ 日高先生をお迎えする

15:00～ インタビュー

15:30～ 衆さんの手作りこんにやく

おくどさんで炊いたご飯

澤さんのイノシシとしいたけ

などお酒をいただきながら

塾生感想より

ままやのままさん、ありがとうございました。おいしいお惣菜もありがとうございました。
おくどさんのご飯はやっぱりおいしかったですね。楽しいひとときをありがとうございました。
出席は無理かなと思っていたのですが、何とか仕事をやりくりして出かけて良
かったわ。) (菅)

今日は、日高先生を囲んでいいお話を聞いて、おいし
い、かまどで焚いたまんまと手作りこんにやくに、天川さ
んの見繕っていただいたお惣菜。そして、こんぜの山で取
れた、シシ汁のいのしし肉としいたけのバター焼き。どれ
も最高でした。

”ままや”ほんとにいいところですね。衆さん。心が温ま
りました。ありがとうございます。名田さんやら、菅さん
やら、西村さんやら、みなさん。お手伝いをありがとうご
ざいました。わたし、何にも手伝わずにすみませんでした。
日高先生も、本当にたのしそうでしたね。よかったです。

これからも、3期生はいい付き合いを続けて行きたいと、心からそう思いました。(吉見)



「グループ分け」から「グループ研究合宿」まで

1月19日の第1回テーマ出しから4月13日の研究合宿まで3ヶ月を費やして4つの研究グループが誕生するまでのプロセスは、和気藹々の雰囲気の中で生き生きとした活気に溢れた交流ができました。これは、入塾以来「塾生の活動訪問」でこんぜ桃源郷に行つてすき焼きパーティをしたり、マキノでカヌー体験をしたり、西の村コンサート&おでんパーティなど塾生間の交流を目的に相互理解の機会づくりに取組んできた成果のあらわれだと思いました。

1. グループ研究に当たつてのテーマ出し～グループ分けまで

1月19日～2月23日まで、計4回にわたつて個人のテーマ発表をおこないました。

①1月19日

テーマ(思い)を出し合つて、共有化してグループ分けをしてゆこうという最初のステップでした。必ず各自がテーマを出すというものではなく、聞くこと話すことによりグループづくりをしようという考えに基づいていました。この日は、7人のメンバーが発表しました。



②1月27日

前回に引き続きテーマ出しです。どんどん積極的に発表があり、この日までに14人からお話しがありました。発表は口頭だけでも良いことにして全員が話しました。共通するテーマもいくつかありました。書かれて出されているものは資料として全員に配布されました。

③2月10日

個人からのテーマ出しは、書きものとして12人から出ました。もちろん、各回出席した人はみんな自分のテーマは話しました。この頃からみんなは、自分のやりたいテーマや興味あるテーマに関心が動き始めたようです。この人と一緒にやりたいなどの思いも芽生えてきたと思います。自分の活動とちがう分野のテーマについても興味が高まって、広い範囲の活動が見えてきました。このプロセスが大事なのだと思いました。

④2月23日

最初のグループ分けの日でした。グループ分けの前に個人発表～1人1分とボード書き込みタイムです。出席者19人全員が「未来塾で何をしたいのか」についてスピーチをしました。話すだけでなく、発表内容は黒板にも自書して明らかにしました。ここでは1人3つまで優先順位つけてテーマを選んで良いことになっています。まだまだグループを固定せず出入りが許される仕組みです。

つぎは、話し合いタイムです。フィールド別か、分野別か、プロジェクト別かということを議論しました。提案テーマ別のプロジェクトにしました。そして最初のグループピングタイムです。呼び込み

タイムでもあります。暫定的なグループ分けです。結局、グループは6つ出来上がりました。それでも、5月末頃まではグループ間の出入りは自由にすることを申し合わせました。個人個人のいを消しまないで生かして行くためです。

まさに、可塑性あるグループづくりの考え方でした。

⑤3月16日

この日は、2期生の卒塾式のあと塾生会をもって、前回分けたグループが輪になってそれぞれ思いを発表し、グループ以外の人で囲んで聞き質問するかたちで、3つのグループが順に出各人が発表しました。時間は短かったのですが、セレモニーとして面白かったと思います。残り一つのグループは次回です。

⑥3月30日

いよいよグループ分けの本番です。この日は午前と午後の終日の時間をとって行われました。出席者は24名と最高の出席率でした。午前中は、前回の残り3グループの車座発表です。午後からは、今までの欠席者からもテーマ発表を聞きました。ここで新しいテーマが出て、かなり反響がありました。つぎに、メンバー入れ替え・新規グループタイムをつくりました。この時点で出入り自由な時間に移動することができます。その結果、新しいグループが1つできあがりしました。この日新しく出たテーマに人が集まったのです。グループは整理されて4つになりました。最後にグループごとに集まって、グループでは最初のディスカッションをしました。そしてその内容を、グループごとに全員が発表しました。このあとは、いよいよ合宿研修でグループ内のコンセンサスを深めようという流れに展開されていきました。

2. グループ研修合宿からグループ活動スタート

近江八幡長命寺の湖水亭に1泊研修です。

午後1時に集まって、オリエンテーションのあと4つのグループに分かれて事業計画と予算作りをテーマにディスカッションをしました。

夜は、食事と交流会です。例によって余興やゲームでにぎやかに遅くまで親しく交流しました。司会や、酒、夜食の調達など役割もしっかり出来上がっています。

また、毎回新しいスターが誕生してエンターテナーの層が厚くなってゆきます。この日は、いつもしとやかなTさんがみんなをどっと和ませてくれました。楽しんでも乱れる人のないのも幹事の雰囲気づくりが良いからでしょう。

つぎの日は、前日のまとめ作業です。そして、今後は自主的に日や場所を決めグループ活動をすすめるための予定作りです。最後に、各グループからの事業計画の発表です。これで、4つのグループに分かれて行動することが中心になってゆく分岐点だが、グループ分けのあとも、できるだけ全体で顔を合わせる機会を作ろうと申し合わせました。



卒 塾 式

日時 平成15年3月8日(土)
場所 県民交流センター207会議室

17時～開会
日高塾長あいさつ
国松滋賀県知事あいさつ
修了証書授与(日高塾長より)
3期生代表 西村ますみ
記念品贈呈(山川理事長より)
代表 衆 昌見・山口 吾往子
3期生あいさつ
代表 吉見 精二
17時30分 閉会



熱のこもったグループ研究成果発表も終わり、塾長・運営委員の先生方の手厳しくも優しさの感じられる講評をいただきいよいよ終盤の卒塾式。

塾長より「苦しみ、楽しみながら活動し人間性が豊かになった3期生。何かをやりたがっている人達に何をやればいいのか示唆してあげられる地域プロデューサーになってほしい。」との言葉をいただき、県知事からは、未来塾を今後生かすには3代目(3期生)がしっかりとしていないと先がおかしくなるとの激励のことは。胸にきざみました。

3期生代表の吉見さんからは、ネットワークセンターに先ず感謝。塾生の交流や1・2期生から4期生へつないでゆく縦へと繋がる楽しさが語られました。未来塾が今後も発展してゆくことに期待して先ずは卒塾でした。

卒 塾 作 品 製 作

平成14年12月、3期生塾生の吉見さんを講師に、世界でただ一つの陶芸作品づくりに挑戦。未来塾で学んだ証として一生懸命作りました。

卒塾式の日には、吉見さんが3日3晩、信楽の登り窯で焼いてくれた作品に再会。割れることなくひとつひとつしっかりと個性を発揮して完成していました。ありがとうございました。見るたびに未来塾3期生の一員であったことを自覚できそうです。



グループ研究報告書

駄菓子探偵団	14
ハートアンドハート	52
グリーンツーリズム	80
てんしょく	108

1871年

なつ菓子い、お菓子い、だ菓子、さ菓子 しが駄菓子



卒塾報告書

淡海ネットワークセンター未来塾3期生
駄菓子探偵団グループ

西村ますみ（団長）・藤丸昌弘・松宮孝明
浅居浩・松田直子・西山順子

駄菓子
探偵団

目次

1. 駄菓子探偵団概要
1. 我々の研究内容とは・・・
 - <検証1：紙芝居について>
 - <検証2：駄菓子について>
 - <検証3：駄菓子と紙芝居について>
1. かんぴょう駄菓子レシピ
1. かんぴょう駄菓子アンケート結果
1. 検証1 紙芝居
1. 検証2 駄菓子
1. 検証3 駄菓子と紙芝居
1. 事件ふぁいる総集編
 - <NO. 1～6より抜粋>
1. しが駄菓子認定証

駄菓子探偵団概要 . . .

発 足 平成 14 年 3 月

キャッチフレーズ

なつ菓子い、お菓子い、だ菓子、さ菓子 滋賀駄菓子
上から読んで下から読んで（しがだがし）だよ。
4C 仮面（懐かしい、お菓子、駄菓子、探し）を目標
に調査と研究が誓いの言葉。



活動目的

「駄菓子」「紙芝居」をツールにして懐かしい庶民文化を発掘し「コミュニティの再生」を目指す。私たち探偵団は、遊び心を大切にしながら心の文化を取り戻し、その心を未来につなげたい。とにかく楽しんで！

1. 地域活動の活性化
2. 住民の地域コミュニティ意識の向上
3. コミュニケーションを大切にした世代を越えた仲間作り

活動内容

- ・ 地域の中の特徴を生かした駄菓子創作で地域の活性化
- ・ 紙芝居作りによる地域の活性化・お年寄りや子どもによる創作紙芝居
- ・ 上記の「駄菓子」と「紙芝居」を組み合わせる生かす地域コミュニティ
- ・ 広報誌「事件簿ふぁいる」の発行

今までの活動

日時	内容		広報発行
5月3日	川西市	「やっさんの紙芝居」取材	事件ふぁいる N01 事件ふぁいる N02
6月30日	彦根市	菓子問屋「三口屋」取材	事件ふぁいる N03
	長浜市	駄菓子屋「いせや」取材	
8月23日	守山市	播磨田町地蔵盆にて地元で伝わるお話 紙芝居「子授け地蔵さま」を上演	事件ふぁいる N04
9月29日	大津市	淡海ネットワークセンター 屋台村おもしろ劇場にて上記紙芝居上演	事件ふぁいる N05
10月27日	草津市	草津市民交流プラザ 中間発表会	事件ふぁいる N05
H15.2月2日	水口町	高尾敏夫宅 かんぴょう農家取材	事件ふぁいる N06

助成金申請について

今年5月に2つほど駄菓子探偵団で助成金を申請いたしました。そのうちの一つ「サラリーマン（ウーマン）ボランティア活動助成（大同生命）⇒14万円」を頂くことになり10月から活動の資金として活用。

我々の研究内容とは・・・

我々のグループは、現代社会のあらゆる面において効率性（あるいは経済性）、同質性（あるいは没個性）に偏重したグローバリズムの行き過ぎた進展とそれがもたらした地域のアイデンティティ（地域の個性）の喪失が、高齢者から子どもたちまで多様な人々が生き生きと暮らす健全な地域社会にとって大きな危機であり、この状況を少しでも改革するためには、日常 人々が身近に感じている、広がりをもつ地域（小学校区以下の範囲）での“コミュニティ再生”がまず重要であるという共通の思いに至った。

そして、その再生の手段の一つとして地域に密着していながら今はもう忘れ去られた伝承や昔話あるいは食材の掘り起こしと、それを素材にした紙芝居づくりや駄菓子づくりが有効ではないかと仮定し、調査と実践を通じて検証を行った。

短期間の取り組みであったが、現時点での検証結果（一部、仮説を含む）を要約して以下に示す。

ツール	その効果
創作紙芝居 手作り駄菓子	<ul style="list-style-type: none">・ 地域の風土・歴史の再発見（地域アイデンティティへの気づき）・ 高齢者の知恵・知識への尊敬・ 世代間のコミュニケーションの活性化・ 創る・演じる楽しさの共通体験（地域アイデンティティのもつ価値の共有化とその継承への動機付け）・ ファーストフードからスローフードへのヒント
駄菓子屋	<ul style="list-style-type: none">・ 店のおばちゃんとのやりとり（子どもたちの生活力、創造力のトレーニングの場）・ 店のおばちゃんとの対話の持つ役割（少子・核家族化での地域における高齢者の役割、気楽なコミュニケーションの場）・ 地域の「ほっとステーション」としての役割（安心して道草できる場、地域とのつながりを実感できる場、思い出に残るふるさとの原風景）

具体的には、以下の3項目で研究を進めてきた。別紙フローチャーターも参照していただきたい。

① < 検証 1 : 紙芝居について >

「地域コミュニティの再生」と言いつつ、グループ名は、「駄菓子探偵団」である。それは、そのツールに、駄菓子がある！ 駄菓子が有効ではないか！と考えたからである。

そして、その駄菓子と聞いて想起したのが、幼少の頃の思い出にあり、今も昔ながら伝承されている大道芸としての紙芝居の時に同時に提供される型抜きやポン菓子や景品のきのお菓子（駄菓子）である。

そこで、まず、紙芝居に着目し、その取材を取行した。

紙芝居の取材

兵庫県川西市の「やっさん」に出会い、その紙芝居の上演や駄菓子の提供風景を取材した。（詳しくは、事件簿ファイル参照）

この取材報告で、一番に知ってほしいのは、紙芝居の前に群がる子どもたちの目の輝きである。コミュニティの再生に「紙芝居」がものすごいパワーをもち、私たちの目指していることのツールにきつとなるという確信をもった。そして、そこで提供される駄菓子についても、子どもたちの周りでその光景を懐かしそうに、ほほえましく見守る保護者大人の顔から、きっと有効なツールになるという確信をもたせてくれた。

地域に眠る「歴史と文化の伝承」を、紙芝居で！

「やっさん」の取材を終えて、いよいよやる気になった。そして、既存の紙芝居を上るのが私たちの本来の目的ではないことも見えてきた。そう、滋賀県内、各地に眠る「歴史と文化」を掘り起こし、その上演機会を得て、「地域コミュニティの再生」に貢献する点である。

掘り起こした素材をもとに

手作り紙芝居の上演

滋賀県守山市播磨田地区のお地藏様にもつわる話を聞き取り、紙芝居にし、地藏盆の時に、その地域の方々や子ども会の方の協力のもと、上演した。

まず、驚くのは、小さい子どもたちの反応ではなく、その保護者である若い大人の層の反応である。つまり、普段近く



紙芝居「子さづけ地蔵様」絵：浅居 浩

を通りかかっている、そのいわれ等について知らなかった！　こういう話を子どもたちに伝えていきたい！　こういう話の中に、ずっと伝え残したい「心」があるような気がするという反応である。うれしかった。純粹に、本当にうれしかった。子どもたちの反応の素晴らしかったのはもちろんである。

キラキラ倶楽部のバックアップ！

この経験をして、私たちが思い描いたのは、毎年、播磨田地区で紙芝居をし続けるということではないということである。

ずっとその地域に居つづけるのではない！

私たちの活動の有効性に気づいてくれたその地域の方々によって、継続され、また違う話等を紙芝居にしたり、寸劇やミュージカル等にして発展させてくださることを願う。

家に、子どもが小さかった頃の絵本がたくさんあり、何とか有効に活用したいと思っていたが、何かヒントをもらったような気がするといっていたいただいたおばあちゃんが居たこともうれしかったことだ。

他地域でもやっていきたい！

この経験をもとに、他地域でもやっていきたい。その過程の中では、その地域で製作スタッフを募集し、上演に参加してもらい、年々上演回数を増やし、その地域において発信して行ってもらいたいと思う。

② < 検証 2 : 駄菓子について >

あれ！駄菓子がメインじゃ……。そんな思いはメンバーの中にきちっと残っていた。そこで、駄菓子に注目すべく、駄菓子屋の取材を敢行した。

駄菓子屋の取材

滋賀県彦根市の「三口屋」という菓子問屋と滋賀県長浜市三ツ矢元町の「いせや」という駄菓子屋を取材した。(詳しくは、事件簿ファイル参照)

駄菓子屋に残る、「地域コミュニティ」

取材して、駄菓子屋にこそ、「地域コミュニティ」が残っているということがわかった。コンビニでは、一言もしゃべらずに買い物をして出て来ることはできるが、駄菓子屋のおばちゃんは、「あいさつすること」「買い物のコツ、計算の仕方」「家の家族のこと」等の会話を大事にするというのである。

また、駄菓子屋は、店主となじみのお年寄りたちのコミュニティの場にもなっているということがわかった。そうすると、その方々と買い物に来る子どもたちとの間にも、交が生まれているのである。

駄菓子の有効性！ 発掘の意義と創作意欲！

これらの取材から、駄菓子のもつ魅力について確信をもった。

そして、そのことから、滋賀県内の各地に残る手作り駄菓子や駄菓子屋を調査し、聞き取り、まとめていったり、再生の手助けをしたいと考えた。

そのためには、こまめに、聞き取ったり、各地に会員を増やしていきたい。それぞれレシピをしっかりとまとめて、蓄積していきたいと思う。

「しが駄菓子」として顕彰！

これらの活動を形にし、つなげていくためにも、「しが駄菓子」として駄菓子認定証を行していきたい。

・・・第1号は水口町の高尾敏夫さ

「駄菓子屋サロン」の開設！

そして、よい機会をとらえて、「駄菓子屋サロン」を開設し、文化交流の場を作っているかどうかを考えている。

③ < 検証3 : 駄菓子と紙芝居について >

いよいよ見えてきた、駄菓子と紙芝居の因果関係！これまでの研究によって、駄菓子紙芝居の接点がだいぶ明らかになってきた。

そして、もう1つ、鮮明にイメージできてきたことは、紙芝居屋のプロになるのはい！ということである。

つまり、紙芝居上演の練習をするのではなく、地域に入り込み、聞き取り、その地域伝承すべき歴史と文化を紙芝居にすることが主である。そして、駄菓子とつなげるのである。そこで、その両者をうまくミックスさせた研究素材として、滋賀県甲賀郡水口町にる、「かんぴょう」作りに注目した。

「かんぴょう」作りの取材

かんぴょう作りといえば現在は栃木県壬生町が有名だが、滋賀県甲賀郡水口町八光がほんとうの発祥の地である。その八光で、先祖代々かんぴょう作りをされてきた高尾敏おじいちゃん一家を訪ね、取材を敢行した。(詳しくは、事件簿ファイル参照)

「地域の歴史と文化」を掘り起こし、それを、紙芝居に！



紙芝居「福兵衛どん」

取材を終えて、おじいちゃんのあつい思いを受けて、創作に入った。当然、どの家でもかんぴょう作りをしてほしいと訴えるのではない。

- ・ この地域が発祥の地だったんだ！
- ・ その当時、この地域の人々の生活を支えたのだ！日照りにも強いかんぴょうが、命を救ったのだ！ということ

- ・ それから今まで、この伝統を、面々と支え、続けてこられた人たちが居るんだ！
- ・ 一人ひとり、かんぴょうとのかかわり方は違っても、この地域の誇りの1つなんだ！こんなことを、紙芝居で伝えられたら…。そして、地域の人たちが語り継いでくれたら… (紙芝居の上演については、こうご期待！)

そこから、創作駄菓子を！

そして、かねてからの課題である、紙芝居と駄菓子との融合である！

- ・ 今回は、かんぴょう！
- ・ 現代の子どもたちがより身近に、普段から接することができるように！
- ・ 手作りであること
- ・ 地元の方たちが工夫してこられたものを伝えていく
- ・ そして、私たちの悪戦苦闘の創作駄菓子！

手作り
かんぴょう
菓子



かんぴょうチップ



かんぴょうゴマ

砂糖や黄粉
をまぶして
もおいしい

その提供の場を、地域の子どもたちに



水戸黄門に出演した高尾氏とふくべ

当初は、3月、子ども会で小学校6年生のお別れ会が催されると聞いて、その時と想っていたが、ちょっと日程的に無理みたいなので、夏、本当にかんぴょう干し(収穫)をされるときをうまく利用し、披露できたらなと思っている。(思わぬ、体験学習が仕組めるかも…！)

また、駄菓子屋は、店主となじみのお年寄りたちのコミュニティの場にもなっているということがわかった。そうすると、その方々と買い物に来る子どもたちとの間にも、交が生まれているのである。

駄菓子の有効性！ 発掘の意義と創作意欲！

これらの取材から、駄菓子のもつ魅力について確信をもった。

そして、そのことから、滋賀県内の各地に残る手作り駄菓子や駄菓子屋を調査し、聞き取り、まとめていったり、再生の手助けをしたいと考えた。

そのためには、こまめに、聞き取ったり、各地に会員を増やしていきたい。それぞれレシピをしっかりとまとめて、蓄積していきたいと思う。

「しが駄菓子」として顕彰！

これらの活動を形にし、つなげていくためにも、「しが駄菓子」として駄菓子認定証を行していきたい。

・・・第1号は水口町の高尾敏夫さ

「駄菓子屋サロン」の開設！

そして、よい機会をとらえて、「駄菓子屋サロン」を開設し、文化交流の場を作っているのはどうだろうかと考えている。

③ < 検証3：駄菓子と紙芝居について >

いよいよ見えてきた、駄菓子と紙芝居の因果関係！これまでの研究によって、駄菓子紙芝居の接点がだいぶ明らかになってきた。

そして、もう1つ、鮮明にイメージできてきたことは、紙芝居屋のプロになるのはい！ということである。

つまり、紙芝居上演の練習をするのではなく、地域に入り込み、聞き取り、その地域伝承すべき歴史と文化を紙芝居にすることが主である。そして、駄菓子とつなげるのである。そこで、その両者をうまくミックスさせた研究素材として、滋賀県甲賀郡水口町に、「かんぴょう」作りに注目した。

「かんぴょう」作りの取材

かんぴょう作りといえば現在は栃木県壬生町が有名だが、滋賀県甲賀郡水口町八光がほんとうの発祥の地である。その八光で、先祖代々かんぴょう作りをされてきた高尾敏おじいちゃん一家を訪ね、取材を敢行した。(詳しくは、事件簿ファイル参照)

「地域の歴史と文化」を掘り起こし、それを、紙芝居に！



紙芝居「福兵衛どん」

取材を終えて、おじいちゃんのあつい思いを受けて、創作に入った。当然、どの家でもかんぴょう作りをしてほしいと訴えるのではない。

- ・ この地域が発祥の地だったんだ！
- ・ その当時、この地域の人々の生活を支えたのだ！日照りにも強いかんぴょうが、命を救ったのだ！ということ

- ・ それから今まで、この伝統を、面々と支え、続けてこられた人たちが居るんだ！
- ・ 一人ひとり、かんぴょうとのかかわり方は違っても、この地域の誇りの1つなんだ！
こんなことを、紙芝居で伝えられたら…。そして、地域の人たちが語り継いでくれたら…
(紙芝居の上演については、こうご期待！)

そこから、創作駄菓子を！

そして、かねてからの課題である、紙芝居と駄菓子との融合である！

- ・ 今回は、かんぴょう！
- ・ 現代の子どもたちがより身近に、普段から接することができるように！
- ・ 手作りであること
- ・ 地元の方たちが工夫してこられたものを伝えていく
- ・ そして、私たちの悪戦苦闘の創作駄菓子！

手作り
かんぴょう
菓子



かんぴょうチップ



かんぴょうゴマ

砂糖や黄粉
をまぶして
もおいしい

その提供の場を、地域の子どもたちに



水戸黄門に出演した高尾氏とふくべ

当初は、3月、子ども会で小学校6年生のお別れ会が催されると聞いて、その時と想っていたが、ちょっと日程的に無理みたいなので、夏、本当にかんぴょう干し(収穫)をされるときをうまく利用し、披露できたらなと思っている。(思わぬ、体験学習が仕組めるかも…！)

新たな形に発展！・・・かんぴょうの実「ふくべ」そのものを素材として！

- ・ 取材の中で、何とかかんぴょうを、まき寿司中に入っているものというだけではなく、広めていかなければ・・・という思いが強くなった。
- ・ そんななかで、もともとかぼちゃの大きいような形をしているかんぴょうの実「ふくべ」に注目してみようというアイデアが出た。
- ・ 子どもたちの宝物になったらな～（伝統になったりして・・・）
- ・ 「田園アート」っていうのはどうだろう。この地域で時々見られるのだ！
- ・ 畑の真ん中に2～3の「ふくべ」がころがっている風景を！ まさしく、野外のアートとらえることはできないだろうか。これもこの地域の風物詩になりえる！

ふくべのアート
（くりぬいて中にローソクを



ヒューマン・コミュニティー・ルネッサンス（心地よい人間関係の復興）

今までの研究活動を通して、現代社会の人間関係の希薄化というものが浮き彫りになってきたように思う。

子どもたちの生活をみても、テレビ・コミック・テレビゲーム・携帯電話の急激な普及などからコミュニケーションの希薄化が問題点として浮かび上がる。

私たちの活動が、本来大事にされるべき「心地よい人間関係」を取り戻すことへの一となることを願ってやまない。

～今後の活動展開～

検証の結果、各ツールは地域のコミュニティ再生に取って、少なからず有効であることが認められた。

これを踏まえて、今後もグループ活動を展開していく予定である。

ただし、我々の活動の原点がグローバリズムへの抵抗であることから、その活動の歩はゆっくりと楽しみながら一歩ずつメンバーの足並みをそろえて発展的継続をしていきたい。

言い換えれば、“スローライフ”の実践である。

ツール	当面の活動	発展的活動
創作紙芝居	<ul style="list-style-type: none"> ・ 埋もれた伝承・民話のサーチと紙芝居づくり ・ 伝承者の顕彰 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 駄菓子屋サロン（コミュニティビジネスとして商店街の空き家活用）も考えられる。
駄菓子づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 駄菓子屋サーチと所在マップづくり ・ 埋もれた食材のサーチと駄菓子レシピの提案および“しがだがし”マップづくり ・ 伝承者の顕彰 	同上
情報発信	_____	<ul style="list-style-type: none"> ・ ホームページの作成 ・ 創作ミュージカル（地域の音楽家とのセッションなど） ・ 活動記録の出版
その他		<ul style="list-style-type: none"> ・ 活動助成金の取得

～情報発信のもととなる本作りを目指して！～

集大成はまだまだだが、目指すところをしっかりとしたいという願いも生まれた。また、地道に、それぞれの地域に入り込み、「聞き取ること」の重要性も実感した。このことも大事にしながら、きちっとした本にまとめていきたいと思う。そのためにも、今後、以下のような計画をもって望みたい。

- 地域に残る「忘れ去りたくない」「未来世代に伝え継ぎたい」素材を紙芝居にしませんか！という情報発信
- 各地に残る大事な「駄菓子屋」をまとめてみませんか！情報提供ください！という情報発信
- 各地に残る手作りお菓子（駄菓子）を埋没させることなく、未来永劫伝えていくため、まとめて見ませんか！という情報発信
- これらを、滋賀県地図にプロットし、特色あるマップにする！
【駄菓子屋 MAP】 【地域駄菓子 MAP】
- それらの情報を集約する「駄菓子探偵団」ホームページの立ち上げ
- 地域会員の募集と、それをつなぐネットワークの形成

以上、まだまだ夢は大きくですが、着実に一歩ずつと思っていますので、応援のほどよろしくお願ひします。

かんぴょう駄菓子レシピ

水口かんぴょう農家の高尾しげさんより

●かんぴょうの砂糖漬け

- ① もどしたかんぴょう(もどし方は下記を参照)を軽く水を切り、一口大にむす。
- ② 厚手のなべに①と同重量の上白糖と、①を入れて水分がなくなるまで煮る。
- ③ さましてからグラニュー糖をまぶす。

駄菓子探偵団研究結果より

●かんぴょうのきな粉まぶしと胡麻まぶし

- ① もどしたかんぴょうを13~15センチに切る。
- ② 厚手のなべに①の80%重量の上白糖と、①を入れて飴状近くまで煮る。
- ③ あら熱が取れたらきれいに結び、きな粉・胡麻をまぶして軽く押さえつける。

●かんぴょうチップス

- ① もどしたかんぴょうを軽く水を切り、一口大にむすんでペーパータオルではさみで十分に水気を取る。
- ② 低めの油でゆっくり揚げて、塩をふる。



ちょっと上級の和菓子風レシピ

水口かんぴょう農家の高尾しげさんより

●かんぴょうのゼリー

- ① もどしたかんぴょうを小さめの一口大にむすび、甘く煮る。
- ② 農協青りんごゼリー液を分量同通りに作る。
- ③ 型に半量だけ流し込み、冷やし固めてから①のかんぴょうをのせ、残りのゼリー液を流して固める。

駄菓子探偵団研究結果より

●かんぴょう葛もち



- ① もどしたかんぴょうを細かく刻み、砂糖と白しょうゆで煮ておく。
- ② 本葛粉50gに水200ccを徐々に加えて溶かし、上白糖8gも加えてよく混ぜる。
- ③ ②を中火にかけ、手早く混ぜ乳白色になったら火を止め、熱いうちに木杓子の上で一個分にとまとめ、水でぬらした手で①をつつまこむ。
- ④ 蒸し器で透明になるまで5~6分蒸し、全体に水をかけて一気に冷やす。

かんぴょうの上手なもどし方

水洗いして少量の塩でやわらかくなるまでもむ。

塩を洗い流して水気を絞り、たっぷりの熱湯で使用方法にあわせてゆであげる。

◆ かんぴょう駄菓子アンケート結果 ◆

研究発表時に、団員が試作した「かんぴょうの駄菓子」を試食（かんぴょうチップ、胡麻まぶし、きなこまぶし）をして頂きました。下記のとおりアンケートに対してチップスが一番人気で、酒やビールのつまみにという声がありました。きなこは、食感や甘味が良かったなど意見が多く出ました。胡麻は、歯ごたえと香りが良かったという意見があり、きなこ、胡麻とも甲乙つけ難いという意見がありました。



創作かんぴょう駄菓子の感想をお聞かせください。

また、3種類のうちで、どれが美味しかったですか。

【美味しかったもの】



かんぴょうを使った駄菓子のレシピのアイディアがあれば、ぜひお聞かせください。

回答：かんぴょう麺・ぽん菓子、レモン味、シナモン味、黒砂糖、ココア味、チョコバー、フライ、かんぴょうラーメン、はちみつ、梅ジャム味、ヨーグルト味、カレー味など

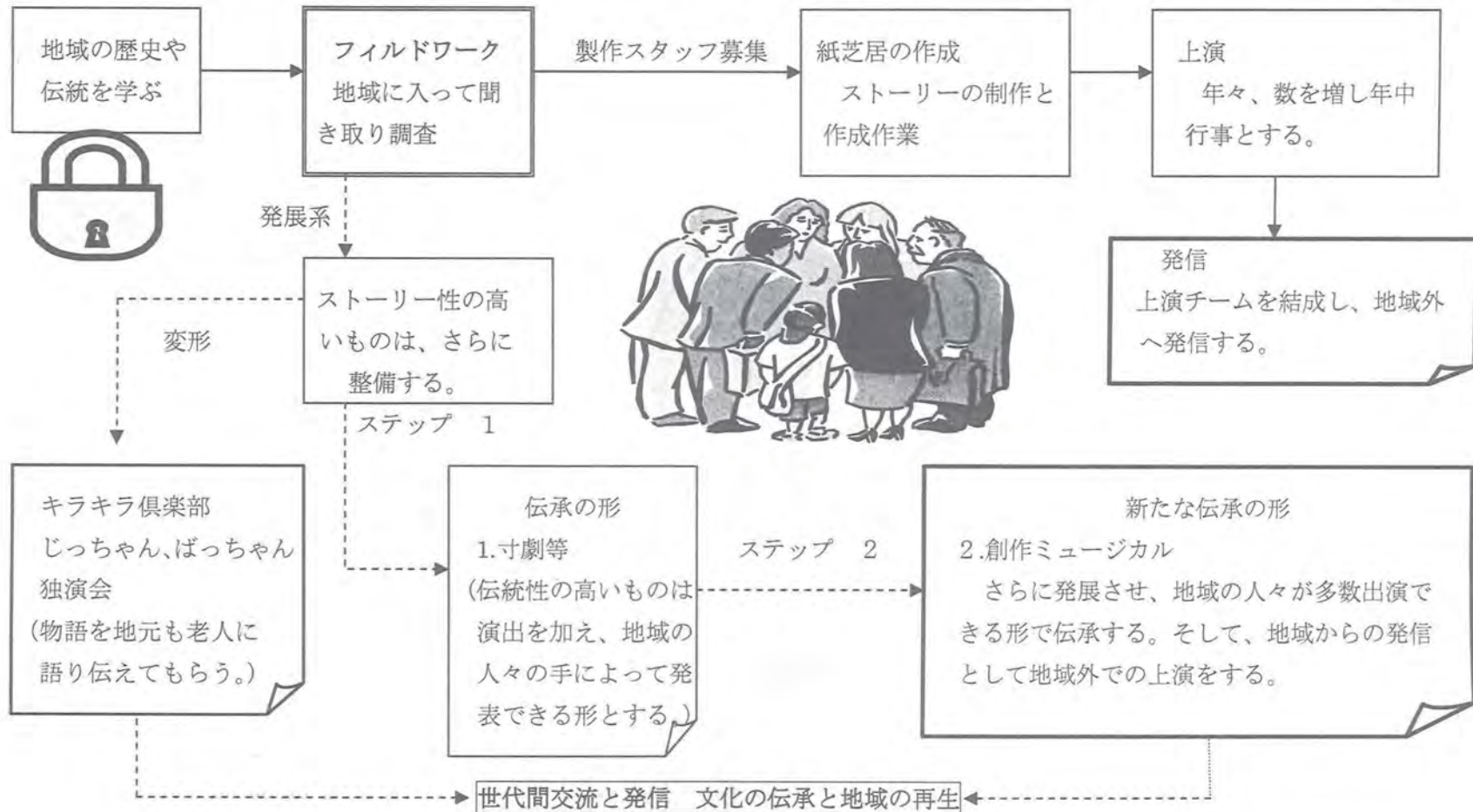
駄菓子探偵団では、滋賀県ならではの“しが駄菓子”を発信していきたいと考えています。“しが駄菓子”としてお勧めな食材やふさわしいテーマがありましたら、教えてください。

回答：干し柿、こんにゃく、米、はす、日野大根、へちま、水菜、小豆、近江栗、イチゴ、ブルーベリー、マスカット、もち米、ひしの実、かもうりなど

検証：1 紙芝居

歴史と文化の伝承の形

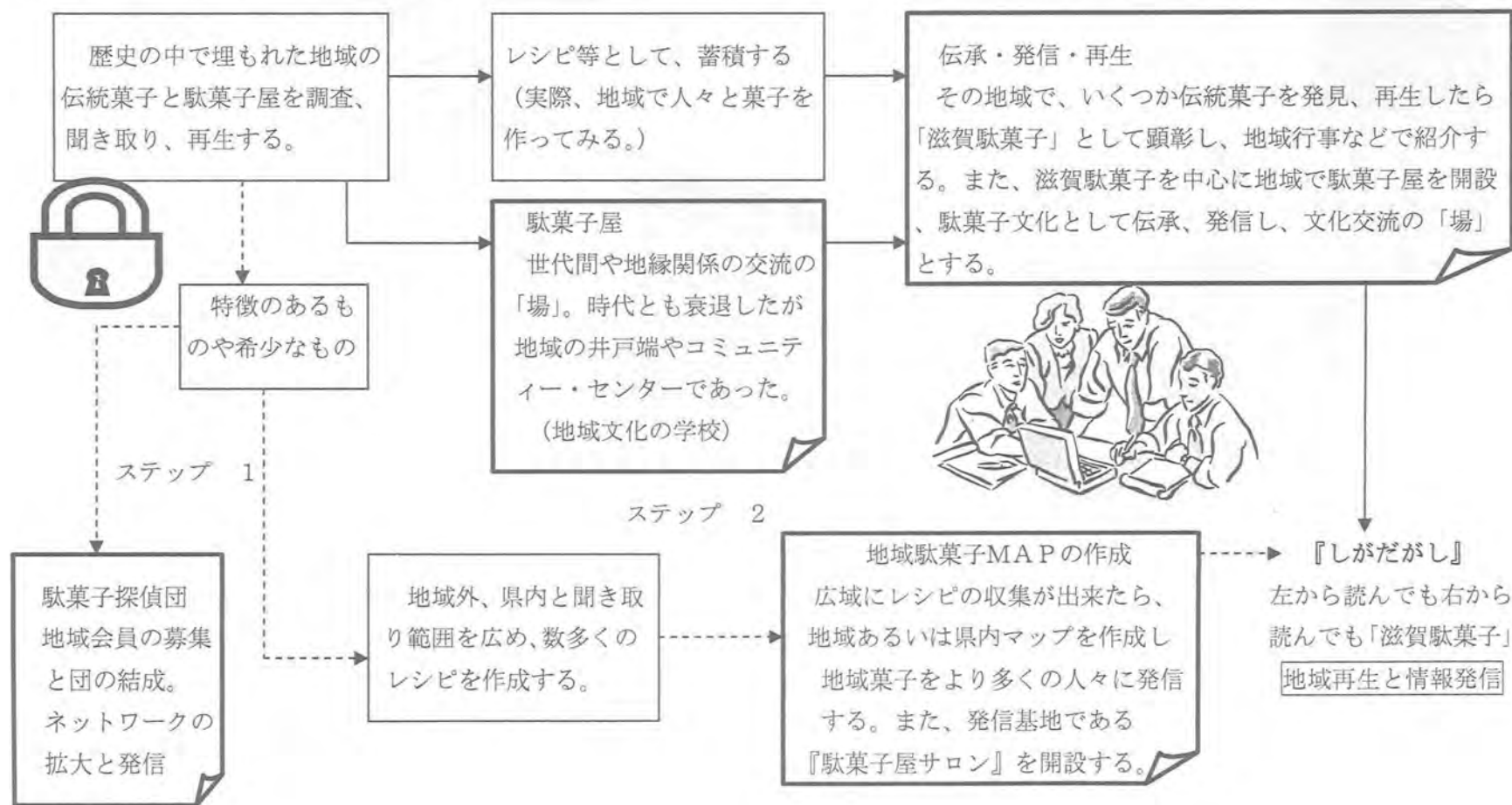
地域に眠っている「歴史や文化」の中で、世代間を超え伝承すべきものをその地域の人々とともに顕彰し、紙芝居という形にまとめる。



検証：2 駄菓子

歴史と文化の伝承の形

地域で忘れられた「地域の伝統菓子」に注目し、また、子供たちや老人のコミュニティーの「場」であった駄菓子屋。これら全てが、地域文化であり、その駄菓子の作り方等を地域において学び再生することによって、世代間交流や地縁関係の再構築を図る。



検証：3 駄菓子と紙芝居

紙芝居と駄菓子について、調査を行いその因果関係を探る。

紙芝居が商売として成り立っていた頃、子供の気をひくための「道具（生活の糧(か)）」であった。



駄菓子探偵団

事件簿ふぁいる

総集編

栄光の駄菓子の星を目指して…、卒業後も、合言葉は、『滋賀駄菓子』どちらから読んでも「しがだがし」なのよ!!

隊長、私にお任せください。

今日こそは4Cの正体をあかして見せます。

乞うご期待!

やれやれ!

おいおい!

ルンルン

調子回復、わたしもがんばります。

事件ふぁいる No. 1 紙芝居検証

やっさんの紙芝居 安野侑志氏取材

日時/2002. 5. 3 場所/兵庫県川西市清和台

「怪人：やっさん」発見!



2002年5月3日、それまでまだ誰も見た事のない「怪人：やっさん（本名：安野 侑志氏）

阪急オアシス清和台店（兵庫川西市）に現れるという有力情報を得て、我ら「駄菓子探団」が全員集合し、現場へと赴き、遂にその正体を解き明かすこととなった。

現場は市内のショッピングモール街の一角で、既に子供たちに取り囲まれた

「やっさん」の姿があった。遠巻きに調査開始した…。作務衣に身をまとい、愛車（昭和30年代の運搬用自転車）に大きな黒い箱を乗せ、しかも、「犬（ワン）夜叉」「ポケ（デキ）モン」「とっとこ（やっこ）ハム太郎」など等、子供たちが喜びそうなブロマイドをたくさん所持していた。しかも、割り箸にあめをカラメてせんべいのような物でサンドし、チョコレート色の妙な液状のものでせんべいに絵を書き込み広場に子供たちに与えていた。さらに、そのかたわらで「おばちゃん仮面」も子供たちにピンク色の板状のようなものを手渡している。実に怪しい様子であった。

調査中

Q：紙芝居の内容が非常に説明的では？

A：「教えのようなもの」例えば、交通ルール、子育ての苦労等

Q：子供たちへの語りかけは？

A：子供に語りかけているようで、実は親にも語りかけている。

Q：「やっさん」は今の世の中、何が大切だと思われていますか？



A：アナログ的な人間関係、例えば、会場でも「大きい子と小さい子」「いじめといじめられ」を体験する場が大切。

Q：紙芝居のネットワーク等で、滋賀に誰かいませんか？

A：現時点ではない。

Q：紙芝居には、文字がほとんど書いていないようだが？

A：オリジナルな語り、読み芝居

Q：紙芝居は誰が考え、製作するのか？

A：昔のオリジナルと自作のストーリーで、製作は専門家に任せる。「紙芝居劇団」のオーナーなんです。



Q：何故、屋外にこだわるのか？

A：紙芝居は大道芸であり、屋外はその原点であるから。

Q：何故、紙芝居なのか？

A：昭和47年に免許を取得し、老後の楽しみとして始めた。その背景に、子供たちが通りから消えるのが寂しいと思ったから。

Q：行政との関係は？

A：川西市と年間契約（150万円程度）をしている。今日は、子供の日のイベントとして行っている。他にも、市内の幼稚園や保育園老人ホーム等もまわる。

Q：市と年間契約しているのに、駄菓子売っているのは？

A：一種のこだわり、紙芝居と駄菓子という本来からのスタイルを厳守。しかし、その売上の5割ほどは還元するようにしている。

Q：売上や後継者問題については？

A：1日1万円から、日曜日は2万円の売上がある。後継者はいない。順調に行けばビジネスにもなるが…、パトロンが必要である。しかし、今日の不況下では、お勧めできない。

Q：生意気な子供もいたが、終盤になるとみんなやっさんのペースになっているが？

A：子供でもあくまでお客さんであり、いかにこちらに振り向かせるかは難しい。相手は、上の立場となっているが、導き方によって立場も逆転する。そこがまた面白いところでもある。子供たちの目が輝いている

Q：紙芝居の中に、「死」の残酷なシーンがあったが？

A：泣き出す子供もいるが、あえて「命」の尊さを知って欲しい。

Q：小さな子供を前列にしたり、交通ルールのクイズをおこなったりしているが、行政からの指示か？

A：大きい子と小さい子の競争は、いじめの構造と同じで大きい子がどうしても前の席をとるため、予め小さな子を前に座らせる。別に行政の指導はないが、還元の手法である。行政からの指示は別はない。

Q：できるだけ多くの子供に、還元するための工夫は？

A：目配りし、できるだけ指名できるようにしているが、実際は難しい。ブツブツ文句をいう子供もいるが、小さい子供のために「アンパンマン」を登場させている、これである程度モーラできる。

Q：親に教えてもらって答えている子供もいるが？

A：ある種、仕方のないこと。大人も参加していいと思っている。イベントでもあるし。

Q：これは、一種のコミュニティ・ビジネスですね？

A：その通りだ。

「やっさん」調査報告書

1. 身長は1 m60 c m前後かな。
2. 体重は70 k gくらい。
3. やや小柄だが、体格は良い。
4. 出身は山形県で育ちは東京だと。
5. 顔は、やや大きめで牛乳ビンの底のようなメガネを使用。



「やっさん」の元気のいい声は、何か心がスカッとするような響きがあった。屋外にこだわり、マイクも使わずにあれだけの声が出せるのには少々驚きの観があるが、その声の魅力は、子供たちも十分知っているようである。また、ビジネスと言えども子供たちへの「還

元」は、まさにNPOの原点であり、紙芝居と言う伝達機能は「戒めや教え」の伝承の場となっていた。これこそ、今、ゆとり教育が求めようとする家庭、地域塾（家庭や地域で子供を育てる）ではないのか？



次々と届く報告に、「やっさん」の実態が明らかになってきた。また、当初なぞとされていた割り箸にあめをカラメでせんべいでサンドした物は、実は懐かしい「駄菓子」で、

チョコレート色の妙な液状「ソース」と判明、ちょっとアン・マッチングで創造出来にくい味、また、そのかたわらにいたのは「やっさんの奥さん」で子供たちにピンク色の板状のようなものを手渡していたのは、「方抜き」と呼んでいるこれも一種の駄菓子でそこに「ハイ!…、何となくいい顔していませんか？」描かれている形をくり抜いたり逆に周りを残してその形をくり抜いたりして、上手に出来たら懸賞が当たるといったものだった。

時代や世代を超えて「駄菓子」は、脈々と生き抜いてきた。紙芝居と駄菓子という実に不思議な組み合わせはなぜか懐かしい雰囲気醸し出していた。

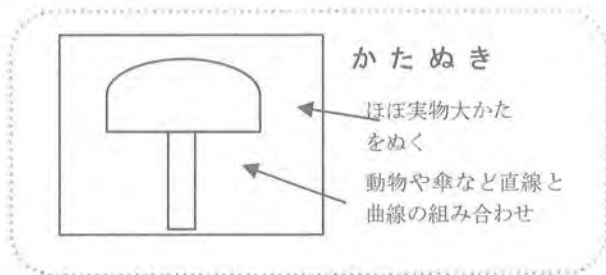
切ないような少年時代に遡って、夢中で方抜きに挑戦したけれど菓子の大きさが「あんなに、小さかったっけ」と思ったのは、我々だけであったのだろうか？

事件簿ふぁいるNo. 001 より抜粋

◆青空劇場の前座 やっさん Part2

14時50分 阪急オアシス・センターモール前に到着

すでに青空劇場のセットは完了し、ヤッサンが駄菓子、お連れ合いさんがかたぬきを販売していた。時折、駄菓子を作っているヤッサンと子供たちが大きな声でやり取りをし、コミュニケーションをはかっている。私たちはかたぬきにチャレンジしたが、浅居さんのみ成功。さすがはアーティスト！子供たちを見ると、何枚も買ってチャレンジしている子や、つばをつけてやわらかくしてからかたぬきをしている子も。ちょっと水で濡らしてやるとうまくできるそうで、「昔も今も変わらないなあ（笑）。昔のかたぬきの方が大きくなかった？」と藤丸さん、西山さんが話していました。



◆青空劇場のはじまり、はじまり

15時05分 駄菓子・かたぬき販売を一旦中断して青空劇場紙芝居座の始まり

紙芝居の内容（順番に）途中で1回休憩あり

○クイズを交えて交通安全

印象に残ったこと

- ・道に飛び出して交通事故にあい、首がとれ、血が大量に噴き出している子供の絵
- ・お母さんのお腹に何日いるのかという質問

○黄金バット

○紙芝居のおっちゃんにお菓子を買りに行く子の話

○ヤス坊（40年前の紙芝居）ーシャボン玉にまつわるヤス坊と妹の話

○クイズー動物、キャラクターあてなど

紙芝居はヤッサンのテンポの良い口調で、子供たちに質問を投げかけたり、ダジャレを言ったり、クイズなどを交えながら子供たちとたっぷりコミュニケーションをとりながら、進められる。クイズでは景品をもらえることもあって、子供たちは一生懸命手を挙げて、大きな声を出している。子供たちの声がだんだんと大きくなり、最後は興奮の渦につつまれたまま、おしまい。

16時30分頃 青空劇場紙芝居座の終わり

子供たちは駄菓子、かたぬきを買い求めるために大勢順番に並んでいる。私たちは一足先にセンターモール内のお好み焼き屋で、お疲れさま、乾杯。

17時頃

ヤッサン、お連れ合いさんとの交流（松宮さんの記録より再現）

○今の世の中で大切に思っていること

アナログ的な人と人とが接する機会が減っているので、いじめ、いじめられの体験学校のような機会を作っていきたいと思い、紙芝居をしている。

○紙芝居について

紙芝居は顔を隠して読むというイメージがあるが、それだと読み芝居になってしまい、テレビに近くなってしまう。また、絵本とも違った魅力があり、絵は1つの要素でしかなく、絵本の絵自体はひとつの作品である。紙芝居は、ひとつはせりふを言う「語り」、ひとつは「抜き」の技術が必要である。

○参加者・子供たちをみて

* 参観していてどんどん子供の声が大きくなり、生き生きしてくるのがわかる。一人の親が「子供ってこんなに大きな声が出るんやな」とつぶやいていた。それよりもその周りの親・大人の表情が段々とやわらかくなっていくのがわかる。子供たちに語りかけているようで、親（大人）たちに話している部分も多いのでは。

子供はものすごく性能の良い録音機であり、録音機の再生の回路を開けようとしている。子供と同じ立場で接し「双方向紙芝居」をしているので、静かに読み聞かせる必要はない。テレビやゲームは一方向である。

指を刺して、できるだけ多くの子を当てる。今の世の中は結果の平等を求めすぎで、（機会の平等は必要だが）、大人が子供に合わせようとすると、子供は蟹気楼のように逃げていく。子供はおべんちゃらをつかってでも、大人にあわせてくる。小さな子の前に大きい子がいると見えないということを教えるだけでも時間がかかった。全国巡回していて思うことは、子供が全国どこでも画一化してきていることである。

○街頭で演じることのこだわり

街頭で演じるのは、エネルギーが充満しないようにである。雨の時などに室内で行うこともあるが、エネルギーがこもってしまう。街頭は場の空気、臨場感がある。

○紙芝居に関わる思い

大阪府は全国で唯一「紙芝居業者条例」があり、免許も取得。30代で昭和47年から約30年間続けてきた。戦後は軍隊から帰ってきて職のない人がやっており、昭和45年頃から子供が町から消えてきたので、老後の楽しみにしようと思っていたが、紙芝居をすることに。あんな生き方をしている人がいることを見せたいし、憧れる商売にしたい。

ヤッサンは紙芝居のプロテューサーではなく、紙芝居劇団のオーナーである。紙芝居復活論には、スポンサーが必要で、コミュニティ・ビジネス的な発送もいる。最近の講演は自治体、教育委員会などで、美術館、博物館からの依頼もある。

○駄菓子の役割

商品であり、買うのに並んで待つことがいい。できあいのものや並べておくのはあまりよくない。天ソ（せんべい、てんかす、レンニユウ）もあり。

○滋賀のネットワーク 残念ながら、ない。

18時頃 帰路へ

参考ホームページ

子供が元気になる青空劇場「ヤッサンの紙芝居」

事件簿ふぁいるNo.002より抜粋



事件ふぁいる No. 3 駄菓子屋検証

日時／2002. 6. 30

場所／長浜市 駄菓子屋「いせや」水田みちこ氏

彦根市 菓子問屋「三口屋」

片隅のおもちゃ箱

ちょっと思い出してください？子供の頃十円玉を握り締めて近所の駄菓子屋に通い詰めたことを、ちょっと切ない感じでもほのぼのとして、あの頃買いたくても買えなかった駄菓子が、小々、姿かたちを代えて店頭には並んでいる。まるで「タイムスリップ」したような空間がそのこの広がっていた。

彦根の「菓子問屋の三口屋」は、まさにそんな場所だった。週末の午後3時を越えたにもかかわらず大勢の客でにぎわっていた。店は、倉庫（間口7m×奥行15m）をそのまま使っていて、常時5千から7千の品を置き、しかも全商品2割引きのとあってはこの賑わいも納得する。所狭しと菓子や玩具等が並べてあった。その玩具の中には、かつて子供だった頃の懐かしい品々があった。

店のご主人には、お話を聞けなかった（忙しくて取材拒否）が、2代目がレジのお客さんを相手しながら、取材に答えてくれた。流石である。

Q「この店は、何年やっているのか？」

A「昭和35年頃からやっていて、現在の場所に移転してきてからも15年ほどになる」

Q「商売として成り立っているのか？」

A「親がやっているので仕方が無い」

Q「メーカーや職人はどうか？」

A「職人は、確実に減っている。また、メーカーも販売価値の低いものは少しずつその数を減らしている。」

Q「子駄菓子を作る後継者はいないのか？」

A「現時点ではいない。」

Q「結構お客さんが入っているようだが？」



A「週末は、こんなものでしょう」

Q「お客さん何処でこの店のことを聞いてくるのか？」

A「ほとんどのお客さんは、常連さんで、口コミによってが多い。全品 2 割引きで扱っているんで、それも影響しているかもしれない。」

Q「最近、こうした駄菓子を扱う小売店が少なくなったから、問屋で直接売っているのか？」

A「それもあります。大人が喜んで買いに来られたり、地域のイベントなどに使うため数多く買いに来てくれたりするので。」

Q「駄菓子の扱っているメーカーは？」

A「現在のところ、カバヤ、フルタ、オリオンなどがある。」

Q「これからこういう店をやろうとする人は？」


A「もう無いと思う。現状を維持しているだけで、家業じゃなければ継いでいない。」
形や品が変わっても、変わらぬものがここにあるような気がする。駄菓子をツールに子供は初対面で興味津々、大人は懐かしいに感激といった感じで店内はぎわっていた。

コンビニや大型店が軒を連ねる中、菓子類のみで今日まで営業を続けられた背景に、何か秘密があるようだ。それが何であるかは明らかではないが、強いて言うなら人間の成長過程において『駄菓子』は深い関わりを持っていて、前述したように大人と子供が共有」できるツールとなっているのではないか、そこから発展する会話や行動が、やがて「伝承」へと移っていくのではないか。

今、流行り病のように流行する物事や言葉が、果たして「次世代に伝承するか」と言えば、疑問が残る。安易に、大きな投資が大きな成果を生むとは言えないのではないか。例え、品袖素朴なものであっても「世代を超えて共有」できれば、それはそれなりに形を替え次世代に「継承」されていく。つまり、駄菓子はそんな可能性を秘めているのではないだろうか。

『三口屋』さんは、ディスカウントやコンビニのハシリのような要素を持ちながら、スー

パーに負けない品揃えをしている。また、地域の客の「口コミ」によって安いが看板となり、新しい客を呼ぶ「近江商人の訓えに、客が客を



おかしい！怪人 4C 仮面
の仕業か？
ム・ム・ム…
この金田一をさて置いて



呼ぶ」とあるが、正にこのことではないだろうか？客としては、好きなものを好きなだけ選べ、しかも会話が弾む。なかには、「子供の頃貧しくて、これ買えなかったよなあ」と駄菓子屋を懐かしむ声まであったりして、店内はいつまでも賑わっていた。まるで、押入れの隅にあったおもちゃ箱を見つけ、片付けもせず、いつまでも懐かしんでいる風景に類似するところがあるようだ。

次の取材地は、長浜市内にある駄菓子屋『いせや』さんである。その昔、この店は「饅頭」を製造販売していたようだが、戦後、国の貧しき環境や物資不足の影響から家業の転換を余儀なくされた。

この店は、長浜市の北部三ツ矢町にあり、約100年ほどこの地で生き抜いてきた。

駄菓子屋のおばあちゃん先生

子供の頃、口うるさいおばあちゃんの店に何故だか駄菓子を買に行き自分があったが、何に魅力があって通いつめたのか自分自身でも不思議である。だが、その口うるささを今思ってもイヤミが無いように思う。そんなところに郷愁を寄せるのだろうか。

Q「この店は何年くらいやっておられるのか？」

A「約100年、戦前は塩饅頭を作って売っていたが、約50ほど前からは駄菓子屋を営むようになった」

Q「おばあちゃんはいつこの家に来られたのか？」

A「結婚か？結婚したのは、昭和24年頃。」

Q「駄菓子屋は、いつから始めたのか？」

A「勤め人だった夫が、体を壊し家に居るようになってから始めた。」

Q「今と昔の客層は？」

A「ほとんどが、近所の子供。昔は、大勢来たが今は近所の子だけ。けどたまに大人が懐かしんで来る。この間も、工事をしていた20歳過ぎくらいの兄ちゃんが、ジュースを買って入ってきて懐かしがっていた。」

Q「最近の子供の変化については？」

A「この辺りの子供は、みんな良い子や。たまに、駄菓子の買い慣れん子が来て何時までも迷っているの、叱ったら、後で親が怒鳴り込みに来たことがあったが、買いなれている子は、この買い計算も早い。そうやなあ子供の変わったとこと言われると、黙っ



てることかな。

店といっても人の家に入る時は挨拶ぐらいするやろ、この間も、黙って入ってきたからしかってやったら、挨拶しおった。最近は、コンビニにでも黙って入って黙って買いのもして帰りよるが、それとおんなじように思っている。」



Q「男の子と女の子では？」

A「随分違う。私も女やけど、女の子は何時までも恨みよる。その点、男の子はあっさりしてる。また、懐かしく思ってくれるのも男の子や。この間も、子供の頃、よく来てくれた子が大人になって寄ってくれた。おばちゃんによく怒られたなといいながら懐かしんでくれていた。男の子の方があっさりして良い。私も男の子のほうが好きやしなあ。」

Q「これからも続けられますか？」

A「近所の子に、おばちゃん何時までも店やってナと言われる。こんのものを売ってもいくらにもならないが、ボケ防止に続けているだけや。でも、最近は、小学校や中学校、また、養護学校からも見学にきてくれて、励ましの手紙をたくさん送ってきてくれるので嬉しいことや。」

Q「子供意外に地域の人とは？」

A「最近はお年よりも良くここに来る。集まると病気の話やが、団らんの場合やな」
最初は遠慮がちにポツポツと話していたが、段々、話が弾んできた。不思議だが、そんな時の人間の顔って本当に「いい顔」をしている。また、何十年も前に取材を受けた時の広報誌を、大切にとってあったらしく、奥から出して我々に見せてくれた。
それは、長浜市の「アメニティーニュース（1989.1.13発刊）」と題し、今から13年程前に出されたものだった。何十年の間、子供たちを見て来ただけに「一言ひとことのことばの重み」と「ほのぼのとした温かさ」を感じた。子供に、社会や世の中のルールを教えて、地域の人たちの良き相談相手となる地域の「母親的存在」でもあった。
その昔、駄菓子屋さんは地域のサロンだったのかもしれない。政治・経済・産業と、果ては隣の猫が何匹子供を生んだなどと情報発信をしたり、悩み相談をしたり極めつけは「子供のしつけ」で、コンビニやスーパーでは感じられない「温かさ」があるようだ。
たしかに「こんにちわ」「いらっしゃいませ」とコンビニやスーパーの店員は、しっかりとしたマニュアルにしたがって、最高の接待をしてくれるが、「こんにちは」「これください」「ありがとう」と客が受け答えをしているところなどあまり見たことがない、実に殺風景だ。こうした細かなところにも、おばあちゃん存在が実に大きく駄菓子屋のおばあちゃんは「社会雑学の先生」だった。

事件簿ふぁいるNo.003 より抜粋

事件ふぁいる No. 4 紙芝居検証

日時／2002. 8. 30 場所／守山市播磨田町

創作紙芝居「子さづけ地藏さま」 駄菓子探偵団紙芝居一座

検証：1

緊張の初上演『子さづけ地藏さま』



1. まずは、「灯籠流し」から始まった。それぞれに、工夫を
らした手作りのものを思い思いに流す。



2. 緊張の面持ちで会場まで、まるで
仮装行列のような、何だか怪しい
変な団体？



3. 「参上！駄菓子探偵団」
準備万端、ハイ！記念の1枚でも…、男性人は
緊張の面持ち？



4. 灯籠流しも終わって、徐々に
子供の数が増えてきた。



5. 「よっしゃあ！始めるか」と…団長が上演前の
演説。なかなか、上手だね。昔とった何とか…」かな？



6. 播磨田始まって以来の人出？いや、子供の
数に関係者も驚き、団員の少々ビビリ気味。
それでも、真剣な目で見つめられると、こち
らも「熱が入ってくる」から不思議。





7. 「流石は、松宮〜ン探偵。」子供たちとのコミュニケーションの回り方は抜群。
次第に、会場が和んでくる。

8. いよいよスタート創作紙芝居の始まり始まり！
「掛け合いの語り部」も順調な滑り出し。



9. そして、お楽しみクイズ大会が始まり
クイズに答えて、「当てもの景品」を子供たちが次々とゲット。子供たちの真剣な眼差しに、驚く！



10. 会場は、熱気に包まれ「ハイ」と大きな声を出す
子供たち、久しぶりに見た。そしてその声を聞いた。



11. そして、終了の時間になごり惜しそうに、家路を急ぐ
子供たち。紙芝居が惜しまれるのか？景品が惜しまれる
のか？来年はみんなで上演してね。

12. 今回の実施検証で、「やっさんの紙芝居（事件簿ふぁいるNo. 001）」
の熱気と雰囲気を感じた。また、掛け合いの「語り部」の面白さは
我々の苦肉の策とは言えオリジナリティーである。



日 時：平成 14 年 8 月 23 日(金) 19 時 30 分～20 時頃
場 所：『西の村（西村家）地蔵堂』
参 加 者：西村・藤丸・松宮・松田・浅居 (特) 笹山

地域コミュニティ再生の視点からみた創作紙芝居の果たす役割

我々グループの活動も約 1/3 の期間を過ぎようとしています。今回西村団長のご尽力により、活動テーマである地域コミュニティの再生手段の一つとして、創作紙芝居の効果を検証する機会を得たので私見ではあるが、考察を述べる。創作紙芝居の評価に先立ち、我々のテーマである

“地域コミュニティとは何か”

この『地域コミュニティとは何か?』をメンバーの共通理解を図る意味から今一度、定義しておく。

このテーマには、大きく 2 つの意味が含まれている。

1 つ目は、地域の風土（文化、歴史、自然環境など）とそこに住まう人々との結びつきや関わりとしてのコミュニティという側面である。現代のあらゆる社会構造におけるグローバリズムの浸透は、日常生活におけるゆとり、うるおいといった側面を経済的な効率性からはずれたムダとして切り捨て、地域の風土における個性（アイデンティティ）を喪失させ、金太郎アメのような無個性な地域社会が生まれている。そのような地域では、高齢者は一方的に弱者であり、また、子どもたちは創造性、個性を育む体験をする多様な機会を無くしている。



この現状に対して、創作紙芝居の制作と上映プロセスは高齢者の実体験や昔からの伝承を通じて、その地域にある身近な文化財産を発見することにより、“その地域に住まう”ことへの愛着を新たな住民の中に育み、また、高齢者にとっては“知恵ある語り部”として自らの社会的存在意義を確認する動機付けの場となり得る。私自身、今回の上演を通じて、今までまったく生活体験のない播磨田という地域に少しばかり郷愁に近い思いをもった。

また、地蔵盆という土着の風習を知ってはいたが、今までにない新鮮で親しみ深い文化として、見直すきっかけとなった。要約すると、地域コミュニティの再生には、「地域に住まう人々がその地域風土との関係を再発見すること」がまず必要であるという点であり、創作紙芝居は、その効果的な手段といえる。

2 つ目は、地域の人と人との関わりという視点からのコミュニティである。古くから、我々日本人の多くは、昭和初期に至るまで農耕を主体の自給自足の生活を営んできた。そこでは、村という地域社会が運命共同体を形成していた。とくに、農耕における“水の使用と管理”という協働作業を通じて、人々は強く結びつい

ていた。

しかし、戦後の急速な日本社会の変革の中で、このような結びつきが希薄になり、都市生活者が、主体となった今日の多くの自治組織（自治会等）は、その存在意義を無くしてきており維持運営が困難になってきているのは、他のグループの研究テーマ（自治会お助け隊）からも明らかである。

つまり、地域社会で人々が協働して作業するプロセスが少なくなったことが、地域コミュニティを衰退させた主要因である。これは、1つ目の地域と人との結びつきが希薄になったことにも通じる点である。

この点に対して、創作紙芝居は制作から上演まで、すべてのプロセスをワークショップ（協働作業）することにより、参加者の相互理解や連帯、問題の共有化が深まり“互いが、この地域に住まう”という意識を醸成する効果を持つといえる。今回は、すべてのプロセスをメンバーによるワークショップによりおこなったが、今後は、このプロセスを地域の人々が主体的に担っていくことにより、2つ目の定義による地域コミュニティの再生に大きく貢献すると考える。

語り部について紙芝居に果たす語り部の役割は、3つあると思う。



1. 14インチのちっぽけな画面を広い・深い時空間として観衆に空想の翼を羽ばたかせること。
2. 言葉を通じて観衆の心が、自由にのびのびと広がる手助けをすること。
3. 言葉を通じて観衆の心の中に彩り豊かな世界を描く手助けをすること。

地域スタンダードの試金石

ほんの20年ほど前、近所に駄菓子屋のおばちゃんが出て、子供たちに社会のルールや経済の仕組み（商売と金勘定）を教えていた。地域の『雑学博士』のような存在で、いつのまにか「子供文化の担い手」「地域の子供の受入先」としての機能を持ち、そこが、子供の経済や社会勉強の実践的な「場」であり「サロン」となっていた。

現在、少子化、受験戦争による遊び時間の減少、経営者の高齢化、不況の波に飲まれ「子供たちのサロン」は衰退してしまった。（事件簿ふぁいるNo.003）

また、核家族化によって目上の人との会話や接し方が出来にくくなっている子供たちがいる。これは、人と人の「心地よい距離」が図れないためで、世代間交流によって身に付くものと思われる。

そのため、子供の受入先となる「場（昔は、それこそ家庭や地域であったが、現在は児童館・地域の子供センター等がある）があちらこちらにでき、また、幼稚園や保育園児が施設訪問を実施するなどしている。さらにボランティアとして、またNPOを立ち上げ活動

する団体も出てきた。地域における体制は整ったかに思えたが、実際、これらの「場」が十分機能していないのではないだろうか。

経済や政治の分野では、グローバル・スタンダードが、それこそ「標準」となり一定の尺度として物事全てを図っているような観があるが、こと「文化や地域」といった分野においては、一定の尺度では図れない「特異性」（柳田國男さんは「民俗学」の中で、まさにこのことを言い、ここにまちづくりの原点を問い掛けている。）があり、全てのものを「標準化」することは難しいのではないだろうか。

いま、「何が本当に大切なのか」「何をもって豊かさを感じるのか」を改めて思う時、地域の担うものの重さを思い知らされたかたちとなった。

「駄菓子屋のおばちゃん」の代わりにはならないものの、われわれがツールとする「紙芝居」が、地域の文化の伝承と世代間交流の一助を成す『試金石』となるかは、今後の検証によってさらにはっきりとしたものとなるだろう。しかし、短期間での検証には少々「難」がある。

事件簿ふぁいるNo.004 より抜粋

日時/2002. 9. 29 場所/淡海ネットワークセンター
創作紙芝居「子さづけ地藏さま」

屋台村おもしろ小劇場の記録



3人で頑張った。『おもしろ小劇場』・・・
開始直後は、観客もマバラでどうなることかと思いましたが、センターのみなさんの協力でどうにかかたちになりました。
ありがとうございました。

いつの間にか大人も子供も「紙芝居」
にのめり込み、笑顔があちこちで満開。
緊張もほぐれて、お楽しみ「クイズ」で
会場は喜びいっぱい・・・。

9月29日（日）は、夢いっぱい・・・



事件ふぁいる No. 5 紙芝居検証その2

日時/2002. 10. 27 場所/淡海ネットワークセンター

創作紙芝居「子さづけ地蔵さま」 中間発表にて上演

中間発表殺人未遂事件

探偵のみなさん、中間発表ご苦労さまでした。想像を上まわる反応で浮かれている間に、まさかの殺人未遂事件が起こり、大石八チン伯爵とハート・ト・ハート夫人が倒れてしまいました。辛うじて、わたしたちとままやのママさんは無事でしたが…。」



金田一「事件の解決ですね。腕が鳴る。」

松宮へん「これは奇怪なことです。あれだけ元気があったお二人が…、不思議ですね。」

金田一「もしや、4C仮面の仕業か？ おのれ4C仮面、ゆるさん！」

ナオユ「今後の動向が…？」

浅い川「まあまあ、生きていただけても見つけモンということで…！」

団長「おだまり、仲間が倒れたというのに少しふざけすぎです。そこで、それぞれ会場に居たときのことを思い出してみてください。」

金田一「事件を振り返る訳ですね。じゃ、わたくしから…。」

金田一探偵

紙芝居の実演もこれが最後かと思うと寂しい限りです。

それにしてもいやはや、紙芝居のアイスブレイク効果は実にすばらしいと感心しました。

中間発表会という少々堅苦しい場をあっという間に、和やかなコミュニティの場に変身させてしまうのですから。いつも怖い、怖〜い！藤井絢子先生を無邪気で優しい少女に変身させてしまったのですから！

紙芝居は、永遠に不滅です！さて、何時までも感傷にふけている暇は、ありません。

次は、駄菓子、駄菓子と……どこまでも。

金田一「いやあ〜、実に感傷的で我ながら恥ずかしい……。いやいや、これも4C仮面の仕業では？危ないところだ。気を引き締め、駄菓子の追求に邁進を!!」



松宮～ン探偵

中間発表会の感想

発表はうまくできたし、他へのインパクトもあったし、ぼくとしては、満足しています。発表にむけての、発表のなかみの検討、形式の検討、準備等々、団長の引っ張りくリーダーシップのもと、みんなでできたと思うし、



でも、ひょっとしたら・・・と思うことがあったので、書きます。

それは、8月にむけて、5～7月のミーティングで、小さくてもいいから実践にうつしましょう（実際に何かをやりましょう。）と提案しました。そのことが大事だと思ったからです。

でも、他を見ていると、まだ何もできていないけど、まだ、思いは大

きいという感じでした。でもそのほうが、本当はいいのかと思ったのです。つまり、我々はこちらとまとまり過ぎたのかと。それは私のせいかと。

でも、「2年間のグループ研究というのはそういうものだ。その先は別だが。」とも思っています。

松宮～ン「まあ！…キザですが？こんなところで」

西の村団長

中間発表は、みらい塾幹部会の陰謀により

・・・一番目の発表となりました。中間発表か痛感発表か、昼間発表か、我々グループは、最初であろうが最後であろうが、4C仮面を追いかけて、事件解決のため日々努力しているので動じません。

駄菓子探偵団・・・堂々人生～です。

さて、大人対象に紙芝居を上演。子どもになれるか塾生たち！？次の瞬間「シートに座って・・・」と声をかけると・・・次々前へ・・・シートに座って紙芝居を鑑賞する3期生や審査の先生方が、子どもの目に返って行くのが舞台の袖から見ている私には良く分かりました。しかし、最後のクイズに、答えられない大人・・・元気良く手を挙げるのが子どもより遅い大人・・・子どもの目から大人の目に戻った瞬間も目撃したのでした。

て…、ことで無事中間発表も終わり更なるステップ・・・！思いはすでに、駄菓子調査に心が向かっている団長です！



浅い川探偵

ほっとしたのが実感ですが、最近、各地で紙芝居が見直されているのにビックリします。東京の下町文化として発祥した「紙芝居」が、時代や世代を超えて再び陽の目を浴びようとしている。ハイテクの時代にあえて「アナログ文化」をもって一石を投じたかった背景に、大勢の者が集まり手づくりによる文化の伝承をという思いがあり、そのツールとして選んだのが「紙芝居」であった。

そして、もう一つ自分が心情とする言葉がある・・・「文学は時間を現し、絵画は空間を現す、故に「名画」はその両面を持ち合わせ、時代と世代を超え人々の心に「メッセージ」を送り続ける。」

だからこそ、今、改めて注目を浴びている「紙芝居」をツールとして「コミュニティーの再生」と「新たな文化の伝承の形式」を検証しようとしていることに、少々、自信がわいてきた。ただ、もう少し角度を変えて検証すべきではないかとは思っている。

浅い川「まあまあ、こんなところで…！」

団長「たまには貴方も良いことを言うのね…。そのとおり、もう少し角度を変えて検証すべきネ。」

浅い川「団長、ナオコさんの感想が・・・。」

団長「いいのよ。またの機会にするわ」

団長「そうでした、急に大きな雷が鳴ったとき、会場が一瞬間に包まれましたネ。問題は、その停電の後、委員会メンバーに少し変化が見られましたが、あれは私の思い過ごしでしょうか？」

松宮～ン「いや、そうではないでしょう。確かに4人の顔つきが変わっていました。」

ナオコ「わたしもそう思います。」

金田一「団長、これはひょっとして4C仮面の仕業なのではないでしょうか？」

団長「そうかもしれませんネ。あの形相は、今までなかったように思います。」

浅の川「そう言っても、いつ4C仮面が会場に・・・？」

金田一「あの闇の一瞬。もしや、4C仮面の必殺技・・・。」

松宮～ン「すると、あの4人は暗闇の中で暗示でもかけられたと・・・。」

ナオコ「おそらく・・・、ヨリコ団員にかけたのと同じ『必殺：ノックダウン・ビーム』でしょう？」

団長「ム～！とにかく、4人のいった言葉を思い出すのよ。」



事件簿ふぁいるNo.005 より抜粋

事件ふぁいる No. 6 紙芝居及び創作駄菓子検証

日時／2003. 2. 2 場所／水口町美濃部

かんぴょう取材 高尾敏夫氏 しげ氏

たかが干瓢、されど干瓢…！



「探偵のみなさん、干瓢（かんぴょう）の調査ご苦労さまでした。驚くほどの収穫でした。…？いや、成果でした。

これほどとは正直いって、思ってもみませんでした。だが、訪問した高尾さんご一家と、下準備をいただいた松宮〜探偵に感謝します。

それともう一つ、この調査にヨリコ探偵が復帰し

たこと、本当に嬉しく思います。」

ヨリコ探偵「みなさん、ご心配おかけしました。何とか体調もすこしずつですが戻りつつありますので、また、よろしくお願ひします。」

松宮〜探偵「いや〜、嬉しいことばかりですね。」

金田一「本当です。我がホームグラウンドに団長はじめ探偵諸君を迎えられたこともこの上ない喜びです。」

団 長「ただ、ナオコ探偵がいないのが、少し寂しい感じです。」

浅い川「何〜だか？ 湿っぽいですな。もっとお気楽に……。ネ みなさん」

団 長「おだまり、変にふざけすぎです……。もう、ったく!!」

金田一「え、……。？ 浅い川さん？ あなたも来てたんですか？」

団 長「そんなことより、調査報告をお願いします。」

金田一探偵

○かんぴょうは何処へ

かんぴょうは、夕顔科で別名を“ふくべ”ともいい、江戸時代の版画家である安藤広重の東海道五十三次には、夏の水口宿を象徴する風物詩として登場する。

かんぴょうと水口とのかかわりは、古くは神代にまでさかのぼるといわれ、それほどこの地域とは結びつきのある農作物として、戦後間もなくのころまで周辺地域のほとんどの農家で栽培されていたという。



農作物は、土地を選ぶというが、かんぴょうもその例外ではなくこの地域の土壤に適していたのだろう。そして、貧しい時代の地域の人々にとって、それは鉄・リン・カルシウムという貴重な栄養素を多く含むかけがえのない食材であった。そればかりかこの地域にとって、それは大切な食を通じた風土・文化の重要な要素ではなかったのか？

地域の人々は、畑に“ふくべ”が実るころ夏の訪れを感じ、かんぴょう干しのころ、秋の訪れを感じたのであろう。

そして、冬の訪れとともに食卓に上るかんぴょうは貴重な保存食としてハレの日を演出したのである。

しかし、今では7件ほどの農家を残すまでに廃れてしまい、この地域の原風景ともいえるかんぴょう干しは消えてしまった。

水口のかんぴょうは
まったのだろうか？

その一つのヒントを
ることができる。江戸
ようは、東の下野ノ国

今では、壬生町のか
して全国の生産の大部
しの主役になっている



いったい何処に行ってし

栃木県の壬生町に見つけ
時代、水口藩主のかんぴ
(栃木県)に伝えられた。
んぴょうは町の特産物と
分を占めており、町おこ
と聞く。

元祖産地の衰退振ふりと好対照である。この差は、どこにあるのだろうか？壬生町では、かんぴょうの花（ゆうがお）が町の花として大切に守られている。また、地域の主婦たちは食材としてのかんぴょうを保存する会を結成し、かんぴょうを現在のレシピにアレンジして家庭の食卓から草の根レベルで次代へ食文化として継承しているという。よく耳にする“地産地消”とは、その地域でとれた食材をその地域で消費するというだけではなく、その地域の文化を食を通じて継承していくという意味もあるのだと思う。

同じく“身土不二”とは、まさに地域風土とそこに住まう人々との一体化であり、食文化を通じた地域アイデンティティの確立と継承に他ならないのではないか？

壬生町の人々の取り組みは、まさにこの実践といえよう。

このように2つの地域住民の意識と取り組みの差が地域のかんぴょう文化の盛衰を分けた要因の一つではないか？（仮説）

最後に、北原白秋のかんぴょうという詩の一部を紹介してこのリサーチ報告のまとめとしたい。

かんぴょう かんぴょう かんぴょう 干してる

あのそら このそら かんぴょうはしろいよ

かんぴょう かんぴょう かんぴょう 干してる

あのひも このひも かんぴょうは ながいよ

サラサラ サラサラ かんぴょうは ゆれるよ

事件ふぁいる No. 6 紙芝居及び創作駄菓子検証

日時／2003. 2. 2 場所／水口町美濃部

かんぴょう取材 高尾敏夫氏 しげ氏

たかが干瓢、されど干瓢…！



「探偵のみなさん、干瓢（かんぴょう）の調査ご苦労さまでした。驚くほどの収穫でした。…？いや、成果でした。

これほどとは正直いって、思ってもみませんでした。だが、訪問した高尾さんご一家と、下準備をいただいた松宮～ン探偵に感謝します。

それともう一つ、この調査にヨリコ探偵が復帰し

たこと、本当に嬉しく思います。」

ヨリコ探偵「みなさん、ご心配おかけしました。何とか体調もすこしずつですが戻りつつありますので、また、よろしくお願ひします。」

松宮～ン探偵「いや～、嬉しいことばかりですね。」

金田一「本当です。我がホームグラウンドに団長はじめ探偵諸君を迎えられたこともこの上ない喜びです。」

団 長「ただ、ナオコ探偵がいないのが、少し寂しい感じです。」

浅い川「何～だか？ 湿っぽいですな。もっとお気楽に……。ネ みなさん」

団 長「おだまり、変にふざけすぎです……。もう、ったく!!」

金田一「え、……。？ 浅い川さん？ あなたも来てたんですか？」

団 長「そんなことより、調査報告をお願いします。」

金田一探偵

○かんぴょうは何処へ

かんぴょうは、夕顔科で別名を“ふくべ”ともいい、江戸時代の版画家である安藤広重の東海道五十三次には、夏の水口宿を象徴する風物詩として登場する。

かんぴょうと水口とのかかわりは、古くは神代にまでさかのぼるといわれ、それほどこの地域とは結びつきのある農作物として、戦後間もなくのころまで周辺地域のほとんどの農家で栽培されていたという。



農作物は、土地を選ぶというが、かんぴょうもその例外ではなくこの地域の土壤に適していたのだろう。そして、貧しい時代の地域の人々にとって、それは鉄・リン・カルシウムという貴重な栄養素を多く含むかけがえのない食材であった。そればかりかこの地域にとって、それは大切な食を通じた風土・文化の重要な要素ではなかったのか？

地域の人々は、畑に“ふくべ”が実るころ夏の訪れを感じ、かんぴょう干しのころ、秋の訪れを感じたのであろう。

そして、冬の訪れとともに食卓に上るかんぴょうは貴重な保存食としてハレの日を演出したのである。

しかし、今では7件ほどの農家を残すまでに廃れてしまい、この地域の原風景ともいえるかんぴょう干しは消えてしまった。

水口のかんぴょうは
まったのだろうか？

その一つのヒントを
ることができる。江戸
ようは、東の下野ノ国

今では、壬生町のか
して全国の生産の大部
しの主役になっている



いったい何処に行ってし

栃木県の壬生町に見つけ
時代、水口藩主のかんぴ
(栃木県)に伝えられた。
んぴょうは町の特産物と
分を占めており、町おこ
と聞く。

元産地の衰退振ふりと好対照である。この差は、どこにあるのだろうか？壬生町では、かんぴょうの花（ゆうがお）が町の花として大切に守られている。また、地域の主婦たちは食材としてのかんぴょうを保存する会を結成し、かんぴょうを現在のレシピにアレンジして家庭の食卓から草の根レベルで次代へ食文化として継承しているという。よく耳にする“地産地消”とは、その地域でとれた食材をその地域で消費するというだけではなくて、その地域の文化を食を通じて継承していくという意味もあるのだと思う。

同じく“身土不二”とは、まさに地域風土とそこに住まう人々との一体化であり、食文化を通じた地域アイデンティティの確立と継承に他ならないのではないか？

壬生町の人々の取り組みは、まさにこの実践といえよう。

このように2つの地域住民の意識と取り組みの差が地域のかんぴょう文化の盛衰を分けた要因の一つではないか？（仮説）

最後に、北原白秋のかんぴょうという詩の一部を紹介してこのリサーチ報告のまとめとしたい。

かんぴょう かんぴょう かんぴょう 干してる

あのそら このそら かんぴょうはしろいよ

かんぴょう かんぴょう かんぴょう 干してる

あのひも このひも かんぴょうは ながいよ

サラサラ サラサラ かんぴょうは ゆれるよ

西の村団長

2月2日(土) かんぴょうの取材について 団長 西村ますみ

実は、団長は・・・「かんぴょう」の取材について高尾さん宅に伺うまであまり期待をしていませんでした。が、話を聞いてビックリ！すっかりしっかり「かんぴょう」にはまった団長でした。頭はすでにかんぴょうでいっぱいです。ぐるぐる白いかんぴょうが頭の中を廻っています。たぶん今夜はかんぴょうの夢を見ることでしょう。

- ① かんぴょうには歴史があった→ 広重の絵にかんぴょうが・・・
- ② かんぴょうには、姉妹都市があった→ 栃木県壬生町
- ③ 水口は、かんぴょうの発祥地→ 神宮皇后が産着を捨てた中にかんぴょうの種
- ④ かんぴょうは縁起物である。→ 結ぶ・寿司・昆布巻きなどお祝いの食材に
- ⑤ かんぴょうは風物詩であった→ 夏には、かんぴょう干しが涼しげ
- ⑥ かんぴょうの農家には継承者不足→
- ⑤ かんぴょうと水戸黄門→ かんぴょう職人が水戸黄門に登場
- ⑥ かんぴょう畑でつけたもの→ ふくべ・・・瓢箪と同じようにカラが硬い

たかが・・・かんぴょうされど・・・かんぴょうですね。

私と西山さんは、かんぴょうの駄菓子作り担当。レシピ作りを致します。お楽しみに！
水口住民の藤丸さん～水口は、面白いところだねえ。たった3時間頂けなのにかんぴょう、ヴォーリズの建物、古い町並み、西友やハズイなどなど独特の文化があるじゃないですか。数年前に訪れた時よりいい町って感じましたよ。

高尾さま

かんぴょう一筋、敏夫さんののに敬意を表します。取材を受けていただいた時のひょうひょうとしたお姿は、大変印象に残りました。また、戸黄門出演写真は、ステキです。まるで本物の役者さんのようでした。

しげさんありがとうございます。

いろいろ料理を教えていただいて参考になりました。



中央：高尾 敏夫さん…ほんと、役者さんみたいだね！

かんぴょうのふくべもありがとうございます。あんなにたくさんふくべを畑に置いておくのはもったいないです。なにか利用できたらいいですね。

ヨリコ探偵

江戸時代にタイムスリップしたような不思議な体験でした。

時の流れに埋もれてしまいそうになっている水口のかんぴょうにもう一度光をあて、地元の人に地域の良さを見直してもらえたら・・・新しく水口に住むようになった人達に愛着のきっかけになれば・・・。

駄菓子探偵団の今後の方向付けに大きな収穫が得られた取材だったと思います。

(駄菓子試作状況)

☆ そのまま(乾いたまま)のかんぴょうを油で揚げてみました。薬品の臭い・えぐみが残っていて、まずく、家族にも不評。

☆ 結んで一口に切った状態で30分ほど水につけ、水分をよくふき取って油で揚げ塩をふってかんぴょうチップス

に。薬品は抜けていますが、まあどうってことない味で、ポテトチップスには負ける。

☆ 塩もみして洗い20分ほど水につけた長いままのかんぴょうをなべに入れ、新しい水を加えて12~13分湯がきざるにあげ、一口大にむすび砂糖を加えて煮る。

A かんぴょう重量の80%の砂糖使用-あめ煮のように甘い

B かんぴょう重量の60%の砂糖使用でも甘いが、きなこを

まぶして食べてみると、安倍川餅のようできてかんぴょうらしい食感が残っている。なんとか合格点でしょう。といったところですが、ゆがいたかんぴょうでやってみる。

砂糖を減らしてみる・他の物をまぶしてみるなど再挑戦しようと思っています。



干瓢(かんぴょう)作り三代目、高尾敏夫さんご一家を訪問させていただき、貴重なお話を聞かせていただくことが出来ました。大いなる歴史にふれ、あらためて日本人の食文化のすばらしさと、今日まで代々引き継がれてきた重みと難しさを、一度に知らされる調査となりました。ともあれ、高尾さん

ご夫婦の「かんぴょう作り」のお話は、農耕民族のDNAを持つ私たちの魂にまで響くものでした。

また、地域でかんぴょう菓子に挑戦されていることもあって誠に、勝手ながら「ぼくら駄菓子探偵団の『しが駄菓子認定証』を交付させていただき、第1号となっていただきました。高尾おじいちゃん、おばあさん、ご家族のみなさん、お忙しいところ大勢で押しかけたにもかかわらず手厚いおもてなしを賜り、心から感謝申し上げます。

また、いただいた「かんぴょう」は、駄菓子づくりに活用させていただきます。

認定番号 1号

しが駄菓子認定証

あなたがつくられる菓子は 私たち
が捜し求める地域駄菓子としてふさ
わしいものであることから 勝手なが
らしが駄菓子として認定させていた
だきます。

平成十五年 二月 二日



駄菓子探偵団


団長 西村 ますみ




事件簿ふぁいるNo.006 より抜粋

まちづくりサポート

誰にでもやさしいまちづくりをめざして



まちづくりサポ
ートセンターの
支援



支援・交流
参画

- 1、 個人の思いの変遷
- 2、 グループの流れ（グループの活動内容）
- 3、 訪問調査記録
- 4、 KJ法結果
- 5、 中間発表まとめ
- 6、 NPOサポートセンターに関するアンケート

大槻英理・岸本真理子・菅邦子・谷村節子
久泉和久・藤井伊佐美・松石敏治

個人の想いの変遷(グループ研究にあたってのテーマだし)⇒グループ分け

平成14年	内容	藤井	久泉	菅	大槻	谷村	松石	岸本
1月19日	スタート	パートナーシップについて		楽しい場づくり				
1月27日	発信	人と組織のコーディネート		ボランティアを中心とした夢、環境、情報のネットワーク・公民館、自治会館の活用			外国人支援(言葉) 地域での再生、情報	
2月23日	一人1分スピーチ	障害者、高齢者にやさしいまちとは？各活動のコーディネートを！	歴史や文化に根付いた生活について研究したい	人と人とのネットワーク、ボランティアとのかかわり	地域をよく知っている人達のたまり場、行かなければならない用事、地域にいる者のコミュニティづくり	広く学びの場とした(淡海生涯カレッジ参加、ホームヘルパーよりみえてくるもの、家庭を基盤に活動できるもの)	異文化を学びつつ、地域における外国人との交流をはかる	高齢者福祉「高齢者が痴呆になっても在宅で暮らすことが可能となる」多種多様な在宅福祉サービス
	テーマプロジェクト分け希望グループ	地域、公民館チーム					①グリーン(市民活動)ツーリズム ②地域、公民館チーム	①コーディネート、空家チーム
	ポイント	システム作り ボランティア活動や 障害者の課題	生まれも育ちも草津	皆の集る場づくり	たまり場づくり	高齢者福祉の交流	外国人支援	高齢者福祉(在宅サービス)
3月30日	仮グループの想い発表		地縁活動の低迷、考えがNPOにシフトしていている。地域密着、人	人のネットワーク、コーディネートをやりたい、NPO	地域にいるから繋がっている公民館(コミュニティづくり)、今後の公民館のあり方		人の掘り起こし、システム、NPOを支援するNPOを作りたい。	地域力が弱っている。モデルケースとしての空家
	グループ分け	地域、公民館(ひと)、情報チーム(8名)						
	今後の課題	地域づくりイメージが固まっていない・公民館は地域の人々が集うコミュニティセンター、地縁の再生、外国人にとってもなくてはならないもの、国際交流、横のつながり						

グループの流れ(平成14年4月～15年3月)

テーマ	月	月日・場所	タイトル	グループの活動内容	メンバーの思い
地域の基盤・自治会に関心あり	4月	4月13日～14日 近江八幡市長命寺	未来塾3期生宿泊研修	自治会業務を請け負うNPOをめざす。地縁を再生し地域の活性化をめざす。 自治会お助け隊のネーミング決定	理想的な自治会組織をめざして(会則・役員選挙規定の見直し提案)
	5月	5月11日(土) 守山市立河西公民館	第1回訪問調査	(相手先) おうみ未来塾2期生「敬天愛人班」の稲田・松井さん (ねらい) 地域社会に焦点をあて町内会を通じて市民活動のあり方を調査研究する。	個性あふれるいきいき自治会(コミュニティの原点・町内会)でありたい。 自治会をテーマに調査・研究する。活発な自治会を調査・研究し他の自治会を啓発する。自治会リーダー養成プログラムを開発。自治会活動関係者への提言まで発展させる。
		5月11日(土)	第1回グループ会議	グループ名未定・代表 藤井さん・幹事会は順番で出席すること。 自治会をテーマにする重たさが感じられ、地域の活性化やイベントなどの話も出て、テーマについてはもう少しグループ皆の共通意識を探り、県内の活動家に出会い問題点を整理することに合意	いまの時代だからこそ賢く使おう公共施設・調査活動・人との出会い・イベントの創出・活動の継続 生涯現役をテーマに、高齢になっても生きがいのある人生を歩むために、身近な地域貢献を通して人々が集り、具体的な計画を立て、会(一輪の会)を起こし、情報交換、ネットワークづくりがしたい。
		5月19日(日) ピアザ302	未来塾3期生講義	課題解決手法(KJ法)講師 岸田さん 今ある問題点の解決法の整理	ヘルパーとしての経験から高齢者がいきいきと過ごせる場が欲しいと感じる。
		5月29日(水)	第2回グループ会議	グループみんなの考えを確認。皆で何が研究したいのか、みんなの共通するテーマは何なのか。まず、グループ員個々の思いを理解しあうために、各々の在住地域を訪問しながら、近辺在住のキーパーソンを訪問することを決定(まず1期生の先輩の話聞き、蛍の飛び交う虎姫・長浜へ行く事を決定)	自治会が重荷になる人達も現れてきて役員を避けたり、入会しない人もいる。地域のふれあいの拠点となる自治会館や空家など有効に活用できるシステムづくりが必要。有益な情報や人との出会いがポイントとなるのではないかと。

地域交流の拠点としての空家・公民館・自治会館の活用を探る	6月	6月2日(日) 虎姫町中野地先・県立虎姫御前山教育キャンプ場	第2回訪問調査	(相手先)おうみ未来塾1期生「心のバリアフリー班」の松井賢一さん (ねらい)農村における村づくり・国際交流ボランティア等の地域活動の取り組みを知る	グループ会議も兼ねていたのだけれどもグループ全員集ることができず残念。しかし、野外でのバーベキューはおいしく、蛍の乱舞も見ることができて楽しく交流できた。
		6月9日(日)	4期生開講式 第3回グループ会議	KJ法のまとめとして、今後の活動の方向性として①空家の利用②外国人との共生③世代間の交流④地域資源の発掘⑤NPOの設立⑥町内会サミットの開催にわかれた。グループの今後のあり方については、活発に動いている県内の地域や、キーパーソンの話等を聞き、今後の活動を詰めていくことを決定。グループ名については「地域お宝発見隊」に変更の案もでたが、今後の活動の	
		6月22日(土) 彦根市託老所	第3回訪問調査	「サロンいこいのへや」三宅春代さん宅 (相手先)三宅さん他3名 (ねらい)個人の家の空家活用の実態調査	
	7月	7月28日(日) 甲良町保健福祉センター	第4回訪問調査	(相手先)甲良町尼子地域サロンボランティアグループ (ねらい)お年よりによる地域サロンの実態調査(高齢者対象の字サロン)	地域(ひと)の再生をめざして(地域に生まれた人材を知る計画を提案)Mさん
		7月30日(火)	第4回グループ会議	訪問調査を振り返って、今後のグループ活動の方向について協議。	会議出席率が悪く、全員協議が困難。
	みんなの望む支援センター―構想	8月	8月25日(日) 域通貨おうみ委員会 草津市まちづくりセンター	第5回訪問調査 第5回グループ会議	(相手先)おうみ通貨委員会 金沢さん (ねらい)草津コミュニティ支援センターとおうみ通貨の話聞き今後の活動の参考とす 支援センターについて問題点を協議し、各自のグループとしての取り組む方向について再度、協議。
9月23日(月)			第6回訪問調査	(相手先)NPOひとまち政策研究所の理事 阿部圭宏さん (ねらい)NPOひとまち政策研究所の活動を知り、湖北へのサポートセンター立ち上げの参考とする。	まちづくり支援センターを作るにあたって、しろうと集団がプロ集団になるのはどうすればよいのか。サポートするための力量をもつ必要性がある。

湖北にNPO支援センターを作りたい	10月	10月19日(土)	第6回グループ会議	サポートセンターづくりについて	誰にもやさしいまちづくりをめざして、地域課題や地域活動に関心のある人が集り、話し合い、協働で活動できる環境づくりを、実現化するために、NPOサポートセンターを作りたい。まちづくりの活力をめざすセンターをぜひ、自分の住む地域に作りたい
		10月27日(日)	3期生中間発表	誰にでもやさしいまちづくりをめざして、10月までの活動について報告。今後、NPOまちづくりサポートセンター「ハートアンドハート」の設立をめざして、賛同者とともに、活動計画、理念について支援、交流、参画していくことを発表	
	11月	11月16日(土)	第7回訪問調査	(相手先)ハートフルプラザ会長 下村定さん(ねらい)湖北サポートセンター立ち上げに中心的役割を担ってほしいグループ代表に組織の現状と活動を聞き、今後の方向性を探る。	長浜(湖北)地方の調査・賛同者への呼びかけ・組織づくり・活動内容の検討
		11月27日(水)	単独訪問調査(Fさん)	(相手先)ネットワーク運営委員 辻川作助さん・湖北地方の情報交換、情報収集	
	12月	12月3日(火)	第8回訪問調査	(相手先)長浜在住のボランティア(ハートフルプラザ)活動家(ねらい)ハートフルプラザのメンバーと語り、理解を深める。	長浜限定で活躍しているグループではあるが、湖北に支援センターをと願う私達の「ハートアンドハート」と類似点は多々あり、今後、交流を深めていきたい。
	1月	1月19日(日)	第7回グループ会議	湖北サポートセンターの必要性について議論・湖北の現状について調査をする必要あり。具体的にアンケートをすることを決定。対象者、内容、注意点等を各自で検討すること。	
		1月24日(金)	単独訪問調査(Fさん)	湖北地域のボランティア活動の情報収集(長浜・東浅井郡)	
		1月25日(土)	第8回グループ会議	アンケート作成・対象者検討・発送。	
	2月	2月8日(土)	第9回グループ会議	アンケート集計作業・役割分担・各自でアンケートの集約	
		2月22日(土)	第10回グループ会議	湖北サポートセンターの機能について検討・今後の活動について	
	3月	3月1日(土)	第11回グループ会議	アンケート分析・問題点協議・まとめ	
		3月8日(土)	第12回グループ会議 グループ研究発表 卒塾式	まとめ・今後の活動について	

未来塾3期生・訪問調査記録 No.1

分類	自治会の研究発表、おうみ未来塾2期生「敬天愛人班」	
企画者	久泉	
訪問者	5人（藤井・松石・久泉・谷村・菅）ネットワーク（川尻・天川・川勝）	
訪問日時	平成14年5月11日（土）午後1時～5時	
訪問場所	守山市立河西公民館	
相手先		
相手先出席者	おうみ未来塾2期生「敬天愛人班」の稲田氏、松井氏	
活動内容	時間	随時
	場所	K町内会、公共施設等の会議室
	開始時期	平成13年4月15日から平成14年3月まで33回
	参加者	「敬天愛人班」のメンバー6人
	対象地区	草津市K町内会
	ねらい	未来塾2期生のグループ研究として、地域社会に焦点をあて町内会を通じて市民活動のあり方を調査研究する。
	具体的内容	メンバーがそれぞれ個別のサブテーマを持ち、町内会の活動や住民の考えを聞き取りや座談会により調査研究し、そこに住む人々が持つ町内会という公共の心を取りまとめた。
	会の悩み	なかなか研究テーマが決まらず、メンバーの居住地が県内バラバラなので、会合する場所の選定に苦心した。
その他	メンバーの感想：日々町内会の運営に苦心している役員や住民にアドバイスするというおこがましいことまではできないので、自分の町内会を他の角度から見た調査報告書として自分の良さを再発見してもらえたら、幸いだと思う。	
訪問感想	4月の近江八幡での宿泊研修にて、自治体の支援活動を目的に「自治会お助け隊」の結成をめざしたが、今回の2期生の研究された内容を聞き、班員の今後の活動としては、何の知識も持ち合わせていない我々には、日々悩み実践している町内会の運営のコーディネートができないのではとの不安からもう少し自治会にとらわれずに他の分野についても調査していくこととした。	
今後の進め方	リーダー＝藤井さん、会計＝菅さん ただし、班員はすべて対等の立場で話す。 会合の司会、書記は出席者の中で順番とする。 幹事会には、菅、久泉、松石さんが交代で出席する。 ★今後の予定 5月19日（日）課題解決の研修 6月2日（日）山東町	

記録者：久泉

未来塾3期生・訪問調査記録No.2

分類	農村における村づくり・国際交流ボランティア等について	
企画者	藤井	
訪問者	松石・久保・管・大槻・谷村・藤井・前川・ネットワーク（川尻外2人）	
訪問日時	平成14年6月2日 午後1時～8時	
訪問場所	虎姫町・県立虎御前山教育キャンプ場	
相手先		
相手先出席者	おうみ未来塾1期生 「心のバリアフリー班」 松井賢一氏	
活動内容	時間	6月2日午後1時～8時 研修・懇親会・虫狩り
	場所	虎姫町中野地先・県立虎御前山教育キャンプ場
	開始時期	午後1時～
	参加者	松井賢一氏の地域の地域活動の報告
	対象地区	県域事例
	費用	—
	ねらい	未来塾1期生の松井さんのグループ活動の経過とその現状取り組み、集落農民の地域おこし、農村での国際交流等の情報収集する。
	具体的内容	バリアフリー観光いちご園のオープン、豊かな村づくりの事例発表（キムチを特産にヒマワリにより広がる友好の輪、福祉施設での演奏活動、有機野菜等の活動報告をされる。
	他団体との連携	松井賢一氏は仕事を通して、地域の営農活動に個人から集団化への指導、実践されている。
	会の悩み指導助言	・未来塾活動（卒塾後）も無理をせず、情報交換を年数回している。 ・グループ活動の成果も大切だが、情報交換も大切だということです。
その他		
訪問感想	松井さんの未来塾の活動報告と併せ、仕事を通して（営農指導）住民と共に共通課題を実践を通して楽しく活動されていることに関心。グループ活動も会員それぞれ忙しいなか、あせらず活動したことについて理解を得ました。	
今後の課題	6月に入り、あと9ヶ月。今後のグループ活動に不安→前進しかない。	
NPOとしての可能性	今後も情報収集活動をするなか、グループが共同認識を持って、具体的な行動が出来るか不安。 何かボランティア活動の参考（運営）になるための研究・活動を今後も続けたい。	

記録者：藤井

未来塾3期生・訪問調査記録 No. 3

分類	宅老所『サロンいこいのへや』	
企画者	藤井	
訪問者	7名(藤井夫妻、松石、岸本、天川、川尻、谷村)	
訪問日時	平成14年6月22日(土) 午前9時半～12時	
訪問場所	彦根市御三条町124『サロンいこいのへや』	
相手先	彦根市御三条町124、三宅春代宅、TEL0749-24-3006	
相手先出席者	4名(三宅さん、イノモトさん、安部さん、Aさん)	
活動内容	時間	毎週火曜日午前9時半～午後3時
	場所	『サロンいこいのへや』(三宅さん個人の空家利用)
	開始時間	平成8年4月29日～
	参加者	会員29名(高齢者・スタッフという概念でなく集う者全員が会員)
	対象地区	彦根市後三条町近隣地域、口コミでの参加者
	費用	毎月会費500円、毎回の食事代300円
	ねらい	何でも話せる場づくり。みんなが同じフロアにたつ。 介護保険のようでない、自主性の尊重、来やすさを考えている。
	具体的内容	昼食の献立を「何が食べたい」と相談してその都度決めている。みんなで作ったり、分担して持ち寄ったりいろいろである。 毎回の集いの内容は決めず、誰かが絵手紙しようと思いこんでやったり、どくだみ茶をつくったり、カンパ袋が回ってきたりする。 年1回福祉バス旅行。個人車の乗合やレンタカー利用での外出。(県立大学園祭が人気。花見や温泉、リサイクルステーション見学)
他団体との連携	近くの独居老人の来訪より、口コミで広がっていった。男性は蜂蜜屋さん一人。近隣の主婦とで、現在に至る。会員が市民運動、愛東ヒップアップ、男女参画とそれぞれ重なりあって、活動している。 平成12年8月7日『彦根市やすらぎふれあいの館整備運営費補助金交付要綱』により、建物の改修ができ、月3万の運営補助がもらえ、助かる。	
会の悩み	代表の三宅さんより、順次高齢となるが、ずっと続けていかねばと思う。最後は、一緒に住もうかといったグループホームの発想もできる。 男性会員1人(女性は直感的にあれこれと行動できるが、男性は理論や目的を考え、参加につながらないのでは、男の人の弱さか)	
その他	生き証人的お年寄りの知恵について、代表の三宅さんはこまめに新聞社への投書をされ、かなりの紙面となる。家族の中では認めてもらえないこともここでは違う。 高齢者の尿漏れについて、座布団が濡れてたことはないが、要介護1・要支援に該当すると思われる人もいるし、デイサービス利用者も3人みえる。 家族との連携について、お年寄りの気持ちを閉ざしてしまうことにもなり、あえて考えない(お年寄りの発言も嫁側からすると成る程といった事もある)。	
訪問感想	代表の三宅さん、その後押し役の阿部さん(未来塾1期の運営委員)、会計イノモトさん、主婦Aさんが連携をうまくされ、皆さん無理なく楽しまれているようであった。非常に多くの事を語って頂いた。特に、外出時でのお年寄りの向学心・好奇心はすごく、要は経験してないだけの事という発言は貴重であった。一方、若いスタッフの確保や安全面の配慮等もされ、外出経験を重ねられていることのすごさとその影響力を思う。 新聞への投書を始め、情報活動や、各種団体との連携にとあれこれ発信されている事に感心した。彦根市の行政整備のよさをうらやましく思うが、足元からこつこつとも教えられたように思う。	
今後の課題	地縁、子育てネットと広く目を向けて、「ぬくもりの場」発信 (この会でも、内部で意地悪があったり、嫌われている人がいたり、ゴソッと物をとる人がいたりする。しかし、恥をかかせないことが大事だ)	
NPOとしての可能性	憲法の基本的人権をうけて、誰もが当たり前のように生活できることが、自然であり当然であるとするノーマライゼーションの考え方の普及や高齢化社会の進展にもなって、1994年「生活福祉空間づくり大綱」が発表され、2000年には介護保険制度も導入された。 『サロンいこいのへや』の活動が、1996年の発足との事で、活動量や情報量ともに、NPOとしての可能性は十分と思えた。	

未来塾 3 期生・訪問調査記録 No. 4

分類	高齢者対象の字サロンボランティアグループ	
企画者	藤井	
訪問者	6名（藤井・谷村・松石・大槻・菅・川勝（淡海ネットワーク）	
訪問日時	平成 14 年 7 月 28 日（日）午前 9 時 30 分～11 時 30 分	
訪問場所	甲良町保健福祉センター 会議室 （仲介者 甲良町保健福祉課長 小川さん）	
相手先	甲良町尼子地域サロン「絆の会」 〒522-0242 甲良町尼子 1 2 3 8 ・代表者 伊藤徳太郎 Tel 0 7 4 9 - 3 8 - 3 5 5 4	
相手先出席者	4 名（木村かよこ・寺本・伊藤・奥田）	
活	時間	月 2 回木曜日の午後 1 時～3 時半・おやつ有り
	場所	字（尼子）所有の老人の憩いの家（平成の館）
動	開始時期	平成 7 年 8 月 10 日～
	参加者	高齢者 50 名位・ボランティア 1 回 15 名位（会員 50 名）
	対象地区	尼子 260 世帯・人口 1100 名・老人クラブ会員 250 名
	費用	参加費 100 円を募金箱に入れる・寄付金お断り・野菜寄付 OK
	ねらい	地元の年寄りが年寄りの面倒を見る、来て楽しいサロンの開催・気楽な集まりをめざす。
	具体的内容	手作りおやつや懐かしい歌や健康体操で話しがはずむ。会則なしの自由参加。折り紙等嫌がる人がいるので特に毎回テーマ決めず。 年 2 回 10 時～3 時の昼食あり・買い物ツアーあり
内	他団体との連携	当初、赤十字奉仕団に手作りおやつ等の手伝い頼む老人会・区長等との関係、特に問題なし。 町から 1 名当り 300 円の補助金・町社会福祉協議会から年間 3 万円の補助金あり・
	会の悩み	繰越額が年々増えている。使い道に思案するが市町村合併で今後必要かも？参加者に男性が少ない（10 名位）ボランティア・参加者の高齢化。介護保険とのからみで、在宅介護が少なくなりいつかサロンがなりたたなくなる時がくるかも。
容	その他	
訪問感想	開設当初から関わり今も皆出席という 4 名の方の熱い情熱が伝わってきました。伊藤さんや奥田さんの男性 2 人が退職後、何か役立つことをしたいと社協からの訪問入浴ボランティアがきっかけとなり、地域に目をむけることになったとのこと。畑仕事や料理が得意な寺本さん、痴呆老人の行き場のないことが気がかりだった木村さん達女性 2 名。絆の活動をきっかけとして、おおらかに楽しみながら地域とかかわっている様子が感じられました。	
今後の課題	介護保険のからみで昔密接だった町の保健婦さんとの出会いが少なくなったとの事。ケアマネージャーとの連携が必要。	
NPO としての可能性	字（自治会）単位のサロン開催は、地域福祉の充実との立場から県内の社会福祉協議会が補助金等を出して活発に展開されている。必要な人に情報が確実に流れているのかその当りが可能か？	

記録者 菅

未来塾3期生・訪問調査記録 No. 3

分類	宅老所『サロンいこいのへや』	
企画者	藤井	
訪問者	7名(藤井夫妻、松石、岸本、天川、川尻、谷村)	
訪問日時	平成14年6月22日(土) 午前9時半～12時	
訪問場所	彦根市御三条町124『サロンいこいのへや』	
相手先	彦根市御三条町124、三宅春代宅、Tel.0749-24-3006	
相手先出席者	4名(三宅さん、イノモトさん、安部さん、Aさん)	
活動内容	時間	毎週火曜日午前9時半～午後3時
	場所	『サロンいこいのへや』(三宅さん個人の空家利用)
	開始時間	平成8年4月29日～
	参加者	会員29名(高齢者・スタッフという概念でなく集う者全員が会員)
	対象地区	彦根市後三条町近隣地域、口コミでの参加者
	費用	毎月会費500円、毎回の食事代300円
	ねらい	何でも話せる場づくり。みんなが同じフロアにたつ。 介護保険のようでない、自主性の尊重、来やすさを考えている。
	具体的内容	昼食の献立を「何が食べたい」と相談してその都度決めている。みんなで作ったり、分担して持ち寄ったりいろいろである。 毎回の集いの内容は決めず、誰かが給手紙しようと持ちこんでやったり、どくだみ茶をつくったり、カンパ袋が回ってきたりする。 年1回福祉バス旅行。個人車の乗合やレンタカー利用での外出。(県立大学園祭が人気。花見や温泉、リサイクルステーション見学)
	他団体との連携	近くの独居老人の来訪より、口コミで広がっていった。男性は蜂蜜屋さん一人。近隣の主婦とで、現在に至る。会員が市民運動、愛東ヒップアップ、男女参画とそれぞれ重なりあって、活動している。 平成12年8月7日『彦根市やすらぎふれあいの館整備運営費補助金交付要綱』により、建物の改修ができ、月3万の運営補助がもらえ、助かる。
会の悩み	代表の三宅さんより、順次高齢となるが、ずっと続けていかねばと思う。最後は、一緒に住もうかといったグループホームの発想もできる。 男性会員1人(女性は直感的にあれこれと行動できるが、男性は理論や目的を考え、参加につながらないのでは、男の人の弱さか)	
その他	生き証人的お年寄りの知恵について、代表の三宅さんはこまめに新聞社への投書をされ、かなりの紙面となる。家族の中では認めてもらえないこともここでは違う。 高齢者の尿漏れについて、座布団が濡れてたことはないが、要介護1・要支援に該当すると思われる人もいるし、デイサービス利用者も3人みえる。 家族との連携について、お年寄りの気持ちを閉ざしてしまうことにもなり、あえて考えない(お年寄りの発言も嫁側からすると成る程といった事もある)。	
訪問感想	代表の三宅さん、その後押し役の阿部さん(未来塾1期の運営委員)、会計イノモトさん、主婦Aさんが連携をうまくされ、皆さん無理なく楽しまれているようであった。非常に多くの事を語って頂いた。特に、外山時でのお年寄りの向学心・好奇心はすごく、要は経験してないだけの事という発言は貴重であった。一方、若いスタッフの確保や安全面の配慮等もされ、外出経験を重ねられていることのすごさとその影響力を思う。 新聞への投書を始め、情報活動や、各種団体との連携にとあれこれ発信されている事に感心した。彦根市の行政整備のよさをうらやましく思うが、足元からこつこつとも教えられたように思う。	
今後の課題	地縁、子育てネットと広く目を向けて、「ぬくもりの場」発信 (この会でも、内部で意地悪があったり、嫌われている人がいたり、ゴンツと物をとる人がいたりする。しかし、恥をかかせないことが大事だ)	
NPOとしての可能性	憲法の基本的人権をうけて、誰もが当たり前にならざるに生活できることが、自然であり当然であるとするノーマライゼーションの考え方の普及や高齢化社会の進展にともなって、1994年「生活福祉空間づくり大綱」が発表され、2000年には介護保険制度も導入された。 『サロンいこいのへや』の活動が、1996年の発足との事で、活動量や情報量ともに、NPOとしての可能性は十分と思えた。	

未来塾3期生・訪問調査記録No.4

分類	高齢者対象の字サロンボランティアグループ	
企画者	藤井	
訪問者	6名（藤井・谷村・松石・大槻・菅・川勝（淡海ネットワーク）	
訪問日時	平成14年7月28日（日）午前9時30分～11時30分	
訪問場所	甲良町保健福祉センター 会議室 （仲介者 甲良町保健福祉課長 小川さん）	
相手先	甲良町尼子地域サロン「絆の会」 〒522-0242 甲良町尼子1238・代表者 伊藤徳太郎 TEL0749-38-3554	
相手先出席者	4名（木村かよこ・寺本・伊藤・奥田）	
活動内容	時間	月2回木曜日の午後1時～3時半・おやつ有り
	場所	字（尼子）所有の老人の憩いの家（平成の館）
	開始時期	平成7年8月10日～
	参加者	高齢者50名位・ボランティア1回15名位（会員50名）
	対象地区	尼子260世帯・人口1100名・老人クラブ会員250名
	費用	参加費100円を募金箱に入れる・寄付金お断り・野菜寄付OK
	ねらい	地元の年寄りが年寄りの面倒を見る、来て楽しいサロンの開催・気楽な集まりをめざす。
	具体的内容	手作りおやつや懐かしい歌や健康体操で話しがはずむ。会則なしの自由参加。折り紙等嫌がる人がいるので特に毎回テーマ決めず。 年2回10時～3時の昼食あり・買い物ツアーあり
	他団体との連携	当初、赤十字奉仕団に手作りおやつ等の手伝い頼む老人会・区長等との関係、特に問題なし。 町から1名当り300円の補助金・町社会福祉協議会から年間3万円の補助金あり・
	会の悩み	繰越額が年々増えている。使い道に思案するが市町村合併で今後必要かも？参加者に男性が少ない（10名位）ボランティア・参加者の高齢化。介護保険とのからみで、在宅介護が少なくなりいつかサロンがなりたたなくなる時がくるかも。
その他		
訪問感想	開設当初から関わり今も皆出席という4名の方の熱い情熱が伝わってきました。伊藤さんや奥田さんの男性2人が退職後、何か役立つことをしたいと社協からの訪問入浴ボランティアがきっかけとなり、地域に目をむけることになったとのこと。畑仕事や料理が得意な寺本さん、痴呆老人の行き場のないことが気がかりだった木村さん達女性2名。絆の活動をきっかけとして、おおらかに楽しみながら地域とかがわっている様子が感じられました。	
今後の課題	介護保険のからみで昔密接だった町の保健婦さんとの出会いが少なくなったとの事。ケアマネージャーとの連携が必要。	
NPOとしての可能性	字（自治会）単位のサロン開催は、地域福祉の充実との立場から県内の社会福祉協議会が補助金等を出して活発に展開されている。必要な人に情報が確実に流れているのかその当りが可能か？	

記録者 菅

未来塾3期生・訪問調査記録No.5

分類	支援センターについての話しを聞き今後の活動について考える	
企画者	藤井	
訪問者	藤井・久泉・谷村・菅	
訪問日時	平成14年8月25日(日)午後2時～4時	
訪問場所	草津「ひとの駅」 特定非営利活動法人(NPO)地域通貨おうみ委員会	
相手先	金沢恵美さん(地域通貨おうみ委員会代表・元草津コミュニティ支援センター事務局)	
相手先出席者	金沢さんのみ	
活動内容	時間	
	場所	
	開始時期	
	参加者	
	対象地区	
	費用	
	ねらい	
	具体的内容	
	他団体との連携	
	会の悩み	
その他		
訪問感想	<p>金沢さんが、1999年に草津市コミュニティセンターの事務局をされていたので、それにまつわる話しを聞きましたが、彼女は現在、おうみ通貨を活発に展開しており事務局の女将として商店街の空家を借りて参加交流ショップ「万屋おうみ」を、訪問した2日前から開店しており、もっぱらそちらの方へ私達の関心がいきました。まちづくりやおうみ通貨に関心のある人たちが、気軽に集れる場を作り出したエネルギーに感心。30人委員会(1万円の会費)と3人の事務局で運営とのことでしたが、金沢さん個人の魅力と相まってアイデアあふれるおうみ委員会の活動に圧倒されました。私達のめざしているものを既に実践されているという印象を受けました。</p> <p>支援センターについては、98年に200万円の資金の中でマンション業者から、駅に近い便利な場所が提供され、その運用が1年目は、草津コミュニティ事業団に任せられ2年目から利用団体の市民の運営委員会に任せられ、皆に気軽に施設を利用してもらうために利用券を発行(後に地域通貨に発展)。その時40団体の利用があり、事務局をボランティアがしたりしましたが、なかなか魅力あるセンターにはなりませんでした。NPOの支援等もめざしたが、上手くいかなかった。(いつでも同じ人がいる。ネットワークが出来ている等)現在は、理事会組織(ボランティアスタッフ)で運営されているようです。現在、金沢さんは地域通貨が忙しくごぶさたとのこと。</p>	
今後の課題	センタースタッフの人材	
NPOとしての可能性	可能	

記録者 菅

未来塾3期生・訪問調査記録 No. 6

分類	NPO ひとまち政策研究所	
企画者	大槻	
訪問者	3人（藤井・菅・久泉）ネットワーク（川尻）	
訪問日時	平成14年9月23日（月）午前10時～12時	
訪問場所	淡海ネットワークセンター	
相手先出席者	ひとまち政策研究所 理事 阿倍 圭宏	
活動内容	時間	随時
	場所	事務所：近江八幡市桜宮町 207-3
	開始時期	平成14年3月設立総会 平成14年7月NPO取得
	参加者	メンバー約30人
	対象地区	滋賀県内
	ねらい	この法人は、住民、行政、企業、大学等のパートナーシップの基に、それらをネットワークさせ、とくに輝くひと・まちネットワーク滋賀の活動と連携しながら市民活動の支援、地域づくりの政策研究、新たな文化・経済・社会の活性化、人材育成などの事業を行うことにより、地域社会の公益に寄与することを目的とする。
	具体的内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市民活動の支援とネットワークキング ・ 地域課題解決のためのまちづくり・地域形成に関する調査、計画作成などのコンサルタントや助言 ・ 地域社会の政策向上・コーディネート ・ 新たなコミュニティ・ビジネスの創造や育成 ・ まちづくり・地域形成を担う人材の発掘・育成 ・ 情報誌・機関誌・書籍などの発行
	会の悩み	資金繰りに苦心している。信用金庫や労金から行政からの委託契約書を担保に運転資金を融資してもらっている。
その他	7月にNPOの取得以来すでに3件の受注がある。 現在常勤のスタッフを抱え、NPOのシンクタンクとして、地域に密着した中間支援を展開することが目標。	
訪問感想	ひとまち政策研究所は、まさしく総合コーディネーターとしてコンサルタント業務を行政から請け負うだけのプロ集団と言えるが、一方、私たちのグループは、素人集団である。素人ゆえに一般の人たちと同次元で、NPOの設立に際し、試行錯誤しながら支援していきたいと思う。	

記録者：久泉

おうみ未来塾第3期生・訪問調査記録 No.7

分類	ボランティア活動家との情報交換	
企画者	藤井伊佐美	
訪問者	藤井、岸本、松石、川尻	
訪問日時	平成14年11月16日土曜日	
訪問場所	淡海ネットワークセンター2階会議室	
相手先	長浜市・ハートフル・プラザ、会長下村定様	
相手先出席者	ハートフル・プラザ、会長下村定様	
活動内容	概要	ハートフルプラザ会長を淡海ネットワークセンターにお招きしその設立の経過活動の経過および現状と将来について熱く語ってもらった。
	経過	平成10年3月、長浜市障害者や高齢者にやさしいまちづくり計画を作成 平成10年秋、ハートフルプラザ（誰にもやさしいまちづくりを進める会）を結成
	活動	平成11年11月の第1回「一日ハートフルプラザ」開催を皮切りに年間数回程度の企画を実施来ている ハートフルギャラリー、シンポジウム、アートフェスタ、スポーツフェスタ、および長浜曳山まつり、花火大会などのイベントに協賛した企画も実施
訪問感想	組織	ハートフルプラザには会則が制定されている、しかし会員の自由闊達な活動が活力と活動継続の原動力となっている 会長のリーダーシップと情熱が活動の支えとなっている NPO化への検討がはじめられているとのことである
	活動	活動は年間を通じて数件のイベントが中心となっていて既に数年間継続してこれた1要素と考えられる、つまり多すぎず少なすぎずである
	費用	行政との連携、地元ロータリークラブとの協調などがあり当面は資金難などはなさそうであるのは強みといえる チラシや企画などにもゆとりとセンスがうかがえ共感もてる
	構成	会の構成員は長浜を中心としたいろいろの分野の皆さんであり自由闊達な議論が交わされている、個々の構成員がそれぞれの分野で活躍しているのがこのハートフルプラザでさらに立体的に展開されていて頼もしい

記録者・松石

未来塾3期生・訪問調査記録 No. 8

分類	ボランティア活動家との情報交換	
企画者	藤井	
訪問者	久泉・藤井	
訪問日時	平成14年12月3日 午後6時30分～8時30分	
訪問場所	長浜市高田町 長浜市社協	
相手先	長浜在住のボランティア活動家（ハートフルプラザ）	
相手先出席者	武藤実（青少年・高齢者・男女共同参画・障害者活動） 下村定（ハートフルプラザ総括） 前田正史（障害者・ユニバーサルデザイン・PTA教育活動） 広部猛司（まちづくり・ひきやま・インターネット活動）	
活動内容	時間	随時
	場所	市内公民館・社協等
	開始時期	平成11年6月29日 ハートフルプラザ設立
	参加人	45人 （職業・年齢を問わず何かのボランティア活動の実践家）
	対象地区	長浜市・勤務する者
	具体的内容	市が「障害者や高齢者にやさしいまちづくり計画書」を市民も参画して作成。より具体的な実践が見られず、計画書に関わった人を中心にボランティア活動を目指して設立され、現在に至っている。一般に行政は計画だおれのなか、計画のチェックとその実践活動は現在市内では唯一の活動団体。各種活動のボランティア実践家がネットワークして「ハートフルプラザ」を設立。下部組織があるので動員、実践力があり、行政にも頼られる組織になっている。 例：1. 長浜曳山まつり 棧敷席の確保、障害者が同じ目線でまつりを鑑賞。 2. 長浜花火大会棧敷席。 3. ロータリークラブ 企業・行政との連携による＝ユニバーサルデザイン、障害者等のイベントに参画。
	他団体との連携	今後はハートフルプラザの事業の大きな柱として各種ボランティアの活動をコーディネートする事業を企画したり、多くのイベントを実施したいということ。
会の悩み	場所（サロン）	
訪問感想	ハートフルプラザの会員は年齢、職業等を問わず、各種ボランティアの活動家の集まりで、計画（企画）し、即実践力がある。私達の「ハートアンドハート」構想とピッタリで、N・P・O法人も設立に向けて検討中であるということです。未来塾「ハートアンドハート」7人のグループ活動も誰にもやさしいまちづくりを目指して「ハートフルプラザ」と交流し、参画し、来年3月卒塾に向けてN・P・O法人設立に向けて参画し、支援してはと考えます。「ハートフルプラザ」の会員の理解も得られそうです。	
NPOとしての可能性	平成15年3月までに設立は無理ですが、設立に向けた理念、活動計画等を整理し、私達が1年半近い活動の成果に結び付けて、平成15年中にN・P・O法人の立ち上げに向けて引き続きグループ活動を継続してはと考えます。	

記録者：藤井

【全体的なこと】

- ・メリットのある活動組織をつくる
- ・自分のできることを考える
- ・常に問題発見に努める
- ・地域のコーディネーターとして自己を高める

- ・町内の問題を解決するには時間が必要

【テーマ探し】

- ・原点に戻って自治会の役割、家族の役割に絞る
- ・問題点を整理し、より重点的に絞り込む
- ・自治会とかかわりを持つ中でテーマを探す
- ・切実に困っている人たちの抱えているテーマを探す
- ・地縁に対するテーマを設定する

【グループ活動の進め方】

- ・自己の問題点をグループに出す
- ・グループで話し合いの場を重ねる
- ・仕掛けする側が共通認識を持つ
- ・活用できるものを一覧表にして情報を共有する
- ・関心のあることを明確にし共通項を見出す
- ・各自の得意分野をディスカッションする
- ・収集した情報はみんなに配り共有化する
- ・役割分担する

【外国人との共生】

- ・外国人と外国語を通して文化交流する
- ・外国人のハンディキャップを知り共生の道を探る
- ・日本に住む外国人の意見からヒントをもらい活用する

【世代間交流】

- ・老人施設と子供たちの交流
- ・学校と老人クラブの連携
- ・地域老人が子供の面倒を見る
- ・老人と子供を結びつける欧州活動がある

【具体的テーマや問題点の抽出方法】

- ・よその町内の実態を考える
- ・町内の問題（住民増など）を考える
- ・自治会に入らない人の意見を聞き、問題点を探る
- ・自治会役員や行政機関にヒアリングする
- ・学生や転勤族が何に関心あるのかヒアリングする
- ・自治会館を開放して意見箱を設け、問題点を見つける
- ・既存のグループで成果の出たテーマを研究し要因を学ぶ
- ・問題点を明確にするためケーススタディで特定の町内会に入る
- ・淡海ネットワークセンターの情報を活用する
- ・知識と活用できるネットワークを出し合う
- ・情報のつながりを整理しながら全体を作り上げて行く
- ・地域の有意義な人材に出会う

【地域資源発掘】

- ・キーパーソンのネットワークを利用し多くの人材を探す
- ・インターネットを活用し地域の活動家を探す
- ・地域のキーパーソンを探す
- ・教育委員会、学校を通じて地域の活動家を探す
- ・地域に住む芸術、芸術技能を持った人材を発掘する
- ・小学校の授業で地域の財産を使う
- ・歩こう会や勉強会を企画し、自然環境、文化財探訪をする
- ・滋賀の探索をする
- ・地域にある有形無形の財産を見直し、生活に生かす

【空家の利用】

- ・空家を地域のサロンとして利用する
- ・地域の古い建物を利用する
- ・空家を有効活用するため、ソフトを充実する
- ・空家を探すのに老人のつてを活用する
- ・空家の提供を交渉する

【NPO団体設立】

- ・公民館機能をNPO団体で担う
- ・地域の問題を相談できるNPOをつくる
- ・公民館と自治会館のリンクをNPOを考える
- ・公民館の運営費をNPOに活用する
- ・NPOに任せられるよう法整備をし、行政を説得する

【町内会サミット開催】

- ・インターネットで町内会サミットを呼びかける
- ・市町村に呼びかけ町内会サミットの代表者を集める
- ・町内会サミットを開催し、地域の問題を共有しアイデアを交換する
- ・町内会サミットの①大義名分②スポンサー③サポーター、を明確化し、全国規模を想定する

- ・楽しい事を企画しながら導き出していく
- ・自分の関心を公の場で発表する

ハート アンド ハート

～誰にでもやさしい

まちづくりをめざして～

2002/10/27

1

はじめまして

『ハート アンド ハート』です。

・実は、「自治会御助け隊」が、変身しました。

・メンバー紹介

リーダー: 藤井 伊佐美

会計 : 菅

メンバー: 大槻、岸本、谷村、松石、久泉

2002/10/27

2

メンバーの熱い思い

3月グループ分け

地域、公民館、ひとのネットワーク

4月近江八幡での宿泊研修

(仮称)自治会御助け隊構想

5月課題解決手法の研修

みんなのやりたい事をKJ法にて整理

<各テーマに沿って訪問調査研究>

2002/10/27

3

調査記録1 自治会の研究

おうみ未来塾2期生「敬天愛人班」の報告

「K町による公共によせるところ」から

(内容)

未来塾2期生が、それぞれ個別のサブテーマを持ち草津市内のK町内会を調査研究し、そこに住む人々が持つ町内会という公共の心をとりとめた。その調査研究の様子を代表者からうかがった。

2002/10/27

4

調査記録2

農村における村づくりと国際交流
おうみ未来塾1期生「心のバリアフリー班」
の松井賢一さんの報告

(内容)

心のバリアフリー班の活動報告と、松井さんの仕事上の営農指導を通じて住民と共に活動されている報告をうかがった。

2002/10/27

5

調査記録3

宅老所「サロンいこいのへや」

個人が開設している老人の憩いのサロン

(内容)

主宰者の個人の空家を利用して近所の独居老人が集まり、食事を作ったりみんなで外出したり、無理なく楽しんでいる。現在彦根市内には、宅老所が5箇所あり、その管理運営方法は異なるが、地域での「支え合い」活動に感心した。

2002/10/27

6

調査記録4

甲良町の尼子地域サロン「絆の会」

尼子地域が所有する老人憩いの家での活動

(内容)

地元のお年寄りが集まり、手作りのおやつや、懐かしい歌、健康体操で楽しく過ごしている。現在甲良町内では、各集落ともユニークな地域サロンを開催している。

2002/10/27

7

調査記録5

草津「ひとの」駅

NPO地域通貨おうみ委員会

まちづくりや、地域通貨おうみに関心のある人たちが気軽に集まれる場となるように、空家を借りて参加交流ショップ「万屋おうみ」が、8月23日にオープンした。

2002/10/27

8

調査記録6

NPOひとまち政策研究所

今年7月「ひとまち政策研究所」がNPO法人の認可を取得。NPOのシンクタンクとして、地域に密着した中間支援を展開。理事の一人である阿部さんにお話をうかがった。

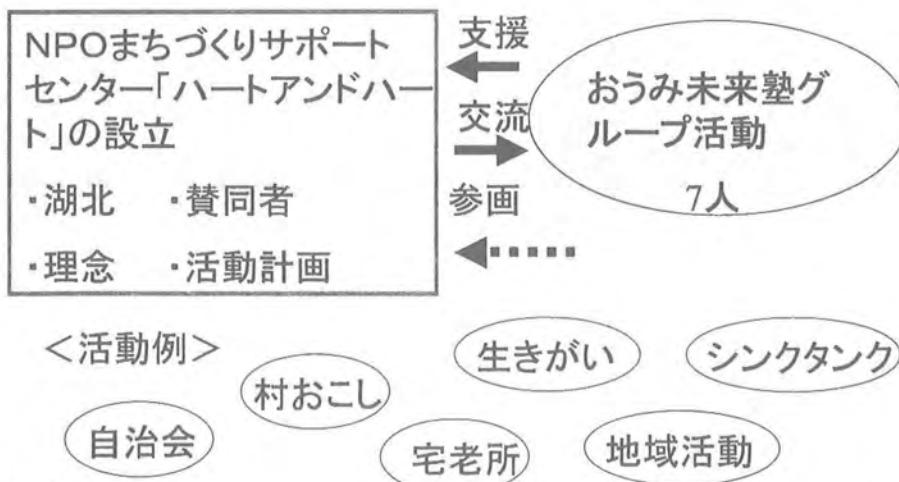
2002/10/27

9

『ハート アンド ハート』構想

まちづくりサポートセンターの支援

—誰にもやさしい まちづくりをめざして—



2002/10/27

10

【目的】

センターの必要性は各地で叫ばれているが、実際、ネットワークが無くても、独自に活発に活動している団体もいくつもあった。また、経験者へのヒアリングなどから、「時期早尚ではないか」等の声もあった。よってここでは、現実に立ち上げる際に、協力を要請する団体リーダーを任意に選定し、調査することによって、センターの差し迫った必要性と、現実に立ち上げた際に起こる問題点について探ることを目的とする。

【アンケート対象者】

東浅井郡と長浜市に拠点を置き、且つ、実際にNPOサポートセンターを設立した際に、中核となって運営していけそうな活動家（事前に面会し趣旨説明済み）と、団体の活動内容から、センターを活用する可能性が高いと思われる団体のリーダー（公的名簿より選定）。全32団体を対象に行う。

【調査方法】

平成15年1月22日から平成15年2月5日。調査票を直接団体リーダーに手渡し、後日、同封の返信封筒により返送いただく。

【回収率】

■全32通中、30通回収。回収率93.8%。

NPOサポートセンターに関するアンケート調査票

1、 貴団体の活動について、次の項目にお答えください。

(1) グループ名及び代表者名

・ グループ名

・ 発足年 年

・ 代表者名

・ 会員数 名

(2) 連絡先（アンケート回答者）

・ 住所

・ 氏名

・ 電話

(3) 団体の設立・趣旨についてご記入ください。

(4) 活動テーマについてあてはまるものを選んでください。

（複数にわたる場合はいくつでも○をしていただいて結構です。
ただし、そのうち主なものに1つに◎をしてください。）

1. 環境

5. 物産・産業振興

9. 自治会活動

2. 福祉

6. 観光・地域振興

10. 生涯学習

3. 文化・芸術

7. 情報ネットワーク

11. 国際交流・協力

4. イベント企画・実施

8. ミニコミ誌発行等

12. その他

（具体的に)

(5) 活動エリア（該当するものに○をして下さい。）

1. グループが所在する市町村内

2. 隣接する複数市町村

3. 滋賀県全地域

4. 滋賀県内及び全国・世界

5. その他（具体的に)

(6) ここ2～3年の主な活動内容についてご記入ください。

(7) 現在抱えている課題や問題はどのようなことですか、具体的にご記入ください。

(8) 今後、力を入れていきたい取り組みは、どのようなことですか。

2、 サポートセンターについてお尋ねします。

現在、活動している団体等が個々に孤立することなく、さらに連携をとり交流していくためのサポートセンターの必要性を感じていますが、皆様のご意見をお聞かせください。

(1) サポートセンターの必要性を感じますか。

- 1・はい 2・いいえ 3・よくわからない

はいと答えた方のみ、関わり方についてお答えください。

- 1・設立に積極的に関わりたい 2・設立されれば参加したい
3・その他 ()

(2) センターに対して期待する内容を、いくつでも選んで○をつけてください。

- 1・情報の収集・提供および相談
2・研修・交流ネットワークづくり
3・研究・実践の企画に対する相談・コーディネート
4・イベント・講演会等の開催
5・出版及び情報の発信
6・イベントや地域活動などに関する調査・研究
7・多様な分野の人々が自由に交流できる場所の提供
8・その他 ()

(3) その他、センターについてご意見やご提案がありましたらご記入ください。

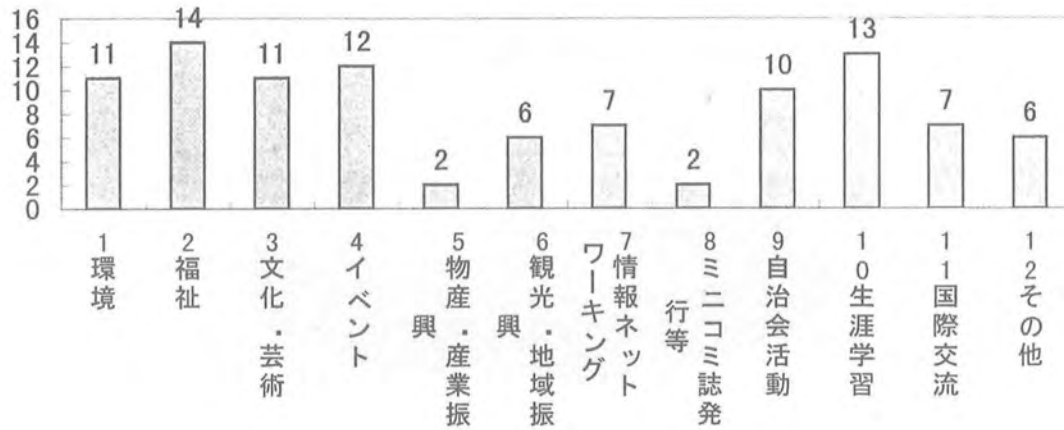
ご協力ありがとうございました。

なお、会則や活動内容のわかる資料がありましたら、1部を回答用紙とともに送付をお願いします。

1-(5) 活動テーマについてあてはまるものを選んでください。(複数回答)

〈選択肢〉 1 環境 2 福祉 3 文化・芸術 4 イベント 5 物産・産業振興 7 情報ネットワーク
 6 ミニコミ誌発行等 自治会活動 10 生涯学習 11 国際交流 12 その他

活動のテーマ調査結果



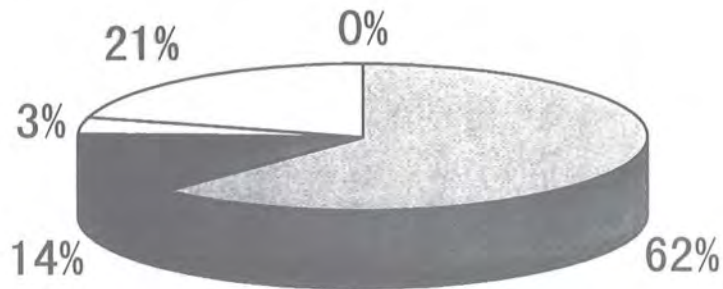
➔ POINT

- テーマは多岐に渡っている。
- 特に「福祉」「生涯学習」をテーマとしている団体が多い。高齢化の影響が伺える。

1-(5) 活動エリア

〈選択肢〉 1グループが所在する市町村内 2隣接する複数市町村 3滋賀県全地域 4滋賀県内及び全国・世界 5その他

活動エリア調査結果



- グループが所在する市町村内(18件)
- 隣接する複数市町村(4件)
- 滋賀県全地域(1件)
- 滋賀県内及び全国・世界(6件)
- その他(0件)

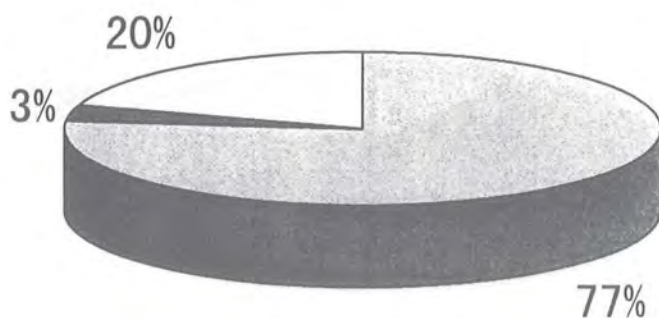
➔ POINT

- 市町村内と隣接市町村を合わせると3/4を占める。
- 県全域、全国・世界をエリアに活動するグループも、活動内容を見ると、国際交流以外は地域色が非常に濃い。

2-(1) サポートセンターの必要性を感じますか。

〈選択肢〉 1 はい 2 いいえ 3 よくわからない

サポートセンターの必要性



□はい(23件)

■いいえ(1件)

□よくわからない(6件)

➔ POINT

- 多くの団体が必要性を感じている。
- 「分からない」と答えた団体も2割を占めている。広く活動するためには、より分かりやすく具体的なものを提示することが必要と思われる。

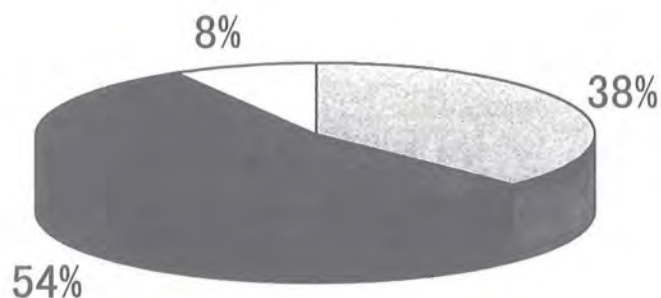
【その他意見】

- 様々なテーマを持つ各団体の共通点を見つけ出すのは困難ではないか。事務所等「場の提供」を行えば良いのでは。

2-(1) 「はい」と答えた方のみ（＝前の問いで「必要性を感じる」と答えた方のみ）、その関わり方についてお答えください。

〈選択肢〉 1 設立に積極的に関わりたい 2 設立されれば参加したい 3 その他

サポートセンターへの関わり方調査結果



□ 設立に積極的に関わりたい(9件)

■ 設立されれば活用したい(13件)

□ その他(2件)

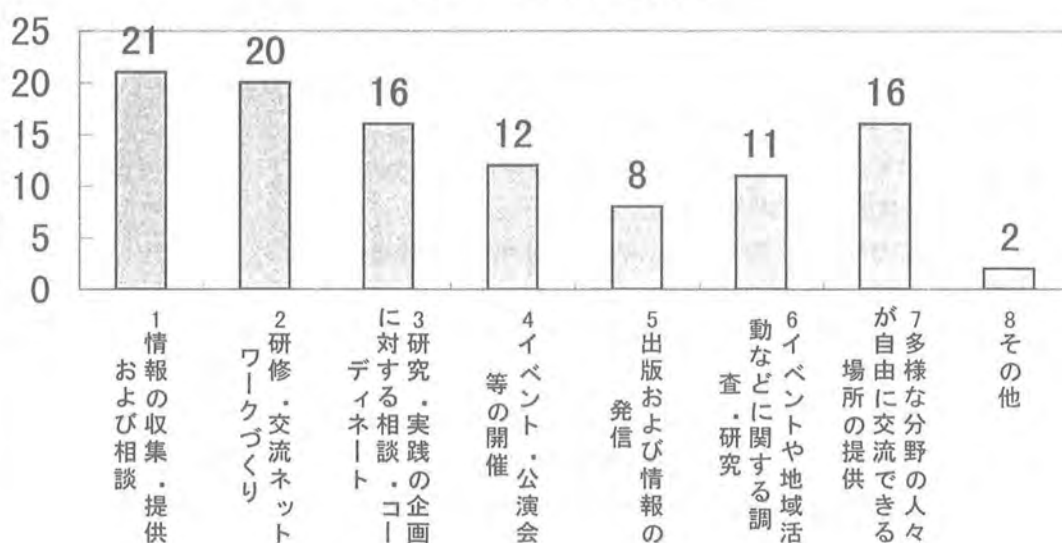
➔ POINT

- 必要性があると答えのうち、9割以上が何らかの関わりを持ちたいと考えている。
- 必要性があると答えながらも、設立への関わりに対する積極性は低い。人材資源の欠乏が懸念される。(個々の団体の問題・課題点でも、16団体が人材欠乏を挙げている)
- 受身的な関わりへの要望が多いことから、サポートセンターを気軽に便利に活用できるような場にすることが重要であると思われる。

2-(2) センターに対して期待する内容を、いくつでも選んで○をつけてください。

- 〈選択肢〉 1 情報の収集・提供および相談 2 研修・交流ネットワークづくり
 3 研究・実践の企画に対する相談・コーディネート 4 イベント・講演会等の開催
 5 出版及び情報の発信 6 イベントや地域活動などに関する調査・研究
 7 多様な分野の人々が自由に交流できる場所の提供 8 その他

センターに対する期待



➡ POINT

■ かなり分かれたが、「1 情報の収集・提供および相談」「2 研修・交流ネットワークづくり」が最も多い。個々のグループ活動では人や情報の範囲が狭くなっており、その問題を解消したいという要望が主を占めていることが分かる。

■ 相対的には、「4 イベント・講演会の開催」「5 出版および情報の発信」の要望は低く、広いターゲットに対して、的を絞った情報を発信するのは、あまり求められていない。個々のグループに見合った内容を個別に提供することの方が良いと思われる。

1-(7) 現在抱えている課題や問題はどのようなことですか。(自由記述)

- ・人材不足…16件
- ・財源不足…9件

➡ POINT

- 人材で悩んでいる団体が多い。
- サポートセンターの人材についても偏りや不足が予想される。
- 不況で合理化が推し進められる中、財源についても今後改善される見通しは少ないと思われる。

2-(3) 現在抱えている課題や問題はどのようなことですか。(自由記述)

- 行政の仕事・民間の仕事を分けて、経済という視点以外の、独自のまちづくりを行いたい。
- 現在は行政との対話が無い。新たな枠組みの必要性を感じる。
- HPの立ち上げを行い、人材交流支援の仕組みを作ってはどうか。
- まちづくりの具体的な提案があれば関わりたい。
- 与えられるものだけでなく、自らまちづくりの糸口を探すのが今後は必要。
- 湖北で考える前に、市町村の地固めができていないのか。
- できるだけ身近な活動・イベントの情報が知りたい。
- 世情から民活の必要性を感じる。
- 行政で作ったものは限界があり、完全に民間で運営できなければ駄目。
- 自分のまちづくりに関しては、自分たちで議論して考えたい。

等



【今後の方向性について】

- 1) まずは、多くの団体の共通点である、人・場所・情報の問題をサポートできるセンターが必要ではないか。
- 2) 小人数で、効率的に情報収集・提供できる仕組みづくり ⇒ 淡海ネットワークセンターとの連携、インターネット活用等
- 3) センター必要性があると考えている団体のより詳しいヒアリング調査から具体的な展開を模索。
- 4) 高齢者への情報提供方法(インターネットを使わない方への情報提供方法)を考えていくことが必要。

わくわく感動体験プログラムの

開発と仕組みづくり

～『こども』の生活環境からアプローチ～

グリーン・ツーリズム グループ

内田日出史・川尻良治・児島馨・澤九麻男
松田元・前川重和・森嶋利和・吉見精二

なぜ「グリーン・ツーリズム グループ」なのか!?

グループ研究をはじめるとあって、人々の地域間交流を新しい形で創りだすしくみづくりについて、地域づくりと観光、なかでも農山村と都会の人々の体験を通じた交流、つまり、グリーン・ツーリズムについて取り組もうと考えていた。一方で、一人の大人として、子どもたちの健やかな成長を願うとき、豊かな自然に触れ、体験や交流が可能な環境、そうしたことができる場づくりや提供するしくみづくりが必要なのではないかとも考えた。こうした流れのなかで、まず、子どもに焦点をあて総合的な学習の時間や休日を活用した取り組みを優先的に先行して進めることとした。グループの名はそういう形で生まれ、残されてきた。

目 次

第1章 グループ活動の歩んだ道	80
1-1 はじめに	82
1-2 グループ活動の経過	82
1-3 グループ活動の方向性	85
第2章 テーマ探しの道のり	86
2-1 マキノ町を通して	86
2-2 ヒアリングを通して	87
2-3 学校の取り組み状況	89
2-4 まとめ	90
第3章 研究会の立ち上げ	91
3-1 研究会の役割	91
3-2 研究会の方向性	93
第4章 グループ活動の歩む道	94
4-1 グループ活動の将来像	94
4-2 グループ活動を振り返って	95
参考資料	97
1 グループミーティングの記録	97
2 ヒアリングの記録	101
3 研究会への参加呼びかけの記録	105
4 研究会の記録	106

第1章 グループ活動の歩んだ道

1-1 はじめに

グリーン・ツーリズムグループは、2002年2~3月のグループ分けの際の意見交換を経て、4月の近江八幡での合宿において、本格的なスタートを切ることになった。メンバーは、それぞれ自らのフィールドや知識・経験を持ち、地域での活動を実践している者が多く、当然そこには熱い想いが込められていた。メンバーの住まいはみごとに滋賀県内各地に散らばっており、8人のグループ活動への取り組みが、地域・立場などの違う個々のこれまでの経験や想いをうまく形づくることができれば…と思うのであった。そして、さらに卒塾以降のそれぞれの活動に向けての足がかりとなることを期待していた。

メンバーの想いは、一言でいえば「身体で体験（主に自然体験）することを日常として取り戻していくことが大事なのではないか」ということだった。では、グループ活動として何をしていくか。まず、誰に焦点をあてるのか、それはやはり将来を担う「子どもたち」である。社会背景として、地域の人々や環境を活かした取り組みも各方面でますます必要とされ、展開されていく。そうした流れのなかで、自分たちの経験や想いをかなえていく方法を具体的に探していくこととなった。

1-2 グループ活動の経過

1年間のグループ活動を、例えば、事例研究として終えるのか、新たな枠組みづくりを目指して事業化をも視野に入れた活動をはじめめるのか、そうしたグループ活動の目標到達点の設定とそこまでの道のりをどうするのかの合意形成には時間を要した。

では、その間の歩みを簡単に整理してみると概ね以下ようになる。

最終活動テーマ決定までのプロセス

- ☆4月13日 第1回グループ・ミーティング
＜テーマ議論＞基本プランをベースに
・グリーン・ツーリズム・子ども体験学習
- ☆7月31日 第9回グループ・ミーティング
＜方向まとめ＞基本プランを特化
・子ども体験学習のコーディネート
- ☆10月10日 第13回グループ・ミーティング
＜最終目標＞ 研究プロジェクト設立
・「子ども感動体験学習研究会」設立

2002・4月 スタート

コンセンサス(ミーティング)

ミーティング(4/13, 14)

「体験的活動」をベースに「子ども」、「自然体験」「総合学習」をキーワードに活動を始める。議論を進める上でも、現場を知ることから始める

ミーティング(5/19)

「問題解決手法」の実技グループ体制の自己点検
問題点抽出
次回に各自マイプランを提出

ミーティング(6/25)

「水フォーラムへの参画検討」カヌーツーリング案(3泊4日)グループ活動の方向としての評価は疑問。引き続き検討

ミーティング(4/30)

学校と地域を結ぶコーディネーターや先生へのサポートの必要性などを議論、都市部の総合学習の取り組みへのヒアリング

ミーティング(6/6)

<マイプランの発表>
「カヌーで琵琶湖一周」企画
こども・総合学習のコーディネーター

ミーティング(7/13)

水フォーラム参加案の再検討
グループ活動としては難しい(方向性、規模など)
「感動体験学習」に絞ってはどうか

体験・調査活動(ヒアリング)

ヒアリング(4/30)

地域での一体的な取り組みを県内の先進地と言えるマキノ(小学校、教育委員会、民間施設)、子どもを取り巻く地域の実像

ヒアリング(6/12)

湘南学園(細谷氏)
過去に実施された「抱きしめて琵琶湖」イベントの内容と取り組みの把握(イベントプランの関連)

ヒアリング(7/22)

蒲生野考現倶楽部(井阪氏)
学校の教頭でもある氏の総合学習の取り組み状況とNPOの連携による総合学習の取り組み等

ヒアリング(5/17)

近江八幡・金田小学校(川瀬氏)、学校(先生)の総合学習に向けた取り組み状況や地域との関わりなど

ヒアリング(6/17)

NPO 夢～舞めんと滋賀(鈴木氏)、夢～舞めんと滋賀参加団体及び湖国 21 世紀記念事業協会
のその後の活動状況など

ヒアリング(7/31)

マキノ自然観察倶楽部(谷口氏)、氏が代表を務めるの倶楽部と地域の学校との連携に向けた取り組みと今後の展開など

活動テーマ化(企画まとめ)

<基本テーマ>

- 吉見提出案が基本テーマ
- ・地域・こども・ひとネットワーク
- ・地域の観光まちづくり
- ・総合学習の場づくり
- ・NPO などのネットワークづくり

「課題解決手法」実技(5/19)

- ねらい:グループが抱えている問題の洗いだし、課題を明らかにし、解決策を探る。
- ブレン・ストーンミングでの具体的コメント
- ・県内 NPO の数珠繋ぎ、ネットワーク化。
- ・体験交流、都市と農村の交流
- ・NPO とネットワーク化し、利用者へジョイントする
- ・事業の形態は NPO、会社の方法も

グループミーティング(7/31)

- ～吉見プランの再提出(修正分)
- グリーン・ツーリズムグループ研究について
- <議論展開>
- それまでの合意点
- ・グリーンツーリズム(農山漁村滞在交流)などの、体験プログラムを開発する。
- ・総合学習で利用する体験プログラムを、NPO とともに開発し学校へコーディネートする。
- ・学校 5 日制による土日の休日 2 日化にともない、子どもと家庭・親を対象に体験プログラムを開発する。

コンセンサス(ミーティング)

<p>ミーティング(7/31) 「感動体験学習システム」をテーマとして完成させる、総合学習や土日のプログラムの教育委員会への提案、NPOとのネットワーク化や共同でのプログラム開発</p>	<p>ミーティング(9/7) 水フォーラムへの参加の是非、マキノで何が出来るか再提案を待つ(内田)、グループ活動としては研究会の立ち上げを考えていこう</p>	<p>ミーティング(10/10) 実施プランの検討と具体化、「研究会」の設立を1月、「フォーラム」の実施を検討、中間発表会で発表・PR</p>
<p>ミーティング(8/17) 「生きている琵琶湖」を歌うなどマキノを舞台に企画案の検討、グループとしては難しい(規模など)ことを再確認、水フォーラムへの参画は今後検討課題とする</p>	<p>ミーティング(9/11) 水フォーラムには参加しない、研究会の設立~1月目標、学校・NPOとの協働を実現化する(コーディネートの役割を果たす目的)</p>	<p>ミーティング(10/18) 中間発表の準備 なぜ「研究会」なのか等やりたいことを明確に示す</p>

体験・調査活動(ヒアリング)

<p>ヒアリング(7/26) びわこネイチャーゲームの会(辻田氏)、教員でもある氏の自然体験プログラムの実践や総合学習へ向けた取り組みについて</p>	<p>ヒアリング(9/11) 県・教育委員会生涯学習課 週五日制のもとでの子どもの体験活動の実施状況の把握、現状の評価と今後の課題など</p>	<p>ヒアリング(10/4) 県・教育委員会生涯学習課 しが子どもの世紀3ヵ年プロジェクトや学校とNPOの連携に向けての今後の展望など</p>
<p>ヒアリング(8/29) VOICE(苗村氏) 国際交流を中心とする活動を通して、NPOとしての活動状況やその課題、地域との連携について</p>	<p>ヒアリング(9/26) NPO夢~舞めんと滋賀(鈴木氏)、NPO夢~舞めんと滋賀の今後の活動、総合学習との関わりなど</p>	<p>ヒアリング(11/5) 県・教育委員会学校教育課 学校や先生の総合学習に向けた取り組み、自然体験等のNPOとの連携について</p>

活動テーマ化(企画まとめ)

<p>○テーマの調整 ・研究テーマを、「(仮称)感動体験学習システムの開発研究」とし、体験学習プログラム開発に絞り込む。 ・NPOとのネットワーク形成により、体験学習プログラムの利用者への提供をコーディネートする。 ・グリーンツーリズムについては、ツーリズムのレベルで捉えて棚上げし、この時点では取り扱わないこととする。</p>	<p>グループミーティング(10/10) ~ 最新プランの提出 目的：活動方向の整理、具体的実施事項の決定を確認 内容：9月11日の会議での決定事項を確認 ○グリーンツーリズム活動の目標 総合学習の場づくりや土日の子どもの居場所づくり 学校・NPOとの協働、NPO数珠つなぎ ○中間発表会での発表 今までの活動、これからの取り組み、研究会の立ち上げ ○決定したこと ・教育委員会等への提案活動でアピールする ・先生、NPO、行政による研究会の立ち上げ ・先生とNPOを結ぶ勉強会をフォーラムの形式で開催 〔結論〕「研究会」1月、立ち上げ。フォーラム3月開催。</p>
--	--

結論・アクション

私たちのグループ研究テーマは、「子ども・ひと・地域ネットワーク」からスタートしている。新しいツーリズムによる観光まちづくりによって、大人には生涯学習、子どもには総合学習の場をつくりだし、地域とひと・子どもの間をつなぐプロデュースとコーディネートする、ひと・まち交流ネットワークを創りあげてゆこうというものだった。

その年に実施された滋賀県の21世紀記念事業「夢～舞めんと滋賀」に参加したNPOを始め地域のフィールド活動をネットワーク化して、広く利用できる仕組みを視野に入れていた。

1回目のグループ会議では、グリーン・ツーリズムと子ども感動体験学習の2本立てのテーマで熱く語られた。いま振り返ってもこの宿泊研修での議論で、ほぼ今日のかたちが出来上がっていたと言える。途中、アウトプットとしてのイベント的な企画の是非やその内容について検討を重ねたが、イベントはスケールの大きさをやむなきに至った。また、水フォーラムに小さなイベントで参加することも考えたが実施には至らなかった。

グループ編成から3ヶ月後、グリーン・ツーリズムを棚上げして子どもたちに未来の大人の夢をえがいて、子ども対象の感動体験学習に特化していった。やはり、始めから子どもの問題に関心が高かったからだといえる。

グループ活動は、地域と深く関わって研究を深めることにした。メンバーの中には4人のフィールド実践者がいたが、その中からマキノ町を選んだ。マキノ町の東小学校の子どもカヌー体験がその後の研究のベースになった。マキノ町は、町中が学びのテーマに満ちていて、多くの人に出会い多くを学ばせてもらった。

マキノ町を始まりとして、学校における総合学習とNPOの活動を何とかうまくコーディネートする仕組みをつくりたいと考え、学校訪問とNPOへのヒアリングを重ねた。

この年から始まった、生きる力を育むことを目的にした「総合的な学習の時間」は、創意工夫を生かした柔軟性のある教育づくりが求められているのだと思った。

学校訪問や新聞の記事によると各学校では「総合的な学習の時間」の授業方法についていろいろと試行を行っているようである。教科書がない授業であるため先生にはアイデアと力の出しどころであり、そのため地域社会などの支援が必要となってきたように感じた。そのためには、この「総合的な学習の時間」へのカリキュラム作成の支援として、NPOを始めとする地域において様々な体験プログラムが用意されるべきであると強く確信をもつに至った。

子どもたちには、自然やほんものに触れ自由に遊ぶ経験が学校とは違った「生きる力」を育てていくのだと思う。そのために安全に遊べる環境とプログラムを作っていくことが、地域と大人に課せられた役割だと思った。そこで、「子ども感動体験学習研究会」の設立を実現することに取り組み、将来に向けてのおもいの展開を図ることとした。

第2章 テーマ探しの道のり

2-1 マキノ町を通して～「子ども感動体験学習」先進地域から学んだこと

自然や風物に恵まれた観光のまち、交通の要衝として古くから開けた文化・歴史のまちとしても知られているマキノ。一方で、その立地条件から人口減や産業の活性化の問題にも直面するという厳しい現実も抱えている。このように都市部からは離れているが、豊かな自然、歴史、文化に恵まれ、自らの力で地域を創っていくことが可能と考えられるまちにおいて、いったい子どもたちはどのような環境に置かれているのであろうか…。学校や地域が濃密に関わり合いながら、子どもの成長を育てているのではないだろうか…。

○ 学校での取り組み

地域の人達が地元の自然や風物を活かしながら、子どもの成長に深く関わり、地域づくりを進めていこうとしているように思われた。しかしながら、それ以上に教育に携わる関係者の方々の熱意と努力がマキノ独特の雰囲気醸成を醸成している。

マキノ東小では、琵琶湖に面する学校という利点を活かして、カヌーを取り入れた学習に取り組まれている。直接、琵琶湖の水に触れ自分の力でこぎ出すカヌーは、子どもの心を解き放し、心身共に健やかな育ちが期待される。また、総合学習には「びわ湖学習」や「ふれあい学習」として琵琶湖や地元の池沼、野原等の現地を訪れ、また地域の人達との交流の中で自らの目と耳で確かめ課題を発見する仕掛けがきちんと構築されている。

次に、山間部の小規模校であるマキノ北小では、地元の農家や高齢者の方々に協力してもらいながら、地域の生活実感と離れた子ども達に、もう一度自らの生活する場を見つめ直してもらい取り組みを始めている。また、山間の小規模校の立地条件をカバーするためのツールとしてパソコンを使って、他地域の子ども達との交流を行っている。

○ 学校週五日制に伴う土日をどう活かすか

総合学習を中心とした学校の取り組みとともに、他方では週五日制の実施に伴う土日の子ども達の学びや遊びの場の提供に、地域住民や活動団体が取り組んでいる。マキノ町にはこうした住民活動の拠点として、JRマキノ駅前に「マキノ町まちづくりネットワークセンター」が設置され、マキノ町の自然や歴史、文化を紹介した「ぎっとまって」の発行を初めとする情報発信や交流機会の創出など、積極的な取り組みがなされている。また、赤坂山を始めとするマキノの自然と触れあう活動を行っている「マキノ自然観察倶楽部」は、土日を地域で過ごす子ども達への自然ガイドとして、貴重な役割を果たしている。

また、マキノ東小のPTAが中心になり取り組んでいる「マキノの夢の森」づくり構想もスタートし、いずれ子どもも大人も楽しめる自然体験活動の拠点として期待されている。

この他、すでに琵琶湖畔にオープンをした奥琵琶湖マキノパークホテル・セミナーハウスは、カヤックやカッター類を備え、宿泊研修が可能な施設である。子どもの臨海学校や合宿にも活用が可能な施設類が整備されるなど、子ども達の学習環境が整いつつある。

地域	<p>○マキノ町</p> <p>(教育委員会)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然・文化を活かした地域振興 ・拠点となるまちづくりネットワークセンターの設置 ・親子で貴重な体験ができるしかけづくり 	<p>○マキノ自然観察倶楽部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化や自然への理解として自然に触れるプログラムを提供 ・人材養成(インタープリター養成講座)を実施 ・学校教育課—学校というルートをつくる必要性 ・現状のNPOにどれだけ受け入れ可能か疑問 	<p>○びわこネイチャーゲームの会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然体験活動団体のネットワークは必要 ・体験プログラムの学校への売込には至らず ・学校との信頼関係の構築 ・NPOは理念とあわせて実績となる活動やマネージメントカも重要 ・学校へはトップダウンで
	<p>学校</p> <p>(小学校)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合学習は「ふれあい学習」と「びわこ学習」で～地域の自然や環境を現地調査 ・土日は民間の動きに期待 ・子どもの生活は都会の子と変わらない ～豊かな自然環境を理解し愛する心を育む ITを活用し県外との交流促進 <p>(民間 体験施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・民間による宿泊が可能でカヌーなどの体験施設が琵琶湖に面して立地 <p>(前ページ参照)</p>	<p>○大津フリースクール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こどもの居場所づくり ～自主性の尊重、創造力の発揮など ・特徴的活動を模索 ～土日に向けた体験学習の場など ・学校との連携や親の理解 ・学校は先生、特に学校長次第で変わる ・自ら楽しむことが大事 ～人との出会いなど 	<p>○金田小学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先生が地域の題材探しに進んで地域に出かけるなどしている ・人材バンク、コーディネーターの必要性 ・学習の方向づけは先生 ・土日に向けて ～公民館事業の周知・参加、そのための人材確保、地域コーディネーター
行政	<p>○県・学校教育課</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習先としてのNPOの集中化 ・双方の不慣れからカリキュラムとして不十分な段階 ～個々の学校にあわせた計画段階から両者でのプログラムづくりが必要 ・学校と地域・NPOを結ぶコーディネーターが必要 ・自主的な教育研究会(総合的学習部会)がある 		

ヒアリングや見学を通して得られたポイントを整理してみると概ね次のようになる。
 (一部省略、各ヒアリングのまとめは参考資料を参照)

○蒲生野考現倶楽部

- ・総合学習は教科の土台の上に立ち関連付けが求められる
- ・学校はNPOとどう連携すればいいかわからない、NPOを理解できていない面もある
- ・現状ではエキスだけで不十分、全体の流れを考えないとダメ
- ・総合学習の一部をNPOに委ねることは可能、そのためのニーズにあったプログラムづくり
- ・音楽や美術などは受入れやすい
- ・NPOには発想や理念はあるが、体系的なプログラムがない
- ・コーディネーターの力が重要
- ・土日の社会教育の分野ではNPOも関わりやすい
- ・緊急雇用の地域コーディネーター制度では適切な人材を得るのは難しいし継続性が保証されていない

○CASN

- ・子どもと対等に向き合える大人を育てることがミッション
- ・子どもの声に耳を傾ける、そうすれば自分で答えを出すもの
- ・団体鑑賞のプログラムをつくり取扱料による資金確保を検討
- ・教材のコーディネート
- ・子どもは時間をかければ自分で遊ぶから、ゆっくり見守る大人とフィールドがあれば可能

○子どもの美術教育をサポートする会

- ・外部の専門家を交えた小学校の新しい授業の取り組みを実践
 ～例) 鳥獣人物戯画図を通し、日本のアニメーションの始まり、動く絵の始まりとして捉え当時の遊びを楽しみ、その後、あぶり出しに挑戦する

○NPO 夢～舞めんと滋賀

- ・ポスト夢～舞めんととの位置づけ
 ～多くの人の認知と利用を目指したネットワークづくり
- ・滋賀のNPOの将来を構想している
 ～リージョナルスタンダード事業の実施
 ～まちづくり、地域おこしに関わり、コミュニティビジネスの研究、情報発信を事業化
- ・総合学習との関わり
 ～採算的には厳しく、学校に受け入れられるためのプログラムづくりが必要、先生との連携が欠かせない
- ・旅行会社とNPOの連携事業
 ～総合的学習の一環としての位置づけ、ツアー商品化
- ・マストツーリズムの質的な変化
 ～地域性や文化のみせ方、ホンモノ志向の地域の売り方、地域の人の登場など

○県・生涯教育課

- ・「しが子どもの世紀3カ年プロジェクト」
 ～地域コーディネーター、学校コーディネーター、県地域教育力体験活動推進協議会・地域教育協議会の相互連携
- ・学校・地域・NPOが同じテーブルにつく、コーディネーターが必要
- ・学校5日制による土日の休み、平日の放課後、子どもの生活全体としてのとらえかたが必要
- ・公民館事業や生涯学習にも子どもの視点がある
 ～世代交流、学びの場、子どもの居場所という視点

○ 総合的な学習

ねらい：知識を教え込む授業ではなく、自ら学び、自ら考える力を育成するとともに学び方や調べ方を身に付けることにあり、自ら課題を設けて行う学習や将来の生き方を考える学習が積極的に行われる。

内容：地域や学校、子ども達の実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間とするものであり、例えば福祉・健康、環境、国際理解、情報など従来の教科をまたがるような課題に関する学習を行える時間として新しく設けられた。この時間では、子ども達が各教科の学習で得た個々の知識を結びつけ、総合的に働かせることができるようにすることを目指している。授業時間は、小学校では3年生以上から週3時間程度、中学校では週2～4時間

国が一律に内容を示しておらず、その内容や名称も各学校が創意工夫を発揮して決めることができるところにある。また、従来の教科のように教科書もなく、自然体験やボランティア活動などの体験的な学習や問題解決的な学習が積極的に行われ、グループ学習や異年齢集団による学習、地域の人々の参加による学習、地域の自然や施設を積極的に生かした学習など、多様な学習が行われる。

県教育委員会の方針：

平成14年度の学校教育の指針として、以下の五点を掲げている。

- ①豊かな心をはぐくむ体験的学習の推進
- ②自ら考え行動できる力の育成を目指す環境教育の推進
- ③人が輝く人権教育の推進
- ④地域に開き、地域に応える学校の創造
- ⑤自己指導力の育成を目指す生徒指導の推進

○ 学校週五日制

ねらい：1992年以来、段階的に拡大してきた週五日制は、2002年度からは「完全学校週五日制」が施行され、土日を利用しながら地域社会や家庭で子ども達が自然体験や生活体験、社会体験、文化・スポーツ活動に従事するなど、様々な取り組みが始まっている。県では完全週五日制の施行に合わせて「しが子どもの世紀3カ年プロジェクト」を推進している。公民館や学校などを中心に地域社会で子ども達の様々な体験活動を推進しようとするものである。

内容：子ども達の活動の機会と場の拡大を目指して、市町村における地域教育力体験活動推進体制の整備や「地域コミュニティコーディネーター」の配置・研修の実施、県における「地域教育力体験推進協議会」の設置、学校教員・地域コミュニティコーディネーターの研修などが実施されている。

家庭教育の再生を目指して、市町村における子育て学習機会の提供や公民館等における子育て学習の促進が実施されている。

ONPO・学校の関わり方の現況

我々が聴取した「蒲生野考現倶楽部」や「びわこネイチャーゲームの会」など体験活動を実施するNPO等の諸活動は多くあるが、学校の授業時間に関わるころまでは入っていない。どちらかといえば、土日を中心とした学校外活動にそのフィールドを提供しているのが現状である。まだまだNPOサイドも子ども達に合わせた学習プログラム開発は十分ではなく、更に教科との関連性を持たせた総合的学習の時間のカリキュラム作成までは手が着いていない状況にある。学校側も地域や外国人の人達をゲストティチャーとして招いている段階であり、NPOなどの現場で子ども達が様々な体験学習をできるまでには至っていない。

この点、「子どもの美術教育をサポートする会」の活動は、体験の重要性について大きな示唆を与え、学校と地域人材との関わり方の一つのモデルとなる可能性を有している。学校現場に美術館や博物館の第一線の学芸員が入り、子ども達が本物の絵画等に触れ、自ら感動を呼び覚ましながら授業を進めるやり方は新鮮な驚きを与えてくれる。

○ 取組むべき課題

[総合学習]

これまでのように学習指導要領に定められた内容を現場に適用するだけではなく、どのように地域の自然や文化などの教育資源を学習プログラム化していくのか、また、どのように地域の文化施設や社会教育施設を活用した学習活動を展開するのか、子ども達とともにどのように学習内容を創っていくのか、地域や住民とどのように関わり、地域の人材を学校教育の場へどう活かしていくのかなど、未体験の事柄が多く、教員は戸惑いを隠せないというのが率直な印象である。

もちろん、これまでから地域との信頼関係を築いている学校や体験的学習に熱心に取り組んでこられた先生方は、子どもの興味・関心を育てながら、授業の内容や地域の人材の活かし方に工夫を凝らし、子どもの力を着実に伸ばされている。そうした意味では、学校間あるいは先生間の取り組みに格差が大きく、それに応じて子どもの成長にも関わってくるのではないかと危惧がある。

[土日の対応]

土日の子どもたちを対象とした事業活動は各地で実施されているが、蒲生野考現倶楽部では、さらに本年度から廃校になった学校を活用した「しゃくなげ学校」を開校し、子どもの自然体験活動を拡大実施されようとしている。このように学校週五日制は、多くのNPOにとって、そのフィールドを活かした事業機会の拡大のチャンスを与えるものである。家庭、地域、学校の適切な役割分担の中で、将来を担う子どもの生きる力を各種の体験活動から得るための方策を関係者が一堂に会して探っていくべき時であろう。

第3章 研究会の立ち上げ

3-1 研究会の役割

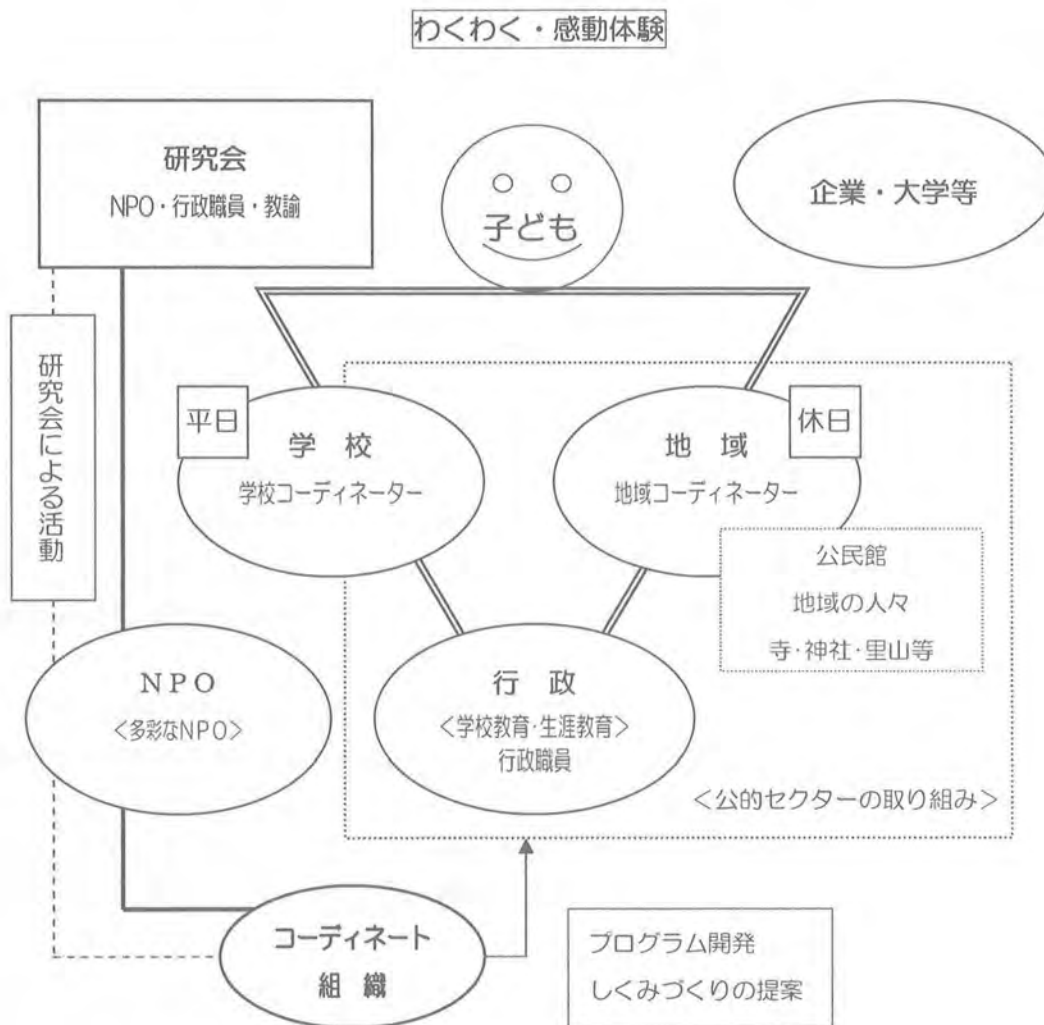
子どもたちには、自然やほんものに触れ自由に遊ぶ経験が学校とは違った「生きる力」を育てていくのだと思う。そのために安全に遊べる環境とプログラムを作っていくことが、地域と大人に課せられた役割だと思った。子どもたちの「生きる力」を育むには、学校と家庭を支える第3の場の活躍なくして考えられないといわれている

いま、地域の中で子どもたちが自ら育つことを助けるNPOなどの働きが大いに期待されている。多くのNPOの得意分野に自然感動体験のプログラムがある。自然体験は子どもにとって多くの発見や感動を与えてくれる。いまの子どもは「バーチャルな環境」に囲まれていて自然体験の不足が顕著になっているといわれている。いま、子どもたちの「生きる力」「豊かなこころ」を育むためには、身近で「多様な体験」や「ほんもの体験」が可能であることが重要ではないだろうか。現代の子どもたちが「自然に学ぶ」機会を演出できたらと思う。そのことに大人が、少し手を貸すだけで子どもたちは自ら学ぶことだろう。

すでに、学校では、NPOや市民活動団体を積極的に活用されることが考えられているという。地域でも、土曜・日曜日の休日は、子どもや家族を対象にした対応も同じように期待されている。そのためには、NPOや市民活動団体は、各種プログラムを提案するとともに、コーディネート力を発揮して期待に応えて行かなければならない。そこで、学校に対し総合学習を支援する体験学習プログラムと、子ども、家庭・保護者に学校の土曜・日曜日に活用できる体験プログラムの開発と仕組みを考える研究会を設立することをグループ研究の当面のテーマにして活動をしてきた。

研究会は、NPO、教員、県教委職員、行政職員などに参加を得ることができて発足に至った。今後、研究会は「子ども感動体験学習」について学校・地域とNPOとうまく連携をとってプログラムや仕組みづくりについて議論して行く。研究会では、それぞれの立場で参加しているメンバーが専門分野の経験をもってフラットな立場で話し合っ、土日の子どもの活動の場づくりと総合的な学習に、教師の負担が軽減され効率的な授業ができるカリキュラムについて、学校とNPOの立場や考えの違いを超えて理解し合えるようなしくみを提案する方向にもって行って欲しいと願っている。これをコーディネートするわれわれは、NPO・市民活動団体とのネットワークの形成を図り、感動体験学習のバージョンを広げて学校や家庭・保護者の意見を反映しながら、利用可能なプログラムを提案することを具現化して行きたい。

【子ども感動体験学習研究会の位置づけ】



[目的] 子ども感動体験学習の場づくり

[コンセプト] 子どもたちに“未来の大人”の夢をえがく

[研究の内容] ・学校での総合的学習のなかで利用可能な体験プログラムを、NPOや市民活動団体とともに開発するコーディネーターの役割について研究する。
 ・学校5日制による土日休日2日化にともない、子どもと家庭・親を対象に利用可能な体験プログラムの開発と提供システムを研究する。

3-2 研究会の方向性

研究会のメンバー構成は、大きく分けて教育関係、NPO、コーディネート組織である。この三角関係で立場の違う状況を相互理解しながら、子どもに感動体験の機会が提供できるプログラムや仕組みづくりに取組んでいきたい。

研究会のメンバーはそれぞれの持ち場で課題を持っている。学校教育の関連では総合的な学習の時間にNPOと連携を図ることで効果的・効率的な授業がすすめられるだろう。また、社会教育の関連では「しが子どもの世紀3ヵ年プロジェクト」の施策なかでの地域のコミュニティコーディネーターと学校側のコーディネーターとの連携、そしてNPOとの連携についても課題として話し合うことができる。

NPOにとっては、NPOの活動の理解を深めてもらい、学校や地域のニーズを吸収することでNPOとしての新しい展開を図れることにもなる。すなわち、研究会は、それぞれの立場で有意義な場として活用ができるのではないか。

そして、研究会の目標としていきたいことは、地域と学校の連携の役目をするコーディネーターをバックアップするために設置されている地域教育力体験活動推進協議会や体験活動支援センターへの提案をまとめることを実現させたいということがある。また、体験活動支援センターの活動とうまく整合してゆけば、そういう仕組みと連動した体制を整備しなくてはならないことも出てくるであろう。

研究会のまとめを受けて、活動グループにも活動範囲が広がって活動に転機が来ることも想定すると研究会の役割は大きく、コーディネートするわれわれの活動グループの研究会への提案も熟慮されたものでなくてはならない。

そして、より多くのNPOへのアプローチにより活用可能でニーズに合った多彩なプログラムづくりに努めなければならない。また、納得性のあるプログラムとしてモデル的に利用されることを実現し評価を得なければいけない。

学校での利用を容易にするためには、学校の最高責任者である校長へのヒアリング調査や、校長会などへ意見交歓会などを設けてアピール活動を積極的に取組む必要がある。先生に参加してもらおう感動体験学習フォーラムや、NPOとの交流会も企画して、先生のNPOへの認識を深めてもらう活動を実践していきたい。

第4章 グループ活動の歩む道

4-1 グループ活動の将来像

おうみ未来塾を卒業しても、当然、グループ活動としては継続して行くのであるが、メンバーそれぞれにとっては地域でNPOとしての活動に全力を傾ける立場や、フィールドを持たないがコーディネート分野で得意能力を発揮してみようなど、いろんな自分の活かし方がある。

われわれのグループは研究会にテーマづくりから課題解決まで頼るようなスタンスではいけない。自ら動き、新しい情報を研究会に提供する役割を担っている。

また、研究会から出る課題の調査やまとめもしなければならない。事務局だけでなく、NPOへの参加のアプローチ、学校へのニーズ聞き取り調査やプログラムの提案などプロモーションもこなさないといけない。だれが、時間を割いてやるのかは課題である。調査や提案活動にも経費が必要である。活動資金はどうするのか。どんな組織が望ましいのか。継続してグループ活動に参加する人にも考えの違いがあるだろう。少なくとも助成金の取れる任意団体の体裁を整えることも志向してゆくことが考えられる。

ここまで来ると、グループ活動の域を超えて事業型のNPOとしていろんなNPOとプロジェクトでつながって行くことが重要になってくる。よく、NPOを支援するNPOと言われるが、われわれの役割はNPOとNPOをつないで協働で事業をするようなタイプをめざして行くのが良いと思われる。NPOが単体では出来ないことをプロジェクトをつなげてパワーアップすることが大切になってきていると思われる。内需型のNPOも広場に集まってもらう場づくりができれば良いと考える。

いろいろと整理しなければならない課題があるが、走りながら考えることにしてよいのではないかと。いずれにしても、感動体験学習プログラムが利用可能なものになった時は、コーディネートを担わなければならない。お金のやり取りが発生する事も出てくるだろう。有償の仲介はコミュニティビジネスに発展することも可能になるのではないかと。しかし、収益が出る事業にはならないだろう。公益事業も継続のためには最低限のお金の流れは作る必要があるため、そのための仕組みづくりについて考える必要がある。

また、県体験活動支援センターや淡海ネットワークセンターの一部の事業を受託し、併せて県体験施設の手配センター機能などの委託を受け、総合的な「ユース感動体験学習センター」として幅広い事業に発展させる夢をいだいてもいいと考える。

グループ活動を振り返って…

グループメンバーのそれぞれの言葉で、これまでの活動や今後の活動などについて、まとめることとしたい。

今後のグループ活動については、現在NPOが実施している事業をネットワークの体験学習メニューに登録し、地域や学校での行事のプログラムとして利用する仕組みをつくる。NPO等のメニュー提供者と行政、学校、地域等の利用者とをネットワーク化してプログラムをコーディネートするといったことがあげられる。

個人として今後の活動は、NPO側の体験学習の提供者として、職場でも小学生を対象とした施設見学、体験学習会や中学生を対象にした職場体験を実施しているので研究会でのアドバイスを得てプログラムに役立てて行きたいと考えている。

(森嶋利和)

これからは大人と子供が共に遊べる生活体制が確立できよう子供感動体験学習の場づくりをしなければならないと思います。近い将来行政に頼らない自己の能力を他者のために利用していただくNPO組織のような非営利活動を推進していき、私には何々ができますといった講師登録をし、出前講師の育成に力を注ぎ、地域に活力がないのは大人達に夢がないからだと自分に言い聞かせ、大人も子供も共通した仕事の体験学習をし、未来塾生のメンバーが県下一円に活動の場を広げるように淡海ネットワークセンターと共に「夢はここから」という気持ちで何事にも挑戦したいと思います。

(澤九麻男)

個人の今後の活動としては、マキノ、湖西を中心に「本物教育」を行う機関運営に携わっていく。湖西地域でモデル事業として指定された「マキノの夢の森づくり」を生かして、農林漁業の再生と新産業の創出を地元を中心に取り組む。

グループの活動としては、「大自然の中で生かされている人間」を実感する滋賀県におけるグリーンツーリズムやエコツーリズムは感動体験を伴い、ますますこれから地域の要になると思う。

「子どもの感動」を演出するのは、「大人の感動」ととらえて、「大人が本当に純粋な感性を発揮する場面や研修」をセッティングするリアル体験が必要ではないか。

(内田日出史)

最後に…

最後に、今後のグループとして活動は、「子ども感動体験学習研究会」との関わりを中心に継続されるものであるが、それぞれ個人の立場としては、卒業後も継続して取り組むことになる者、グループ活動には参加しないけれども自分のフィールド活動を中心に置きながらNPOとしてプロジェクトと関わりを持っていく者などに分かれるなど関わり方は異なることも考えられる。グループ活動に参加する者もNPOとしてやってゆくことがベターであるし、また、NPOのフィールドは未だ持たないがコーディネーターとして得意分野を受け持つのも良いことだと思う。

研究会の議論は、いずれ提案としてまとめ、しかるべき行政機関や、そこを通じて学校や地域に対してNPOの受け入れ活動についてアピールし、相互のつながりを築いて行く必要が生まれる可能性がある。我々の役割としては、研究会への積極的な提案や、NPOの参加やプログラムづくりを具体化して行くことが必要なることだろう。そうしたなかで、今後の活動も、当面は淡海ネットワークセンターの後援を得なければ身分的に信用性がないことになるので引き続き連携を密にして行く必要があり、また、未来塾で築くことができた多くの思いを同じくする人との関係をより強くしていくことが重要である。このプロジェクトを事業型のNPOに発展させて行くことを視野に入れて、引き続き取り組んで行くこととしたい。

1 グループミーティングの記録

〔第1回〕 宿泊研修

とき：2002年4月13日～14日 ところ：近江八幡

(まとめ)

- ・プランの提示（吉見）
- ・新しい形のツーリズムとは？、子どもを中心にした体験活動が必要ではないか？
- ⇒・総合学習のコーディネーターを目指す方向で考えていく
- ・総合学習の現場を見学することからはじめよう

〔第2回〕 マキノのヒアリングを終えて

とき：2002年4月30日 ところ：マキノ

(まとめ)

- ・プランの再提示（吉見）～「コト起こし（事業化）」案など
 - ⇒・今度は都市部の総合学習についてのヒアリングをしよう
- (ヒアリングを受けて)
- ・先生の悩みの受け皿づくりが必要なのでは？
 - ・学校と地域を結ぶコーディネーターが必要なのでは？
 - ・先生を対象にした研修会の開催が必要なのでは？
 - ・土日の子どもの生活にも対応できるプログラムづくりが必要なのでは？

〔第3回〕 相互理解を深めよう

とき：2002年5月16日 ところ：淡海ネットワークセンター

(まとめ)

- ⇒・企画案の絞込みをやりながら、具体的なイメージをまとめていこう
 - ・グループ運営の問題整理を「課題解決手法」の機会を利用してやろう
- (情報交換)
- ・地域コーディネーターについて（内田）

〔第4回〕小学校のヒアリングを終えて

とき：2002年5月17日 ところ：近江八幡

(まとめ)

- ⇒・理念しっかり固め、事業化へ向けた取り組みをしていこう
- ・総合学習への具体的なアプローチを考えて～交流や体験ができるものへ～
- ・学校が総合学習にお金を使える仕組みを提案したい
- ・NPOのネットワークづくりも必要になってくる

〔第5回〕「課題解決手法（講義）」を終えて

とき：2002年5月19日 ところ：淡海ネットワークセンター

(主な課題)

- 「合意形成がまだまだできていない」
- ・活動の進め方に問題がある
(情報交換・共有不足など)
- ・活動の方向性がみえない
(基本理念、企画、マーケティングなど)

(まとめ)

- ⇒・個々に改めてプランを出し、議論を深める

〔第6回〕「マイプラン」を出し合う（その1）

とき：2002年6月6日 ところ：淡海ネットワークセンター

(まとめ)

- 「マイプランの発表」
- ・内田案の検討
体験を通じて～「カヌーで琵琶湖一周」(水フォーラム)
- ・川尻案の検討
NPOのネットワーク化+こども総合学習の企画し、コーディネートする
- ⇒・内田案の再検討(規模、実施時期など)
- ・「抱きしめて琵琶湖」の生みの親(湘南学園・細谷氏)にヒアリングする

〔第7回〕「マイプラン」を出し合う（その2）

とき：2002年6月25日 ところ：淡海ネットワークセンター

（まとめ）

- ・内田案の再検討（水フォーラムへの参画、カヌーツーリング（3泊4日））
- ⇒・グループ活動の方向としての評価（グリーンツーリズムと関係性など）
- ・参画する、しないの判断の時期ではないので、引き続き検討

〔第8回〕

とき：2002年7月13日 ところ：安土

（まとめ）

- ・内田案の再検討
- ⇒・グループ活動としては難しい（方向性、規模など）
- ・行政・教育機関・公民館との連携による「感動体験学習」に絞ってはどうか

〔第9回〕

とき：2002年7月31日 ところ：淡海ネットワークセンター

（まとめ）

- ・吉見案の再検討
- ⇒・「感動体験学習システム」をテーマとして完成させる
- ・総合学習や土日のプログラムの教育委員会への提案
- ・NPOとのネットワーク化や共同でのプログラム開発

〔第10回〕 県外研修

とき：2002年8月17日 ところ：福井県大野市

（まとめ）

- ・内田案の再検討（加藤登紀子と「生きている琵琶湖」を歌う・・・案など）
- ・「マキノせせらぎ会議」などを通したマキノを舞台にした企画案の検討
- ⇒・グループ活動としては難しい（方向性、規模など）…再確認
- ・水フォーラムへの参画は今後検討課題とする

〔第11回〕

とき：2002年9月7日 ところ：淡海ネットワークセンター
(まとめ)

- ・吉見案の再検討
- ・水フォーラムへの参加の是非
- ・マキノで何ができるか再提案を(内田)
- ⇒ グループ活動としては研究会の立ち上げを考えていこう
- ・マキノでの企画案を待つ
- ・中間発表は、「感動体験学習システム」をテーマ
今後、具体的な検討を進める

〔第12回〕

とき：2002年9月11日 ところ：淡海ネットワークセンター
(まとめ)

- ・水フォーラムには参加しない
- ⇒ 研究会の設立～1月目標
学校・NPOとの協働を実現化する(コーディネートの役割を果たす)
- ・フォーラムの開催～3月目標
「感動体験」をテーマに、3月頃、NPO・先生の交流の場をセット

〔第13回〕

とき：2002年10月10日 ところ：淡海ネットワークセンター
(まとめ)

- ・実施プランの検討と具体化
「研究会」の設立・1月
「フォーラム」の実施・3月
- ⇒ 中間発表で発表・PR

〔第14回〕

とき：2002年10月18日 ところ：淡海ネットワークセンター
(まとめ)

- ・中間発表の準備
- ・なぜ研究会なのか、なぜフォーラムなのか
- ⇒ やりたいことを明確に示す

2 ヒアリングの記録

○ NPO・学校・行政等へのヒアリング

ヒアリング① (4/30)

マキノ東小学校、北小学校。マキノ町社会教育課。

〈テーマ〉「総合的な学習の現状把握とフィールドの研究」

地域での一体的な取り組みを県内の先進地と言えるマキノ(小学校、教育委員会、民間施設)、子どもを取り巻く地域の実像

ヒアリング② (5/16)

〈テーマ〉「フリースクール・冒険クラブの現状」

大津フリースクール(永谷氏)、

子どもに対する周りの大人たちの関わり方や学校との連携についてなど

ヒアリング③ (5/17)

〈テーマ〉「都会周辺の小学校における総合学習と地域の関わりについて」

近江八幡・金田小学校(川瀬氏)、

学校(先生)の総合学習に向けた取り組み状況や地域との関わりなど

ヒアリング④ (6/12)

〈テーマ〉「メンバーのイベント企画提案に関連して過去の事例を聞き取り」

湘南学園(細谷氏)、

過去に実施された「抱きしめて琵琶湖」イベントの内容と取り組みの把握を行った(イベントプランの関連)

ヒアリング⑤ (6/17)

〈テーマ〉「前年実施の夢～舞めんと滋賀の参加団体についての調査」

NPO夢～舞めんと滋賀(鈴木氏)

夢～舞めんと滋賀参加団体及び湖国21世紀記念事業協会のその後の活動など

ヒアリング⑥ (7/22)

〈テーマ〉「総合的な学習へのNPOの関わり方の方向性について」

蒲生野考現倶楽部(井阪氏)

小学校の教頭でもある氏の総合学習の取り組み状況とNPOの連携による総合学習の取り組み等

ヒアリング⑦ (7/26)

〈テーマ〉「総合的な学習とNPOフィールドの関わり方の可能性について」

びわこネイチャーゲームの会(辻田氏)

教員でもある氏の自然体験プログラムの実践や総合学習へ向けた取り組みについて

ヒアリング⑧ (7/31)

＜テーマ＞「マキノ自然観察倶楽部の活動と総合学習の受入について」
マキノ自然観察倶楽部(谷口氏)
代表を務めるの倶楽部と地域、学校との連携に向けた取り組みと今後の展開など

ヒアリング⑨ (8/29)

＜テーマ＞「NPOの国際交流分野での取り組みの内容について」
VOICE(苗村氏)、
国際交流を中心とする活動を通して、NPOとしての活動状況やその課題、地域との連携についてなど

ヒアリング⑩ (9/6)

＜テーマ＞「事業型NPOの活動状況について」
HCCグループ(末富氏)
NPOの活動状況と進める上での課題、NPOの事業化に向けた取り組みなど

ヒアリング⑪ (9/10)

＜テーマ＞「子ども対象のプログラム開発の可能性について」
CASN(谷口氏)
子どもを対象に活動するNPOの活動状況やこれからの展開、子どもとその取り巻く環境など

ヒアリング⑫ (9/11)

＜テーマ＞「総合学習の取組みについてのヒアリング」
県・教育委員会生涯学習課
週五日制の下での子どもの体験活動の実施状況の把握、現状の評価と課題など

ヒアリング⑬ (9/26)

＜テーマ＞「新しいNPOの設立趣旨、活動方針について」
NPO夢～舞めんと滋賀(鈴木氏)
NPO夢～舞めんと滋賀の今後の活動、総合学習との関わりなど

ヒアリング⑭ (10/4)

＜テーマ＞「子ども感動体験学習とNPOの関わり方について」
県・教育委員会生涯学習課
しが子どもの世紀3カ年プロジェクトや学校とNPOの連携に向けての今後の展望など

3つの林檎